



清俗紀聞

第六

數帙	卷之十二 祭禮	卷之十三 僧徒	以上六本大
----	---------	---------	-------



301-6
301-6

清俗紀聞卷之十二

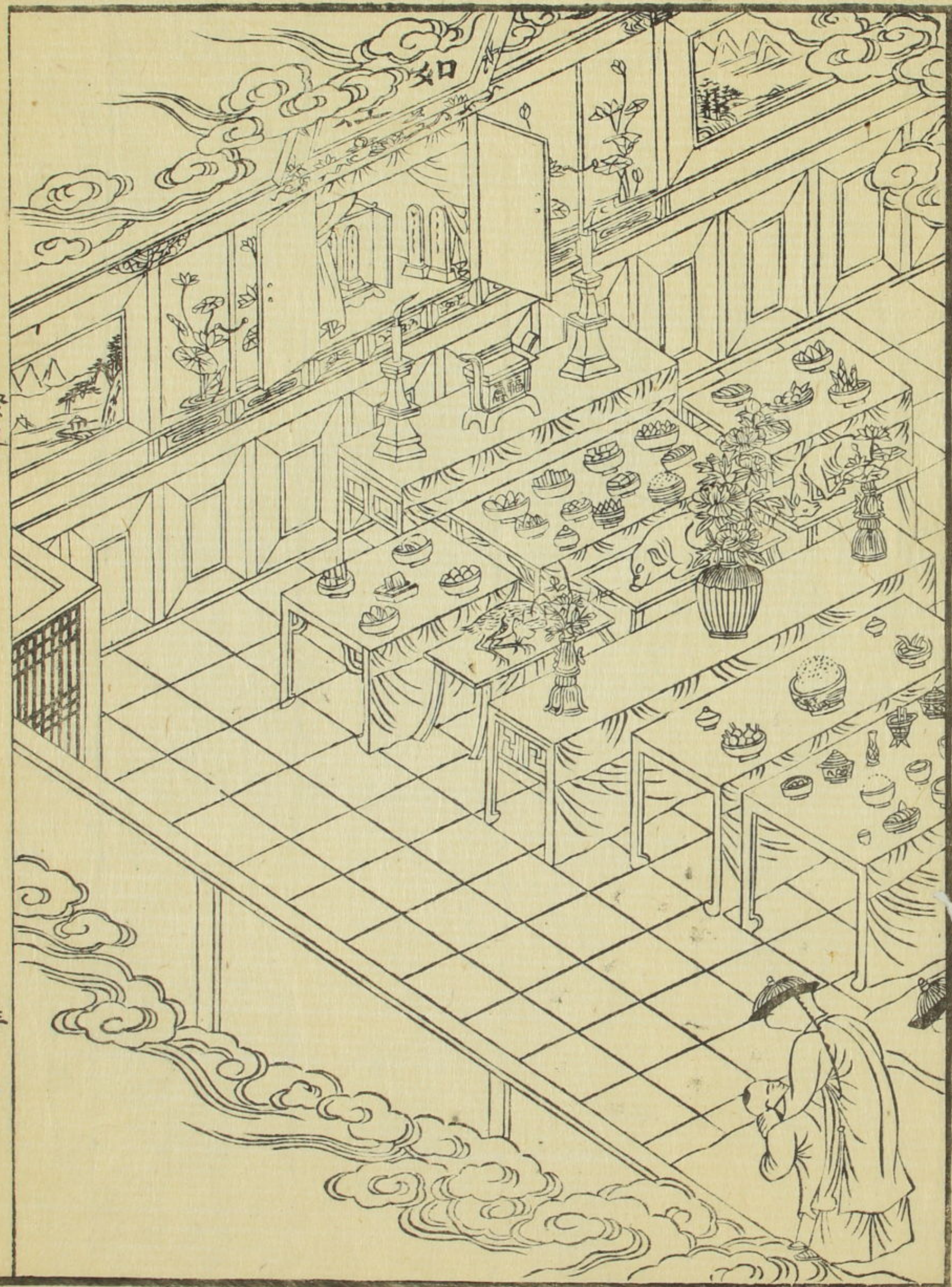
祭禮

○先祖を祭ふは正月三月十月定式の祭祀あり夏至冬至祭ふも有
 けしも家廟トモミヤみトモミヤ一トモミヤ小祠コニニ堂トモミヤおめて祭ふは正月の祭年の十二月廿九日の以主人盛
 服ホト潔淨ホトありホトを著し家廟に至り神主の衣ホトぬ拈香ホト一拜ホト一跪ホトく神主に
 むホト今迎新春恭奉祭祀と告ぐ廟の側み高卓子を立おれ神主
 を暫く移して後家廟を掃除潔淨ホトし掃除ホトの奴ホト僕ホトえのホトまホトく神主を安座
 し神主は後真像をとりホト一ホト真容圖ホト又ホト行樂圖ホトと云ホト前ホトみ香ホト案ホト設ホト香爐ホト燭臺ホトを傍
 付ホト其ホトのホトみ高卓子をすく大なる花瓶ホトみ花瓶ホトの造花ホトをいけ
 玉ホト造花ホトの牡丹ホトの限ホト富貴ホトを示し意牡丹ホトの紙ホトの製ホト服ホトみ小ホトの花ホト瓶ホト一ホト生の草ホトを多
 分挿し一方は居坐燈籠ホトをホトかき焼物の皿ホトみ蒔枝ホト竜眼ホト落花生ホト松子ホト

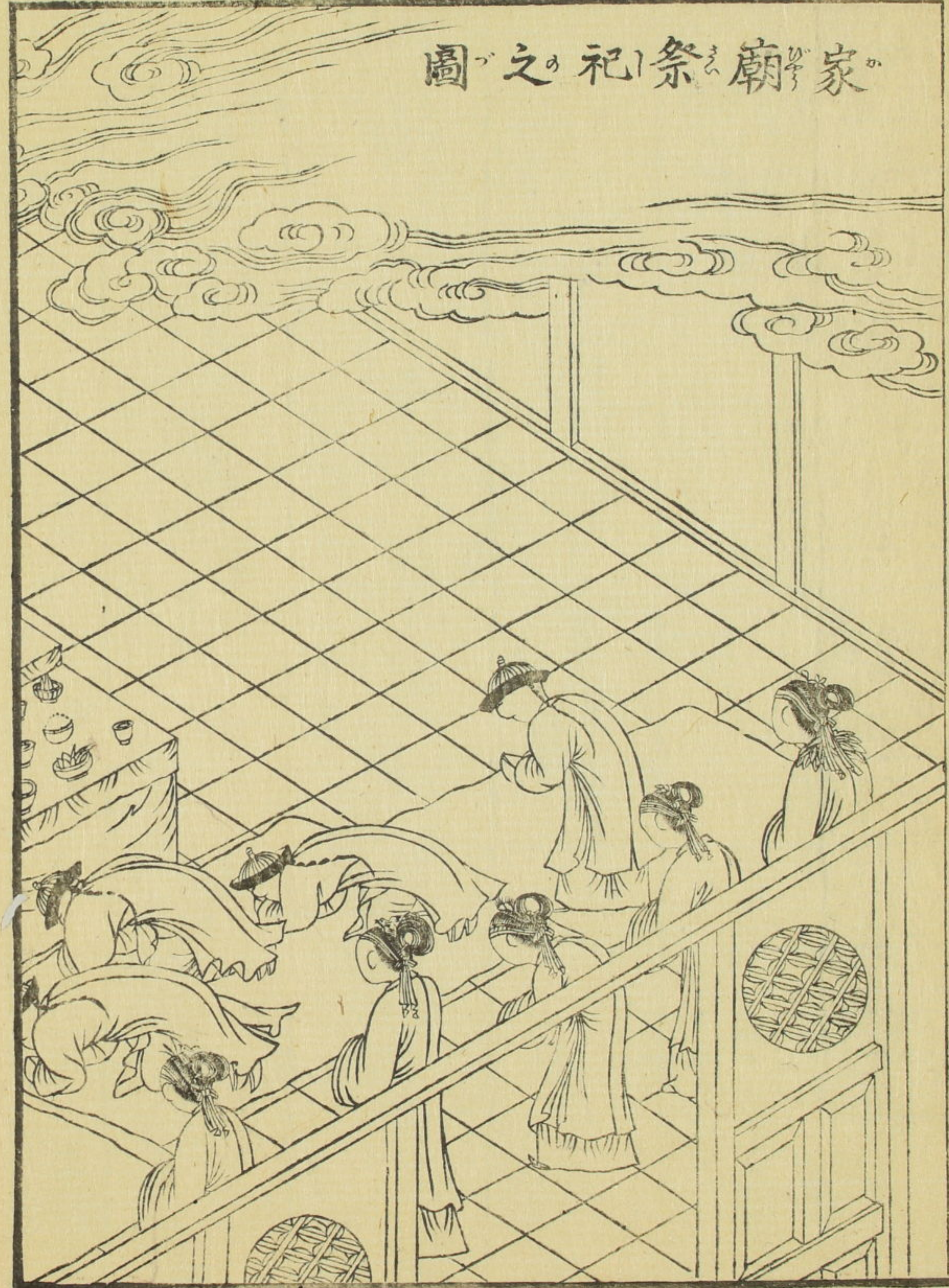
祭禮

東瓜糖桔餅或ハ糕餅菓物種々ありハみ大根みく水仙花菊の各儀制衣
 一供物都合三二十只備へ至元朝みら主人早辰沐浴盛服を忌
 一子孫や姪を引領ちて家廟へ至り廟外にて盥洗一燈を照し三牲
 を備へ饌進進す饌ハ魚肉野菜菓物中にて磁器に盛り 爵盃美酒を盛主人
 跪く盃を奠し畢ちて拈香符籙を漢人の四拜満人の主人拜畢ちて嫡子庶
 子伯叔父姪婦女等同居の親族悉く拜す廟拜畢ちて家内の從儀
 を速この中別以て徹饌す 廟の卓子 徹饌の時も主人子孫前此ごとく拈香符籙
 ちて徹儀を三牲ありハみ饌の徹す其餘の供物を兵侍を以て代り
 十八日み至り徹す饌を徹して暮るるハみ三牲ならハみ饌の物を煮炙して
 家内残らず食以て代薦酢と進饌と元日むらりありて二日と早辰
 進饌眞酒等の事あり十五日上元佳節早辰主人盛服一

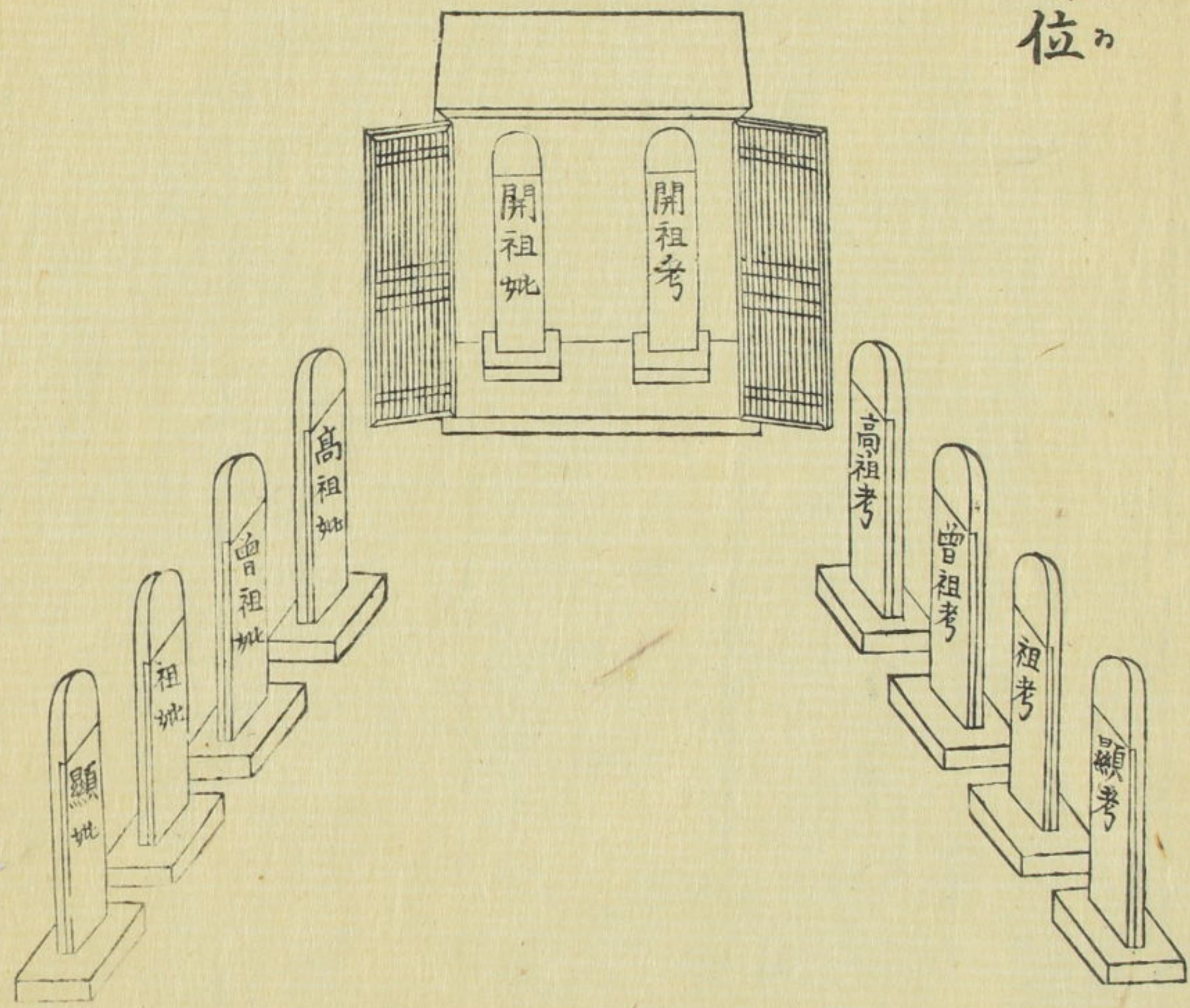
多燭以照し香枝拈し眞酒寸三牲供物等と以て十八日早辰
 主人盛服し子孫を引領ちて盥洗し拈香礼拜し跪て神を祀む
 恭請徹位と告ぐ諸供物を徹し一廟厨の扉を開して茶の香案
 香爐燭臺をかりて並廟門を開す



家廟祭之圖



神主列位



神主ハ正祠（正殿）五代の神主を立正祠（正殿）の上段ノ間祖（間祖）の神主を正面（正面）に立五代（五代）以上の祖（祖）ハ順（順）々に薦座（薦座）に先を薦座（薦座）とす伯叔（伯叔）兄弟（兄弟）子孫（子孫）姪婦女等の主（主）ハ附祠（附祠）に立置（立置）十歳以下（十歳以下）はよく死（死）しむると殤（殤）して主を立正祠（正殿）に嫡子（嫡子）ハ七歳以下（七歳以下）は主を立正祠（正殿）の隣の正流（正流）とす正祠（正殿）に主（主）が立正祠（正殿）を治（治）む先附祠（先附祠）に立置（立置）死（死）して後正祠（後正祠）に移（移）す

○三月ハ清明（清明）の節（節）に内吉日（内吉日）に祭（祭）す

○七月（七月）十五日（十五日）祭（祭）す

○八月（八月）九月（九月）の間（の間）祭（祭）す

○十月（十月）朔日（朔日）祭（祭）す

○正月（正月）祭（祭）す

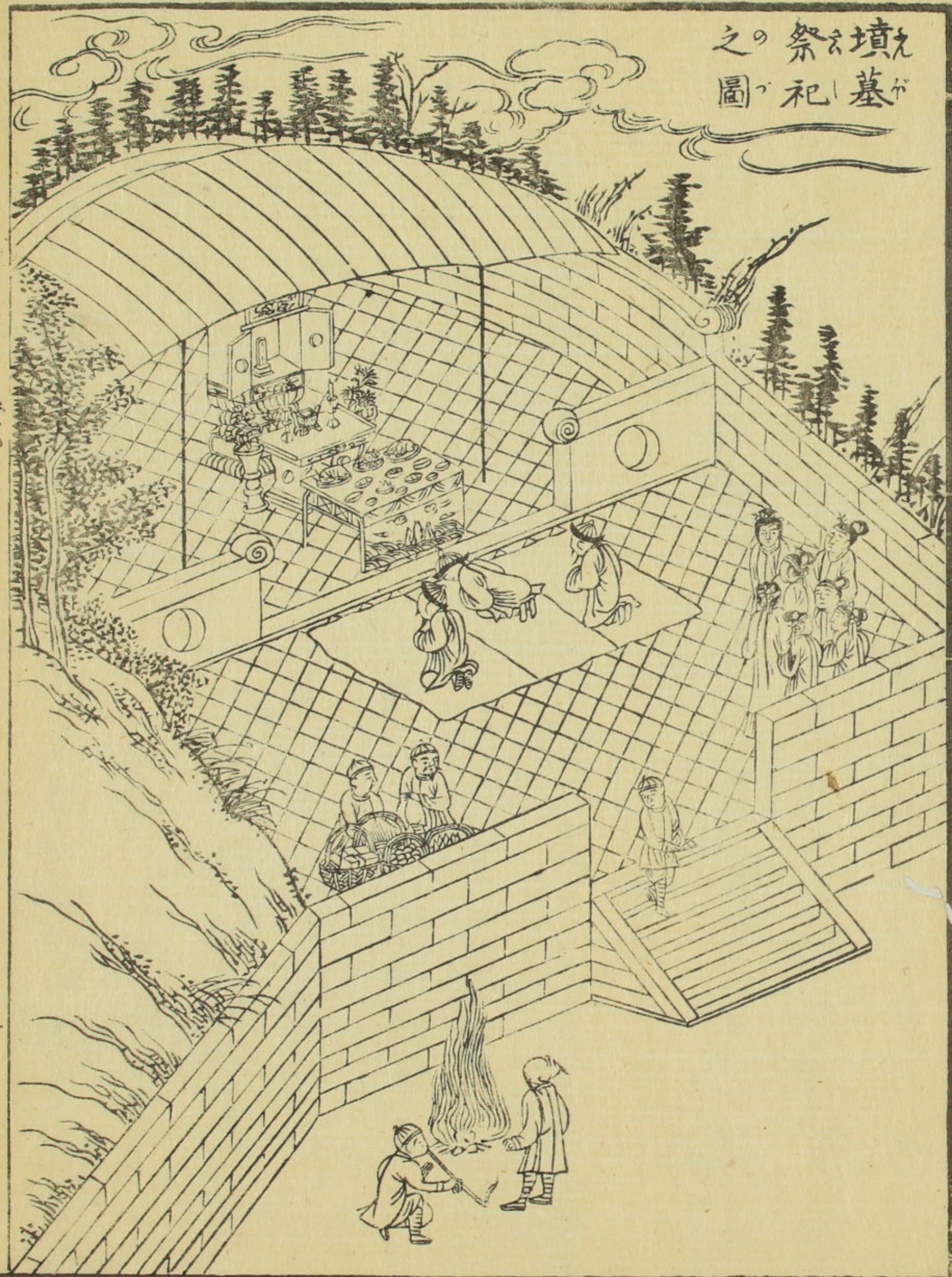
○正月（正月）祭（祭）す

○正月（正月）祭（祭）す

祭礼

四

之の祭々墳々墓が
圖の祀り



祭礼

五

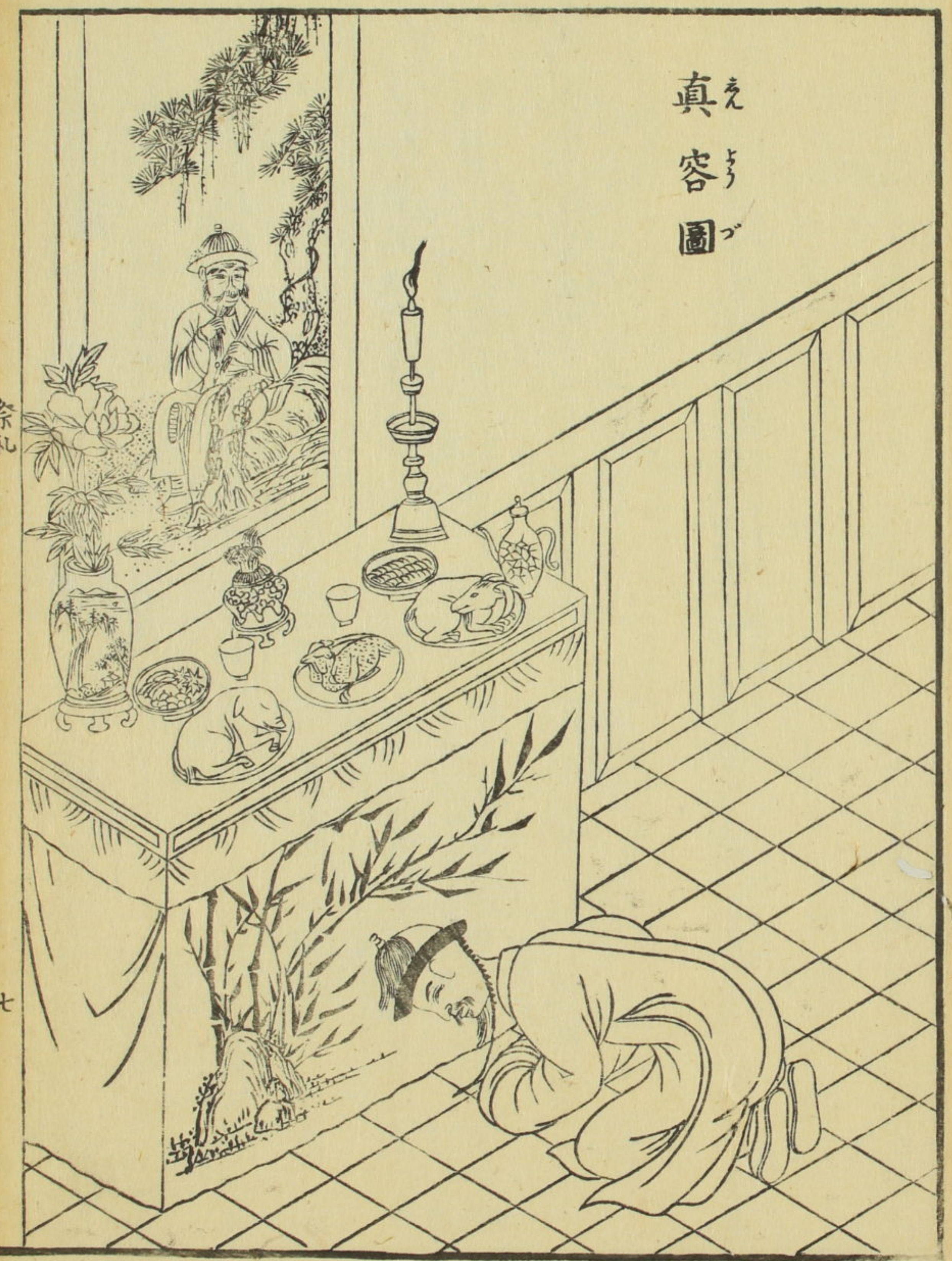
天幕を張天幕ハ本陣を藍色ヨリ 毛氈毯子を舖く先祖石碑の前おとら卓てひ成
 坐香爐燭臺を傍に燭を懸し線香を立供物を磁器ツウキみ盆ハシく俣主人
 あくひみ子孫盥洗して猪ひ酒を盃眞一拈香ヤミ礼拜寸側み奴僕大金紙
此日ハ家内の男
 眞衣紙ミンイニを燒捨カエマシふ 大金紙眞衣紙の紙 男子拜早ノボして婦女拜メノは
友ニモ業内ノ 拜早ノボして拜時み供物を徹しマシ墓所ハシみ於てニ貴族キヤク
墓所ノ清サ
 食一酒宴をある祠堂あるの祠堂あるの宴を催す 大々の墓所地面の
内ノ祠堂を建祭ノ
用み使 忌親族朋友の内あるもの大々の祭マシ祭マシして山野景色ヤマノキバシを
もあ みるやへ行路ミヤコ自遊山ミヤマ自遊山を踏青タマシと小杭コウジ列ツラを六西湖ムツノウミ一船フネをうり遊散トウサンす
もあ

○先祖祭み致齋齋戒等の事かゝらばに庶民の祭文はもろひす
家御紳等の祭文を用也 ○祖父母父母の喪中かゝる毎月忌辰を
望神より奠酒拈香して礼拝に毎日拜す事希之葬らざるにせむ
此期着み極帯み拜をね 奠茶奠酒奠菜等あり葬らざるにせむ
喪期の内ハ神主成廳堂み置朔望忌辰の拜のあり喪期満く神主
を祠堂み移して父母ととも毎月忌辰の祭祀なり朔望に燭を長
拈香奠酒して礼拝す本忌辰 日多し とも祭み奉る 且忌辰み
子孫吃素す奉れ 喪終まで後の周年 一周 三周年 三年 法會執
行し祭み此際僧道を請ふ追薦を三年後の十年間毎日追祭す法
會み僧道を請ふ誦經をもかゝる家廟み多く行ふ又廳堂へ法會の
神主一位を移して祭みあり僧道へ布施して銀ありハ錢を送る

是を贖資といふ僧一人一日錢百文或は百五十文は銀ありハ五分
二ふは住持長老等銀十文は住持修法みよるは焰口等執行的に
三百回五百回身分に應じ不同あり是は供物料多し其内あり又
誦經の上齋非時の食米を出し誦經を早齋と云非時を晚齋と云
僧誦經の是は盤木魚を鳴す此具は傍より持系もわり家みせり
盤木魚の圖式を傍に 又喪中の法會の是は傍通より線香籠燭
を持系して賜ふ事あり喪中みよる平常の法會みらねらるる
誦經なら大畧普門品金剛經等あり其餘ハ詳み知ふ事あり
○周年三年十年間毎の法會追祭の式ハ春秋祭祀みねらるる朔
望みら家廟へ三牲一副魚肉菓子類十種は主人早辰み沐
浴し盛服して神主と酒を奠し拈香禮拜す

○開祖考妣祖考妣顯考妣々其人の誕生日ハ廳堂（真空圖をり）
 香三牲魚肉菓子類をそと燭を点し饌を進し眞酒拈香し之
 祭式朔望おねふし是を冥期とす真空圖ハ父祖の末別み面像
 并躰を正写めして掛物ふ仕立永遠追慕して忘ぬき免ふ祭期
 終るに在りてうなまふ又五六十歳おありて自身の像をうけ
 ねくまありて我平時得意の像をうけそと人ハ山水残さるる人
 身山中めく景物遊覧の躰をうけしあひと琴碁書畫をふれ
 ち心趣をうけし是を行樂圖とひ又真空圖とふ

真空圖



祭礼

七

○祭器卓碗碟等々多く平時需用の器潔淨なるは用也人ぬる外は他人
並もあらず希なり○家廟の大小廣狭を身も家貧の貧富みよる等
かす方位向きの家作の向も意は只北向を嫌ふ廟中平時の掃除懸燭未
と奴僕經手は掃除等の時廟厨の扉をふさぎみむらす

○主人出入は祀に告ふ事ありしらびみまはし節家廟み見之むら事
かし子孫做親中を必告ふ○中秋重陽冬至の佳節みけく家廟
を祭ふ事ありて家の舊例もよく執りしをあると一定み何れも

○家廟に佛像を安置せし神主あり佛像に内廳に厨子を補ひ
安んず○先祖の遺物の封固して潔淨ある匣み入る收貯し去み
他み出ず遺物分給の事親族遺るを遺命あれは返る子孫せして
檀み賜ふ事を得て是親族或は至る親し朋友等先祖の筆跡を

を所望すし家廟み告り詩文章の類の筆跡を賜ふもあらず衣履靴
具等と訪ふ事あり親をより所をより事あり

○水火非常の節は別家廟み至り神主を殘らば取集り櫃箱おに
收る子孫守姪附随ひ難を逃し親族朋友又と寺院等預る難
静る後廟所恙ある時と移して祭祀を執りて是廟(所燒)失流

失破損等あり移す事ありは外に假廟を設け安んず一時
祭祀を執行す是を厭忌敬馬祭祀とふ取集る時其事急ありし禮
儀み及むはいつちあり急難たりとも家廟を收るは内は外あり

○震禪の祭祀し小祥大祥と則周年三年あり
○城隍と古(其地)徳を誦ふ名官卿賢を城隍神と崇め其地の守護
を諸省府州縣ともみ廟あり知縣以上の官到任して三日同あり

五日めお水詣を是を城隍齋宿とふ祭式は春日禮房官川縣も六部を多官更を

舊例の儀注を申出三牲等の供物を替へ祭文を代り申出並に春日本官ハニクワ

縣多しハ知縣ハニクワ吉服ハニクワして禮房官ハニクワ執事人役ハニクワを引領して城隍廟ハニクワ

み至り門前より馬轎ハニクワより申上り神前より至り禮房官供物をそまへ

酒を奠へ燭燭ハニクワより申上り本官二跪九叩首の礼をねまひ其地の

安全を祈願し祭文をよみおまへ焚化ハニクワ祭文ハ讀祝官ハニクワよりよみ拜礼ハニクワ

して廟祝の宅へついで茶飲ハニクワをとりて休息して帰館ハニクワ廟祝ハ其地ハニクワ

代へ廟祝を序とむ朝廷のハニクワもとも城隍神古來より其地ハニクワ等あり

所と近縣近府の神狩をとりて安並に惣して府内の城隍をハニクワ

府内復へ絲内の城隍と知縣も視ふ城隍をほりおへ城隍神とハニクワ

知別知縣ハ生民を司ふ官とされ陽官と呼ぶし城隍ハ陰府とハニクワ

孤魂を司ふとす陰官と呼ぶ三月清明の日に内并七月十五日朔日定式の祭

祀此祭日ハ城隍神を大轎ハニクワより申上りせ郊外ハニクワより請ひ祈祀孤の為

兼く構わぬ廟壇ハニクワ廟壇ハニクワより申上り其の儀を遷座ハニクワしや本官を始り衙門の諸官

御曲の耆老を引領して祭ふなり或は三牲魚肉野菜菓子類等ハニクワ十種

使燭を点し本官拈香礼拜を次み諸官吏耆老等拜するして諸官吏ハ

帰館す其の諸人等祈礼拜は是を祀孤とす陰間の孤魂の魂ハニクワを

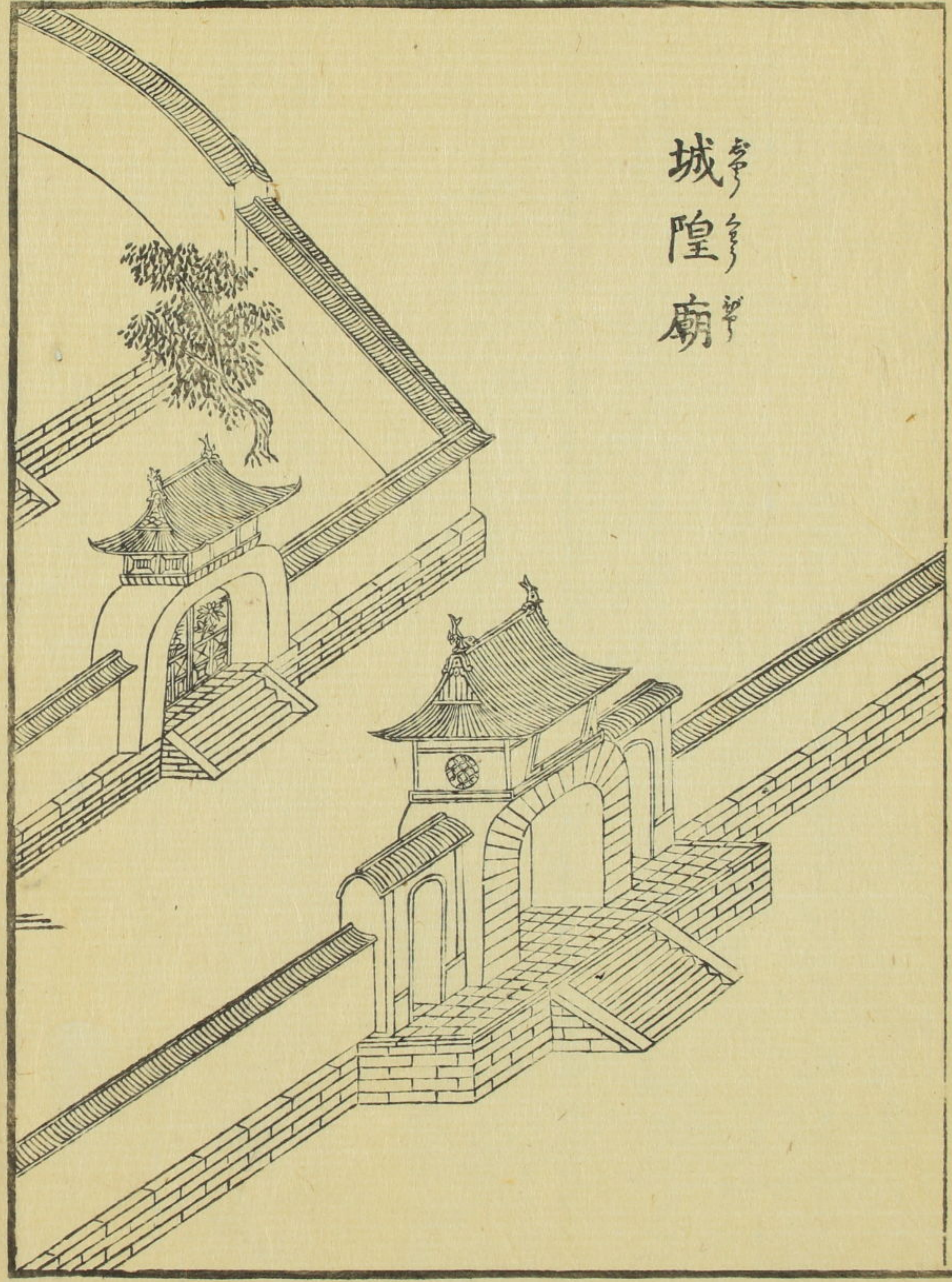
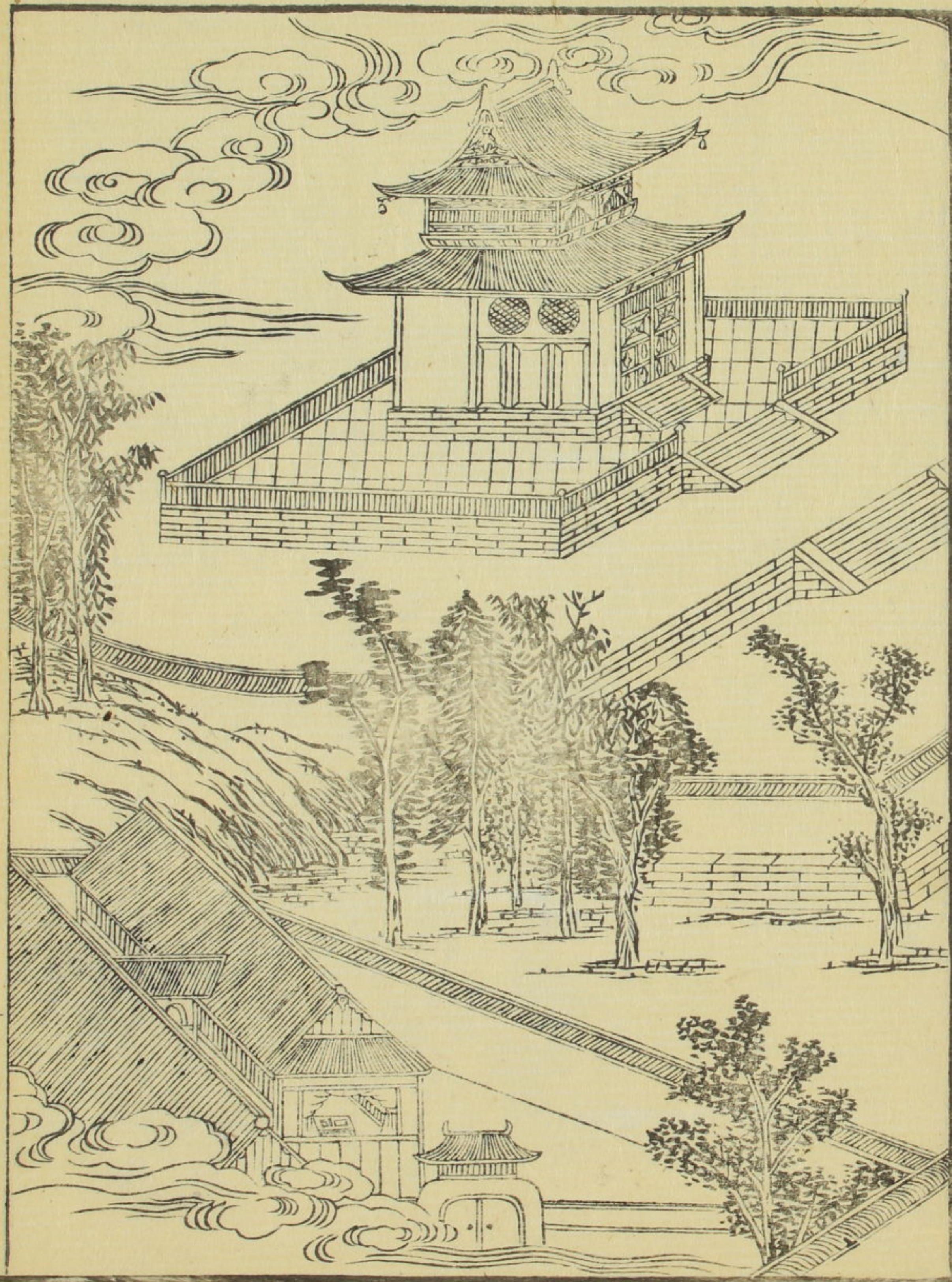
祭ふ音あり祭終りて其日の申上り別以廟へ歸し奉る廟ハニクワにての祭

到任齋宿朔望中秋冬至と外とあり中秋冬至ハ三牲供物をハニクワ

朔望ハ三牲を使は此祭ハ官人等詣り奉る廟ハニクワにての祭

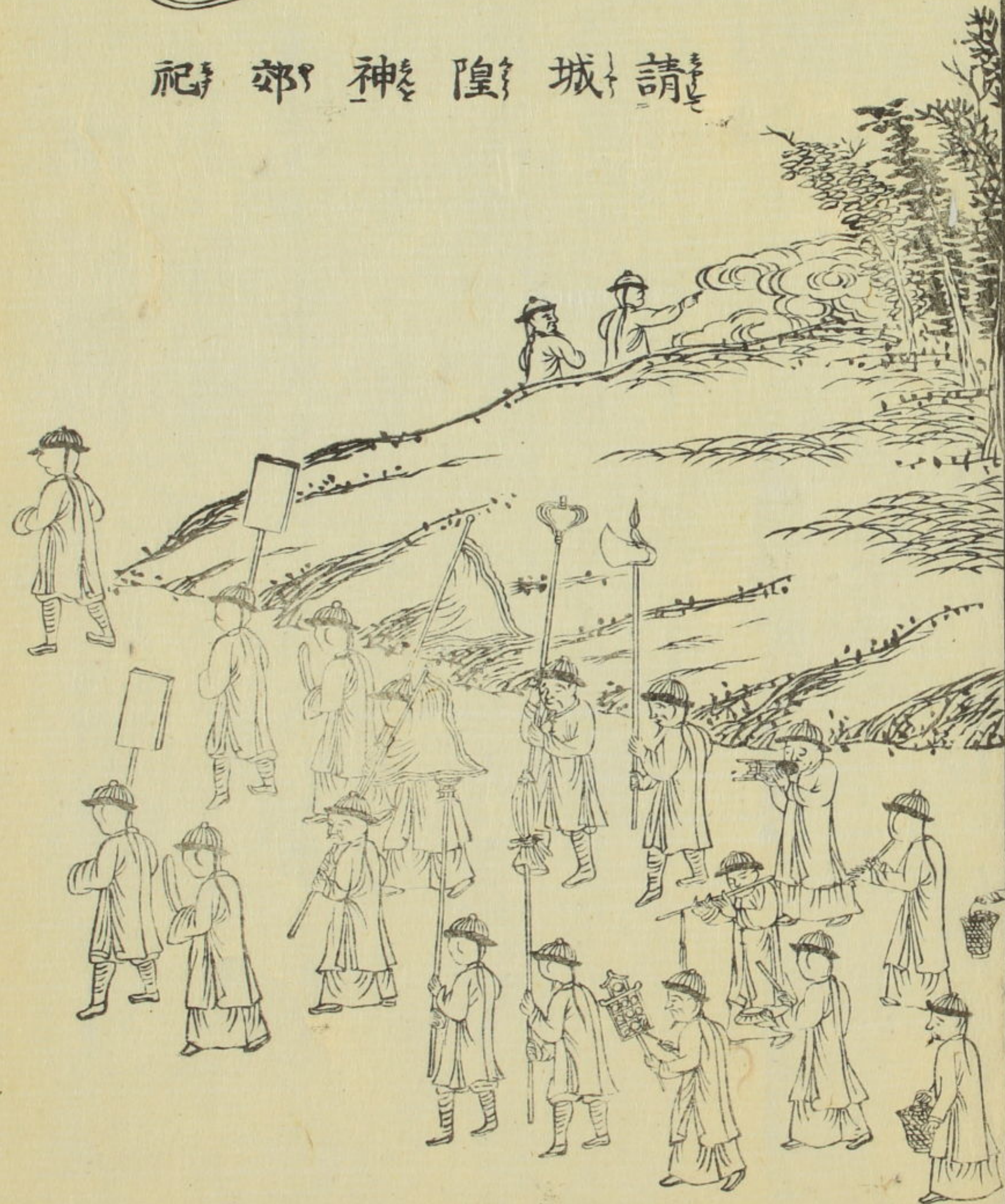
を使は祭ふ官も願ふ祭ハ清明七月十月の三日也遷座ハニクワの儀行列の次

を先に奉旨祭祀次ハ城隍使司と金字ハニクワを書り行牌を一對ハニクワ建て



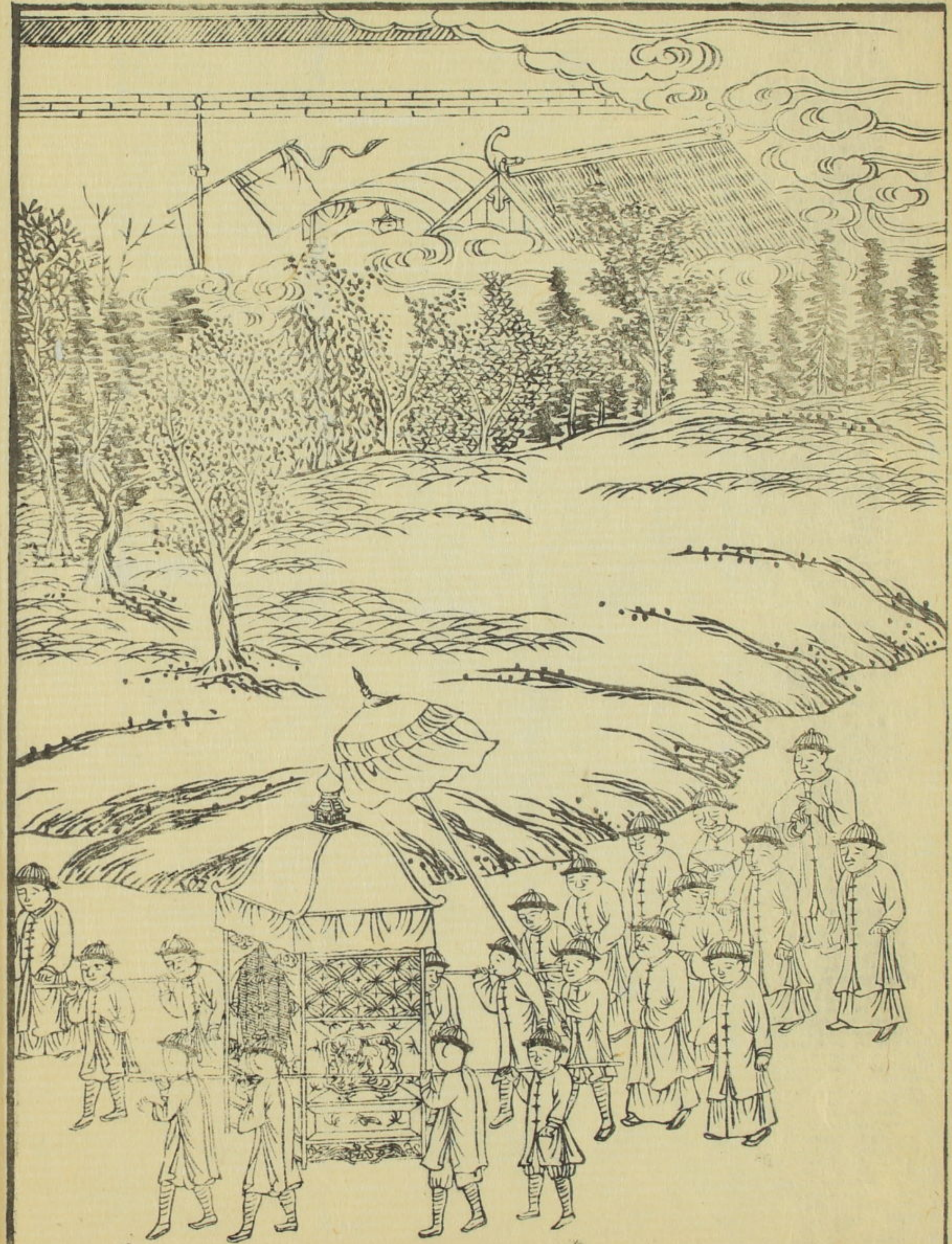
城隍廟

請城隍神郊祀

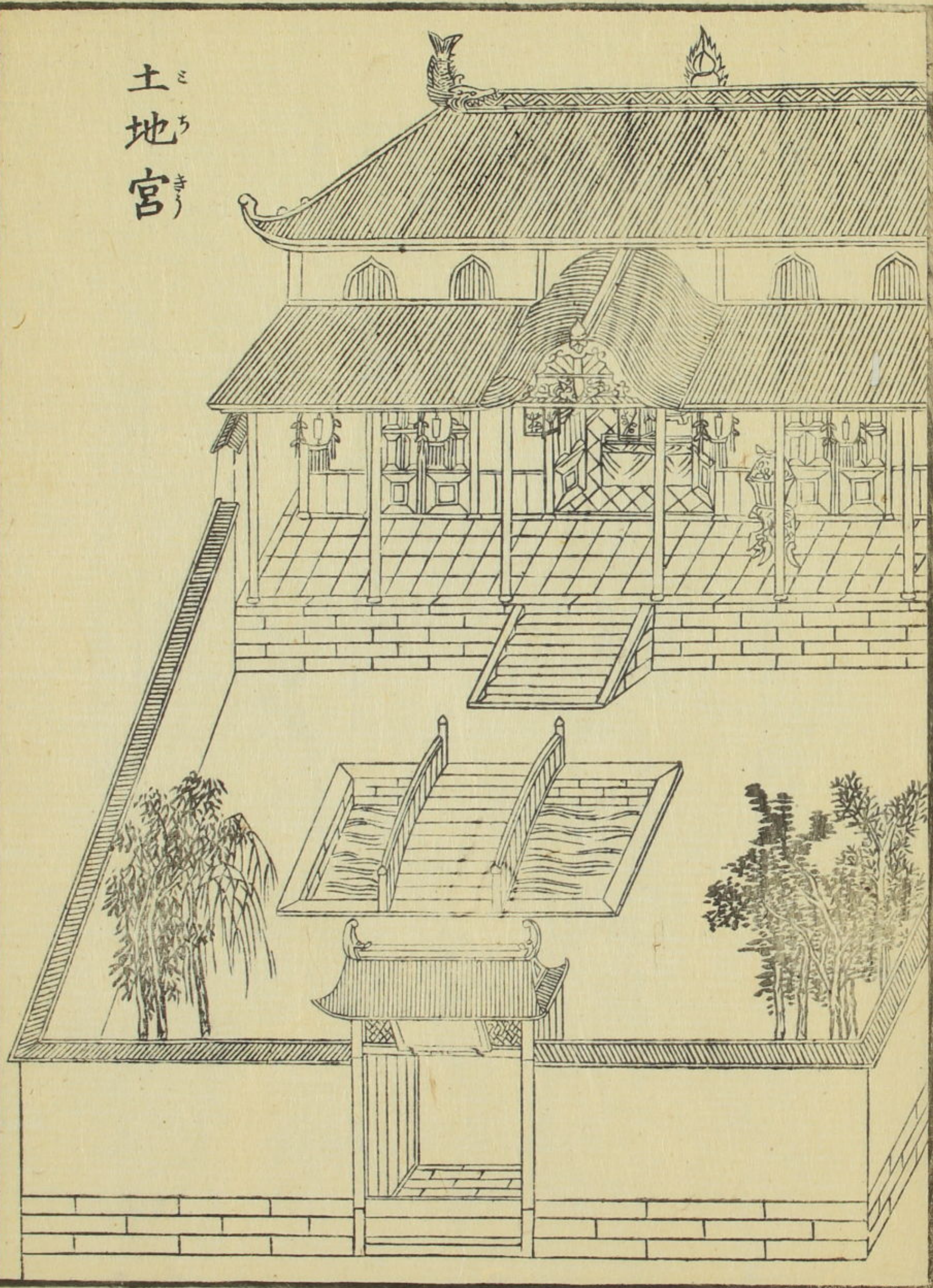


祭礼

十一



土地宮



祭礼

土

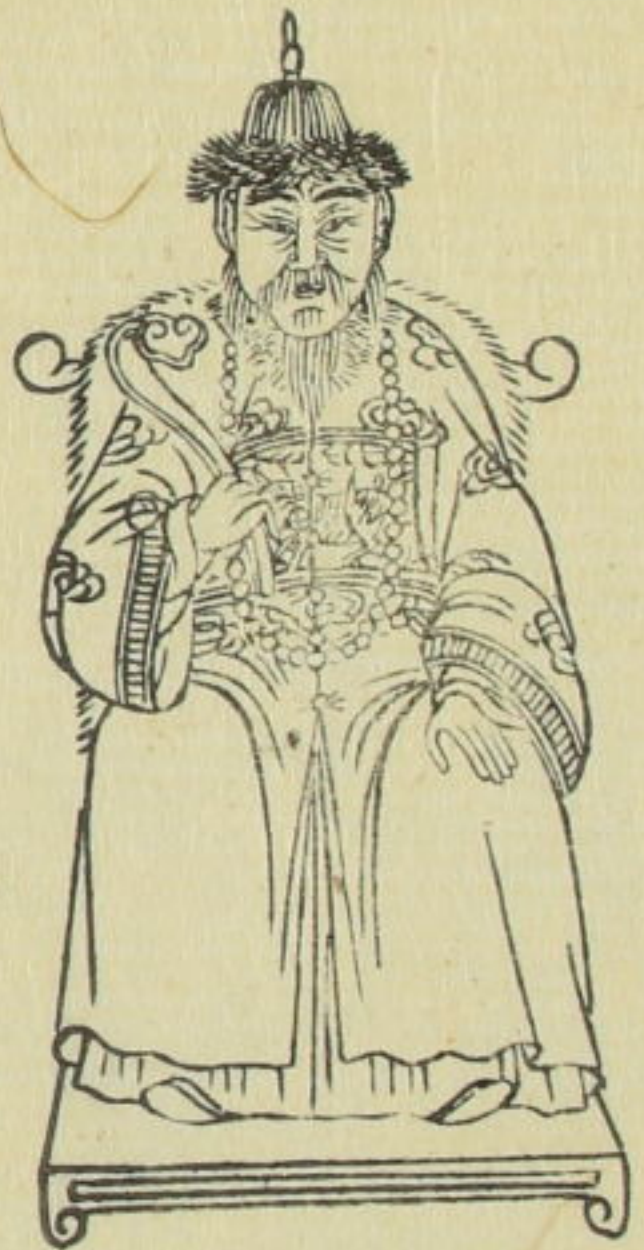
執事旗鼓涼傘あり道すがら音楽を奏し
 度の祭祀ありひみ廟所奉分の供物料香燭科ねひ祝官の俸米等
 其地の物成みま開銷す城隍の像いふあり刻み手足目頰運動なる儀工
 振へ府列縣の官銜品級み随ひて衣冠を刷ひ並中み泥塑の像も
 唯神に成る銘をり書きまじり都て神像あり

○

土地宮 土地宮と稱し土地の守神あり郷里村落とも土地神祠

ありをいへるが自ら自家地面の内中を土神祠を造作し安んずる廟宇土地
 の大小よりして不同あり二月二日聖誕日自らて祭祀す 廟内三牲供物
 種々焼香燭を忌日祠官眞酒礼拝し祭る諸人系諸男女群集守朝廷の
 の致祭し遊ぶ故官み此のまゝ祠官俸米等のまゝなり祭祀香燭等乃
 科ハ諸人喜捨して祭るゝむ年分の供料祠官の過活等不足あり

城隍神像



土公神像



○天后聖母

一云天后は天孫の娘なり

専海上の守護神也宋朝建隆元年三月廿三日福

建興化府涓列あり誕生あり父は林氏宋朝初仕て刺史の官になり致仕して

後天后誕生あり天后幼少より智慧賢徳人ふ起十六歳の時道士より道を授

け修行し二十八歳の年九月重陽白晝に神と化し涓列の高山より昇天

して世々神靈感應著し仰祈誓すふに應せざるまじり代々の帝王封贈

の勅あり康熙廿三年ありて天后封贈春秋祭祀免許の上あり涓列

と聖誕の地あり大々廟祠を造営し神を安んじ其外京師及び諸省附

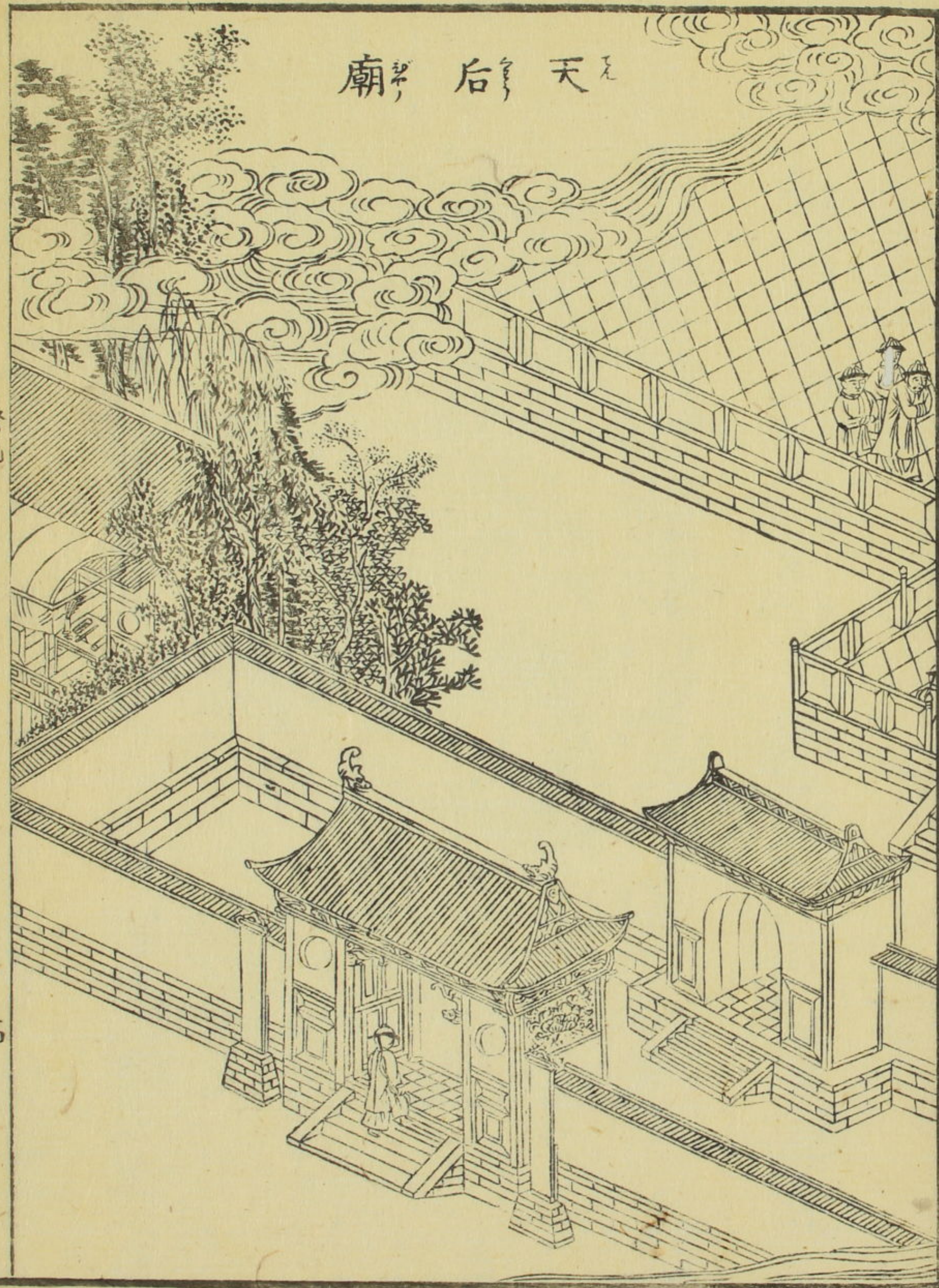
別縣あり廟あり廟門前に下馬牌を建下馬牌ハ朝廷より祭祀の式ハ大宰判

丞丞其外種々供物を供へ玉帛香燭を奠し祭る其地の官員之を奉り

執事人員を支配して月々朝廷を禮部官の内兼祭官として勅命

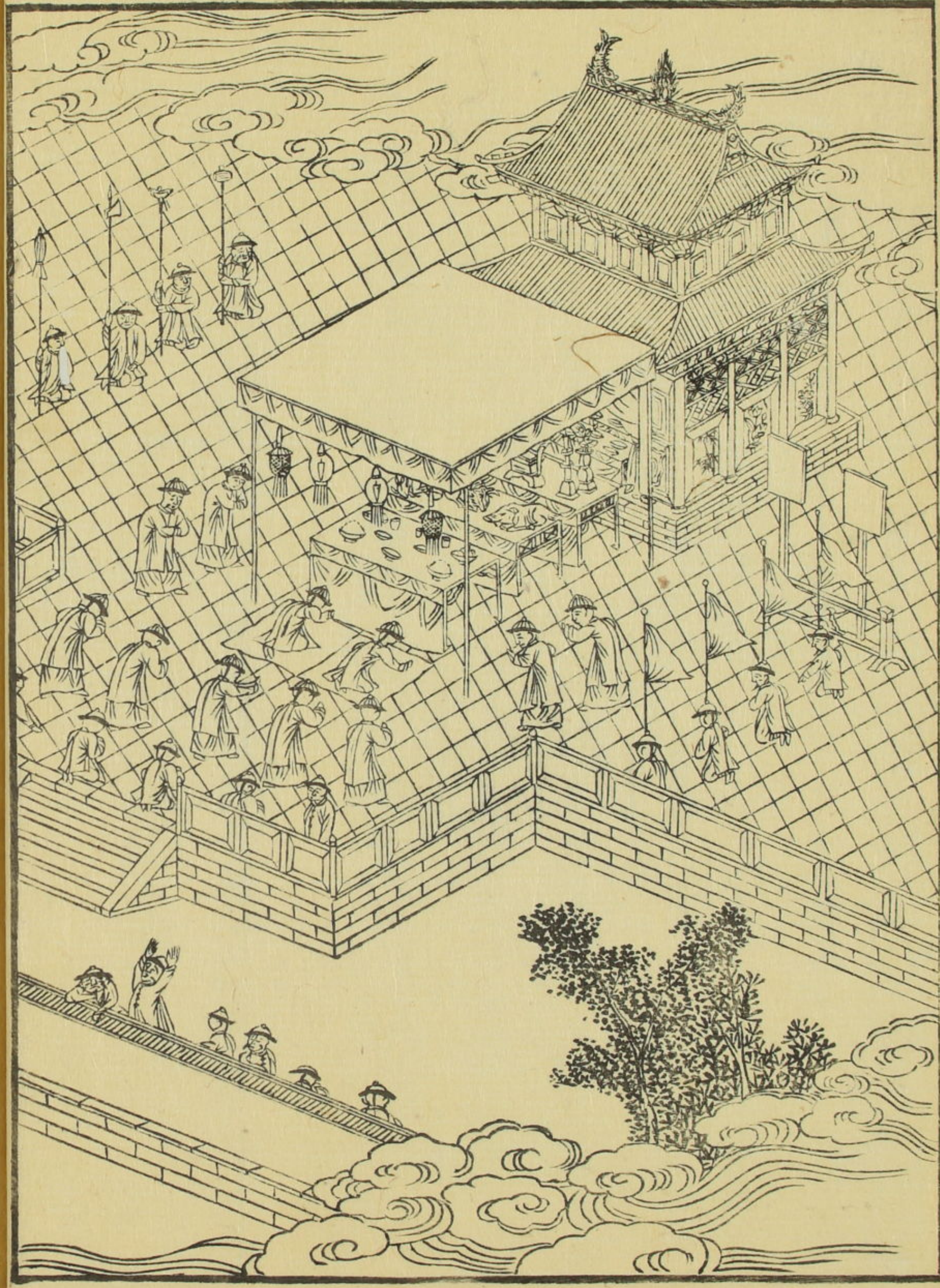
祭文香帛を捧欽差して涓列あり祭祀あり京師の廟もたれり

天 后 廟

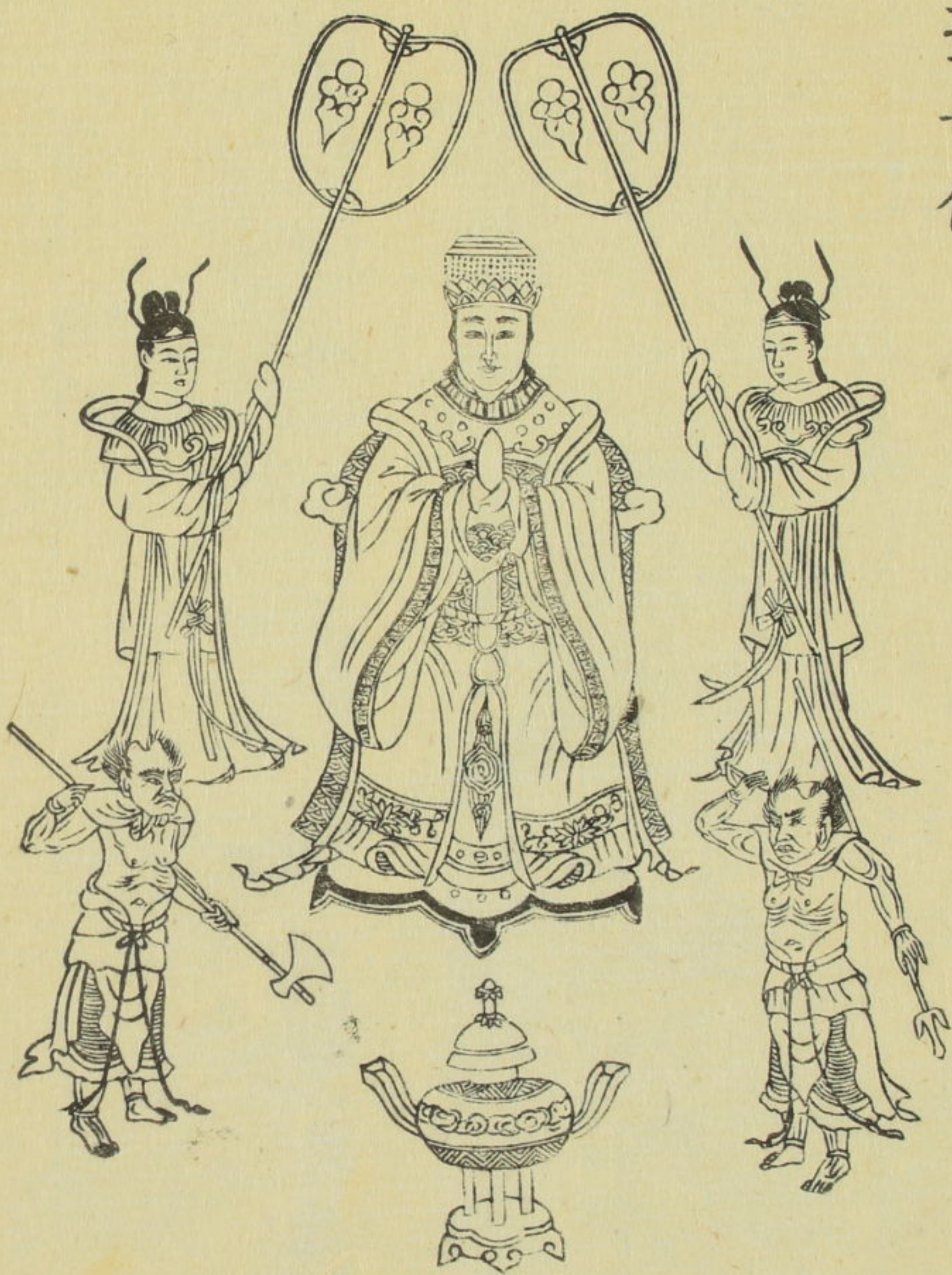


祭 礼

十四



天后聖母像



欽差をきたりて祭つる天子も氣御洋る

天子を祀三跪九叩 諸道府州縣の廟
首の礼を行ひませ

其地の本官より禮房官(命)祭祀の事を司りて祭日の本官并諸官人

系籍止官人系籍早く諸人男女並詣集也を府別縣在大宰をりて

祭る神前の供物約十程香初焼燭鮮明也祭日二月廿三日翌日の祭祀春

秋二季の二月八月の上亥日を用由兼祭官等系籍の次第は前日諸執事人員

齋戒して高日卑辰沐浴吉服して廟みかふ廟祝燭を点し香を拵り早きて

長官 諸官の 少中其餘諸官執事列班す 並着 贊禮官あ方三跪九叩首起坐の式を唱

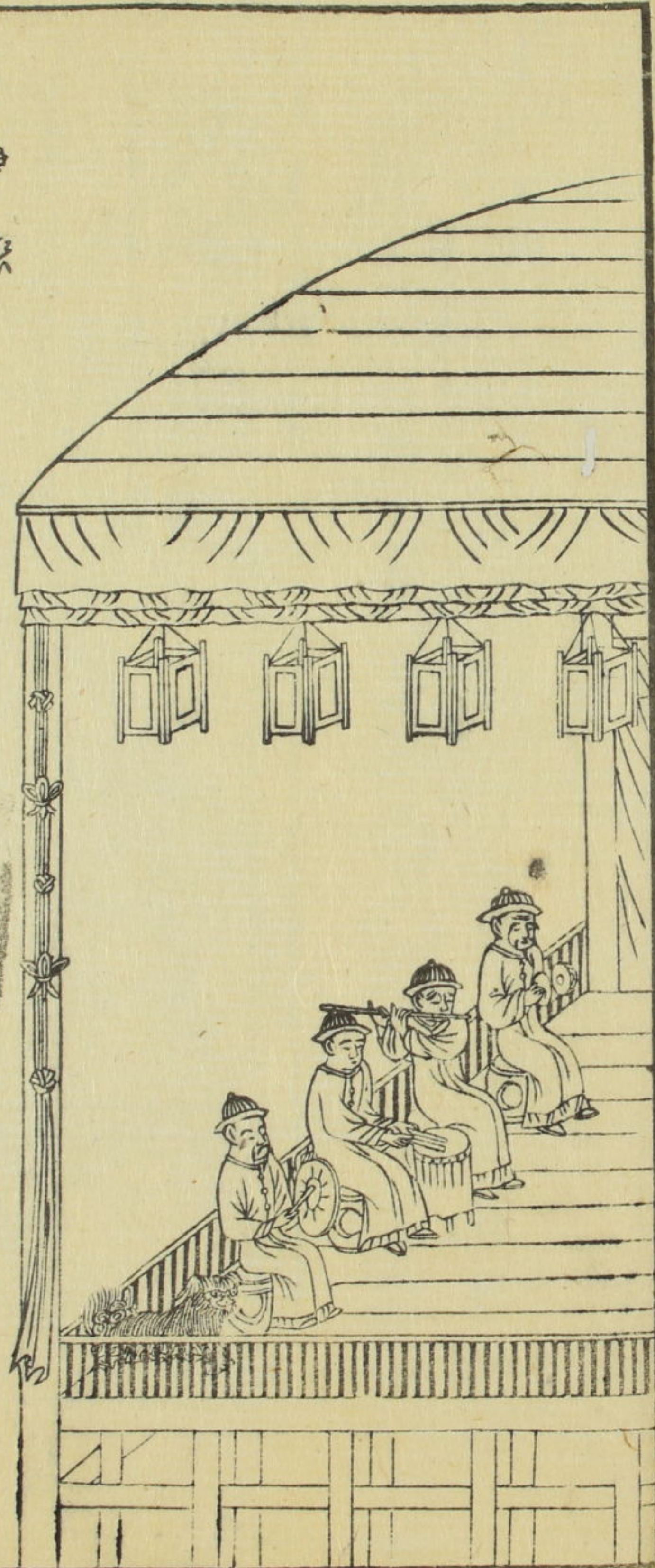
ふに復ひ諸官礼を行ひ讀祝官祭文を讀早く撰化す 祭文時小 諸官拜早て退散す

を其地の保甲命と諸人の口角争闘をこれかを極む祭日の高家家庭民を施主として

做戲を催し廟門外の廣瓦場取戲臺を設け做戲を献す系籍の諸人看戲もて

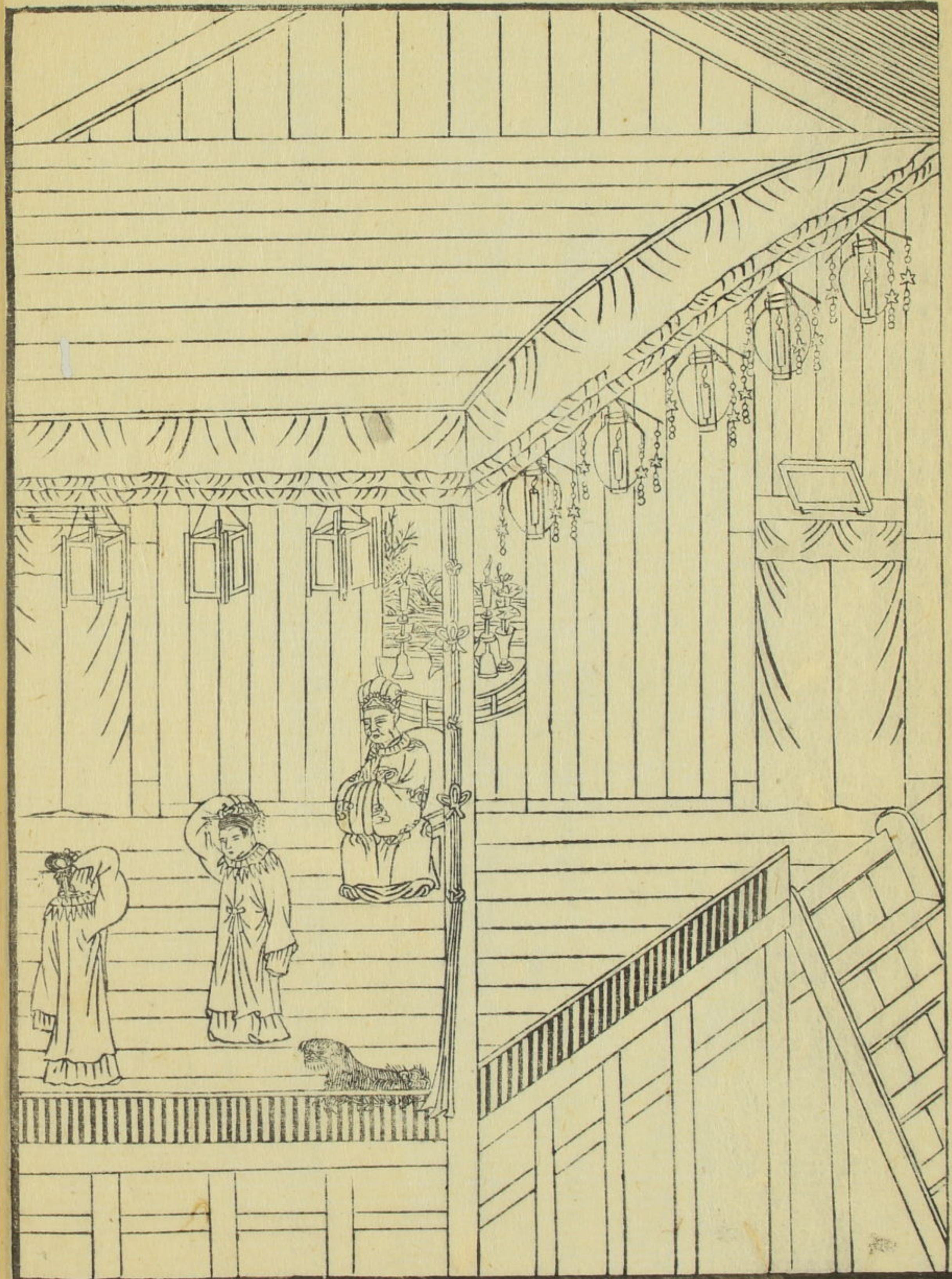
昼夜開動す祭祀科系籍科廟祝俸米等其地の開銷みましく工部(由)也

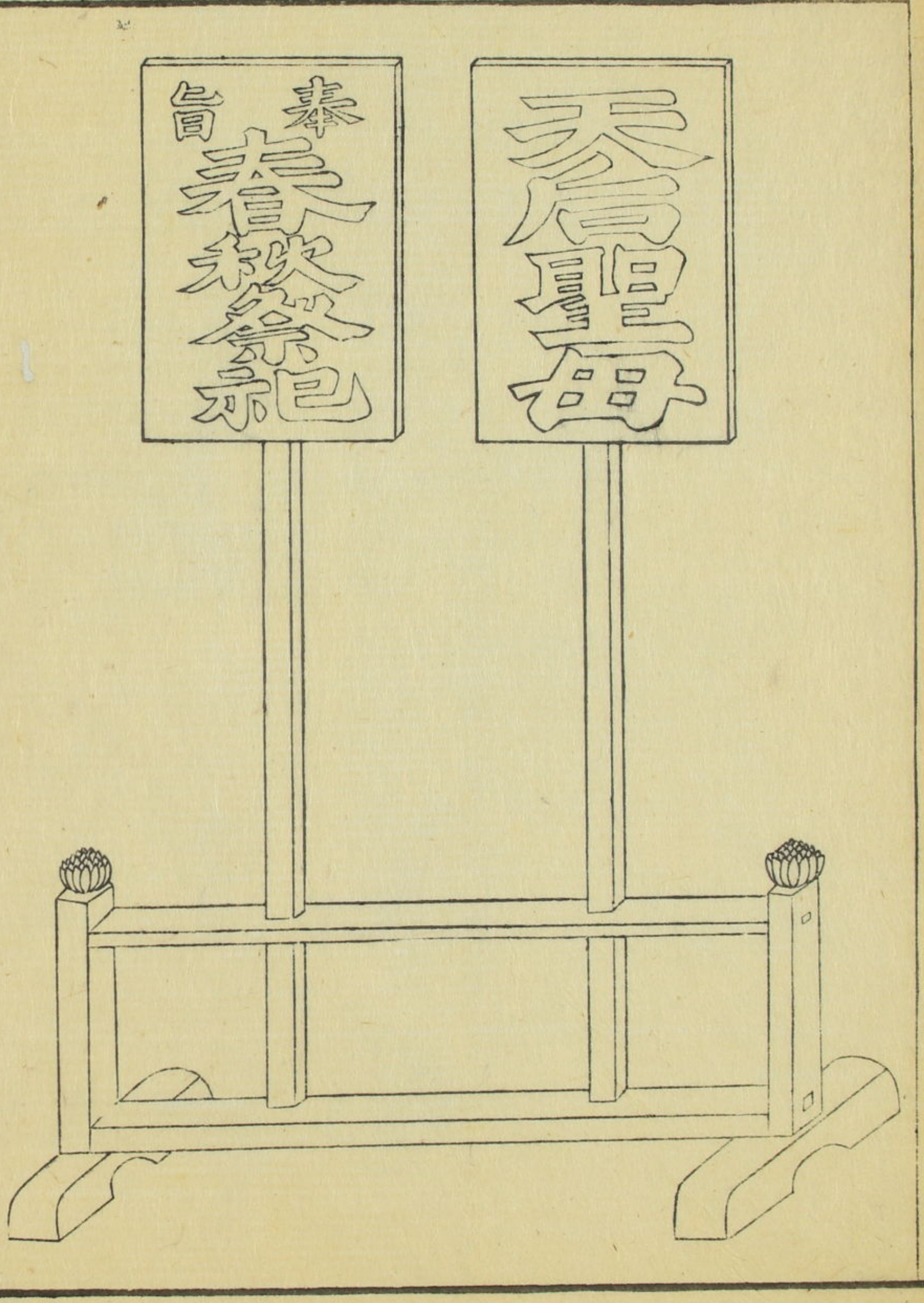
戲臺



祭礼

六





○

關帝（關聖帝君又關老爺）

武運のち獲神として感應感靈著し軍事を以て新撰書して

愈せらるるは武官の勿論と外官民信仰する故他の神も起諸道府州縣に廟を建安

至す武廟と唱へ御里村落の庶人とも奉信仰せしは雍正年中は臺灣の械徒起りて

靈驗ありて速に平靖せし故靈佑大帝と加封る春秋祭祀免許也廟門外お下馬牌を立

大軍を以て奉る祭日五月十二日歸天（薨去）の日を定祭日とて春秋二祭二月八月上戊

日を用官祭昇て清人善信す男女を禁せしむを倣戲を献すふまは祭式祭科も開

銷の奉は天后廟も同（テハウ）○天后廟関廟は靈載と云物（ツモツツ）本或は竹を以て札

を俵（ト）に丸百枚（ツミ）入るる番多を以て箱（コ）に収す人乞を振出して吉凶禍福を以て

別お其番多の取れ吉凶禍福を示したる神託を詩句お綴りて書記したる板

を乞を籤訣牌といふ籤を振出し番多を認る籤訣牌の番多の一行お此

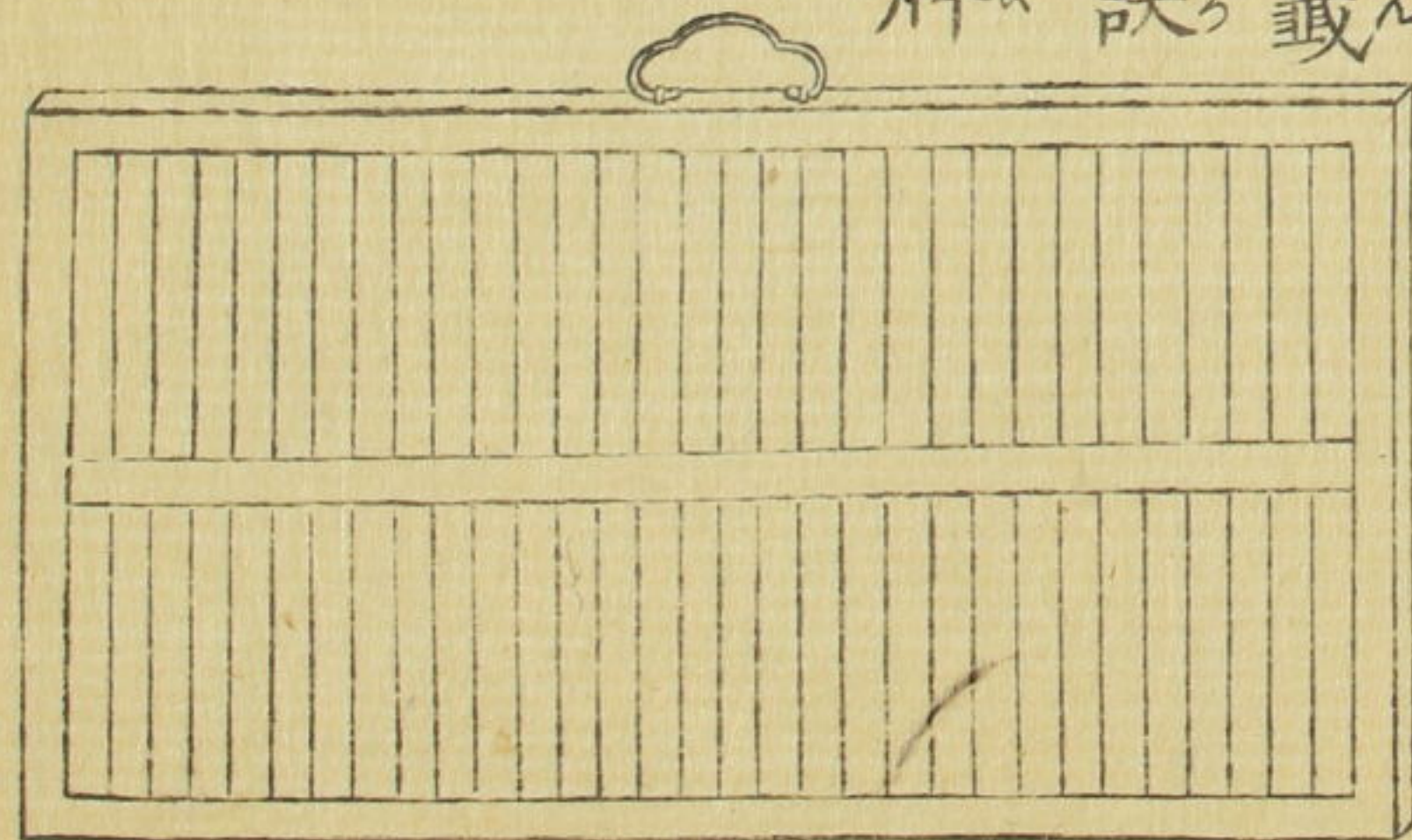
へ合ふ吉凶禍福の意を知らせり

關聖帝像

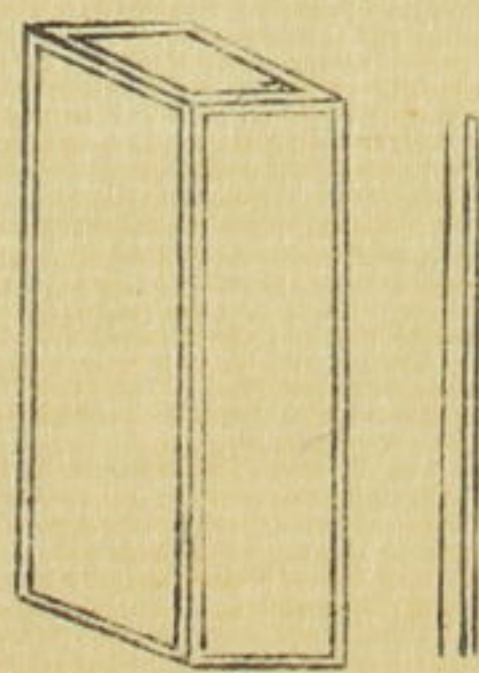


祭礼

籤訣牌

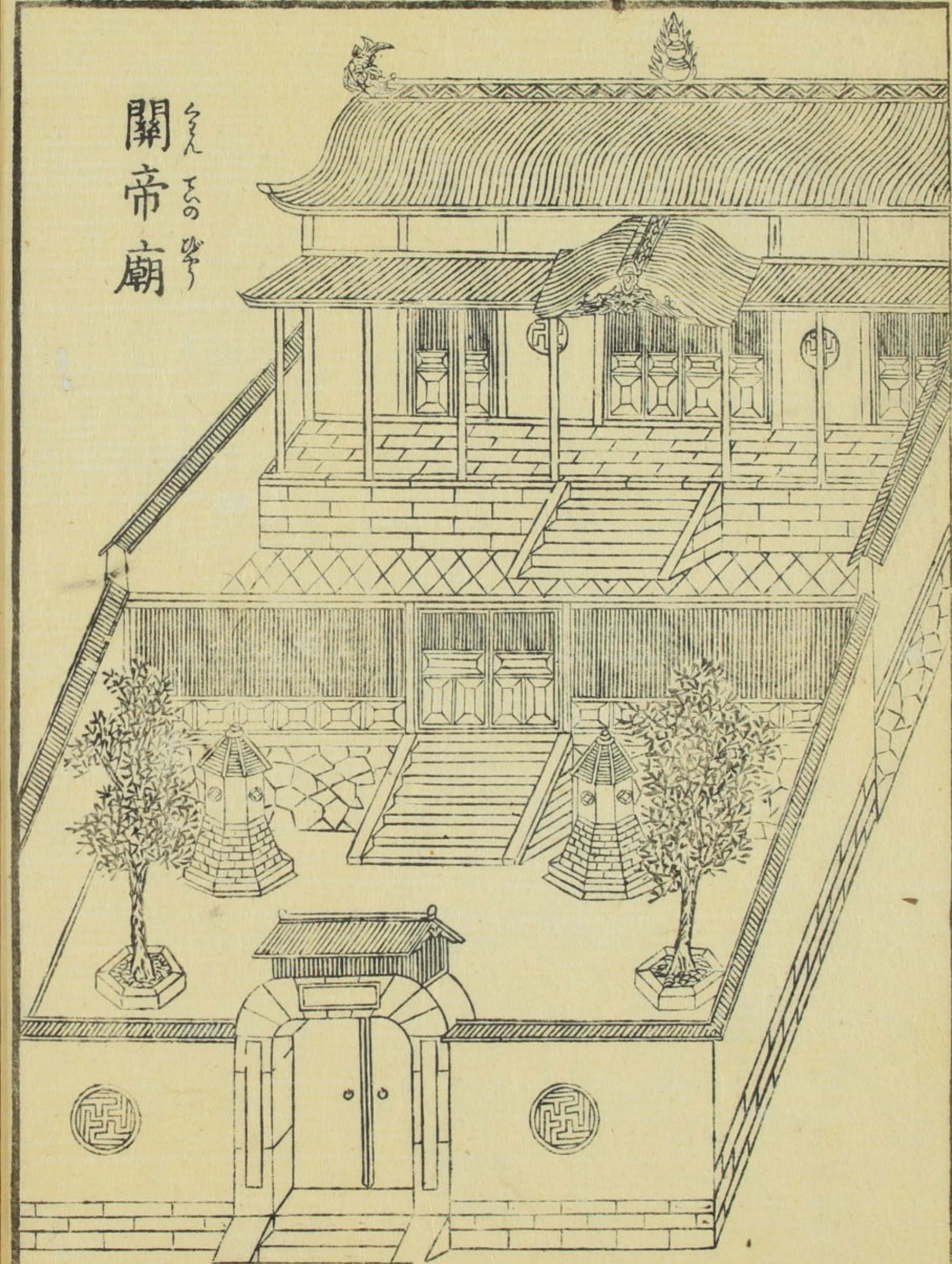


靈籤



大

關帝廟



○孔廟一ノ丈 糸師糸師并并小諸省小諸省府州縣府州縣亦亦小廟小廟を建建二月八月の上丁日上丁日秋奠秋奠の祭祀あり廟門廟門下馬牌下馬牌を建建官員官員其外其外庶人庶人あてあて通通行行せせばば祭祭事事をを承承継継糸師糸師の廟廟欽差欽差を命命トト致致祭祭ありあり天子天子系系拜拜ししるる小諸省小諸省其地其地の官官府府預預見見支配支配ししてて司司ふふ系系洋洋の節節とと天子天子の外外其地其地の長官長官とともも丹墀丹墀の上上小登小登ふふ事事ありあり丹墀丹墀の下下はは拜拜はは蓋蓋蓋蓋蓋蓋豆豆沼沼沚沚の草草蘋蘋蘩蘩の毛鼓毛鼓樂樂初獻初獻亞獻亞獻終獻終獻等等の事事ハ祭酒祭酒先生先生并并に諸秀諸秀乃才乃才の輩輩はは免免三跪三跪九叩九叩首等首等の禮式禮式ありありもも庶人庶人妾妾女女窺探窺探ししるる事事を得得ばば詳詳ふふ知知事事ありあり也也
文廟の圖閣學部に寄
以てしるるべき也

清俗紀聞卷之十二

清俗紀聞卷之十三

僧徒

○唐山唐山の禪宗禪宗律宗律宗天台宗天台宗ありあり比比小道家小道家なりなり律宗律宗天台宗天台宗をを至至くく少少くく総総じて僧侶僧侶ハ天子天子とともも比比小ありありこれハ絶絶て朝廷朝廷にに出出るる事事ありあり依依て文武文武官官ありありての格式格式とともも比比小官官とともも傾傾地地等等苑行苑行ありあり事事もも亦亦官官とともも田田地地等等寄附寄附の事事ハ至至く稀稀なりなり古今古今の知識知識とともも任持任持ありあり官官はは格別格別法法位位仰仰の僧僧ありあり居居合合せせるる時時ハ遠遠香香白白華華の助助とと田園田園れれが寄附寄附せせるる事事ありあり其其外外檀越檀越の官官人人富家富家豪豪民民とと喜捨喜捨とと金銀金銀ありあり比比小田畑田畑菜園菜園等等送送るる事事ありありハハ比比小大伽藍大伽藍衆衆多多れれ僧僧とともも事事足足ふふかかららずず
○寺院寺院の境界境界ありあり石石めめくく造造るる榜榜示示ありあり自是自是東西南北東西南北某寺某寺境界境界

僧徒

わが去記して三並り奉山末寺等の制なく大寺あふ所の地名山号に付さ
寺成を寺と以て碑之ハ普陀山觀音寺ハ奉山中其山中其山の寺ハ末寺也
一山の諸勢と其奉寺に預る者あり大寺ハ住持の外首座都寺監寺典座知
客副寺等ハ重なる役僧ありを老僧ありは世家を味と又ハ病僧等
めく勤めたる僧ハ銀子納免勤免免と
是を養老銀と云 産淨誦經の
九五百目以下あり
過ふもあらず首座都寺以下ハ役僧と寺法ゆく分る者目ありハ寺内を
の品級あり此方ハ僧正檀林とてふぶとハ官位且紅衣紫衣觸頭獨使此
格式とてりハ隨從と官人のぶとハ奉ふハ車轎形に格式めく奉ふ事
あくまるとあらず老僧ありはハ柄牙とて遠行のの昂ハ轎み奉る事あり
歩行の時ハ侍者一或人の外僕を連ふ事も稀あり寺中役僧ハ時ハ習代
吏ハ勤くハ成見多住持とて其圖とて昇降成あり且僧隨身の品ハ如意拂

○子禪杖鉄鉢にハハ僧の奴僕とてハ奉ふ事あり
寺院の構堂々大門二の門天王殿奉堂禪堂閑山堂鐘樓鼓樓齋堂
浴室方丈客殿役寮厨下等あり都々一堂宛別楹み建を役寮齋堂浴
室等ハ一楹の内めく仕切所あり且梁間等決定めりハ大門外ハ不許草
酒入山門と記しハ石牌を立並奉定法あり大門ハ何ハ禪寺とハ
額成奉奉堂めく大雄寶殿と書ふ額成奉其外殊額等ハ文字ハ
定法ハ一勅額給賜の寺ハ二の門或ハ奉堂の内ハ打並六門ハ勅額を奉
事ハ下馬牌等と奉事ハ大門左右ハ金剛二の門左右前後ハ四天
王正面ハ彌勒菩薩正面の後ハ韋駄天尊を安置奉奉堂の奉事ハ釋迦ハ
兩側ハ羅漢を安置奉奉の前後ハ皇帝萬歲萬萬歲と書くハ牌を
立並奉奉龍牌とハ此龍牌ハ寺院毎ハ奉奉定法あり官ハ由也

僧徒

多く別み朝廷より免許し不事ありては寺法もく是事なりと依く
 龍牌の供料を朝廷より寄附給賜等此事あり
 天子皇后より龍牌(上使等糸指の事あり)天子位牌紳主等より
 並みありて其の官人年頭みずり寺院へ糸指し此龍牌を拜せ
 ふら朝廷へ拜賀すか意あり

天下の寺院を統領するは禮部の官なり諸筋等其末に知縣あり
 彼に知縣より寺院へ達し僧侶の諸般事を破戒不戒法の僧方等此事知
 縣より出さば知縣めく裁判し輕重事知縣切めく執行し是事ありて上
 司に達し禮部(伺ひの上取し)多し一山限り寺法の通執行し脱衣の控
 あかす形も詳め不事能らば度牒を寺院の任持する知縣へ願出せば
 聞候上書に知縣衙にみわく彼等より五枚十枚宛願請を剃度の

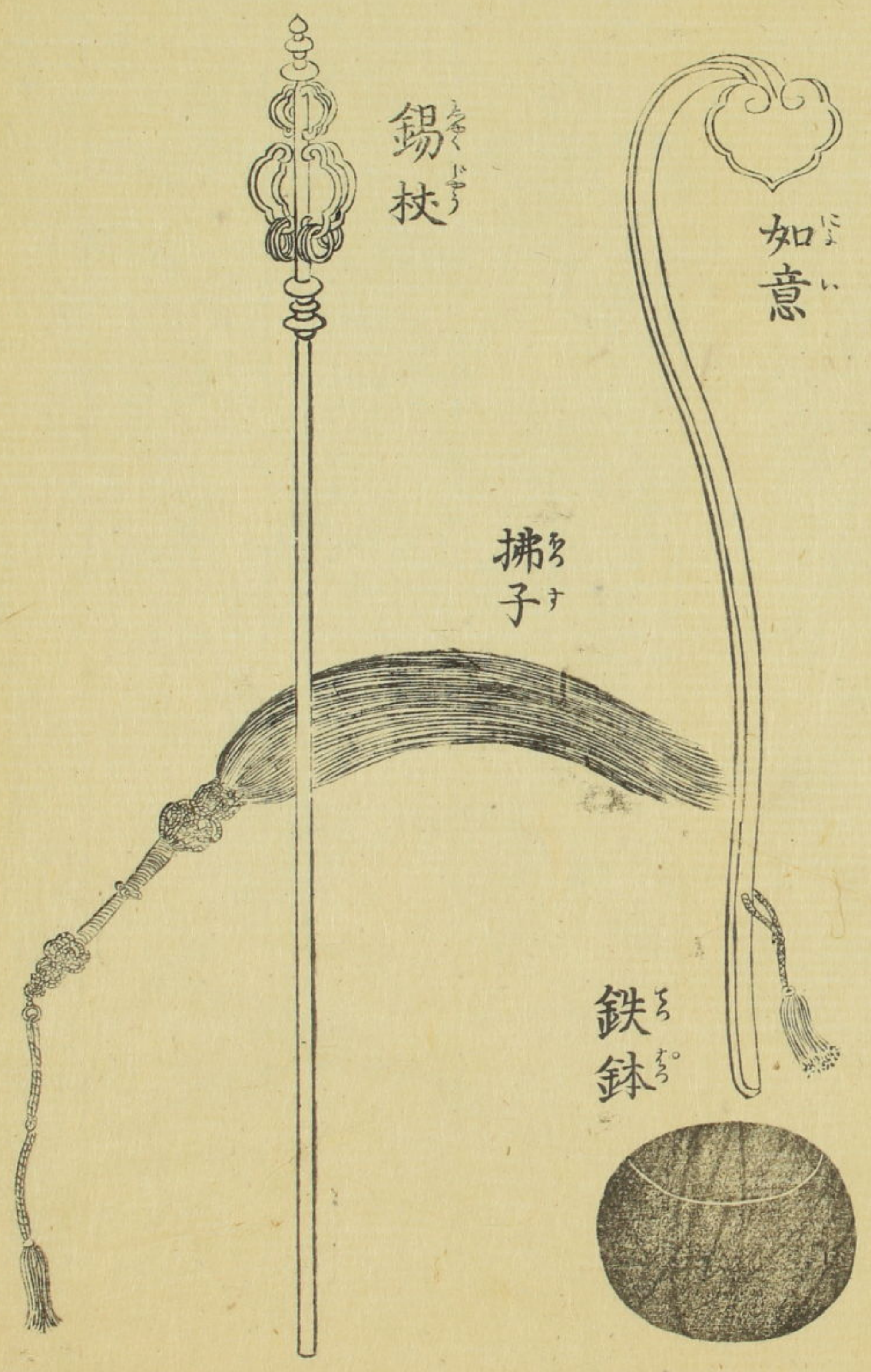
禪杖

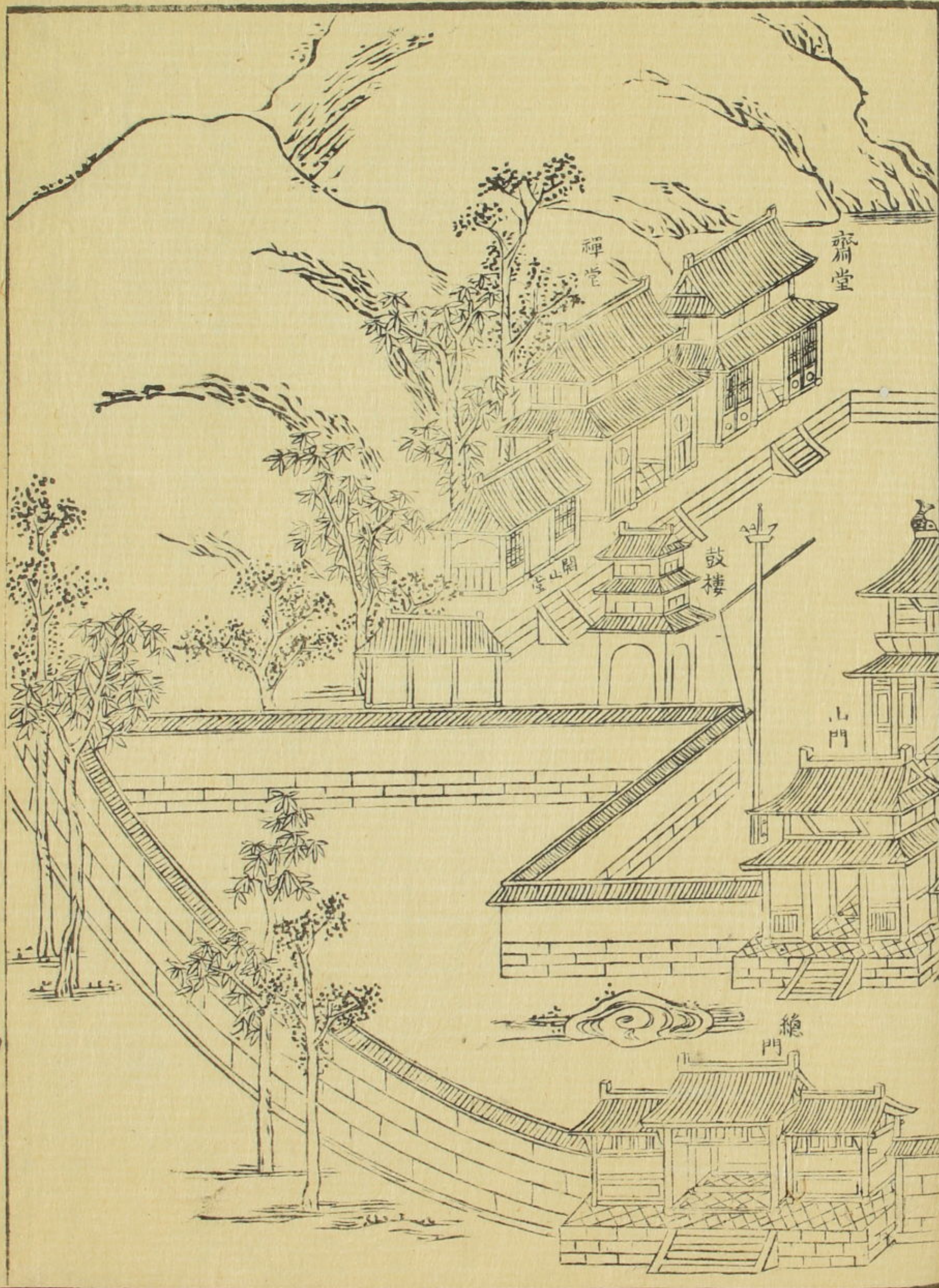
如意

鉄鉢

拂子

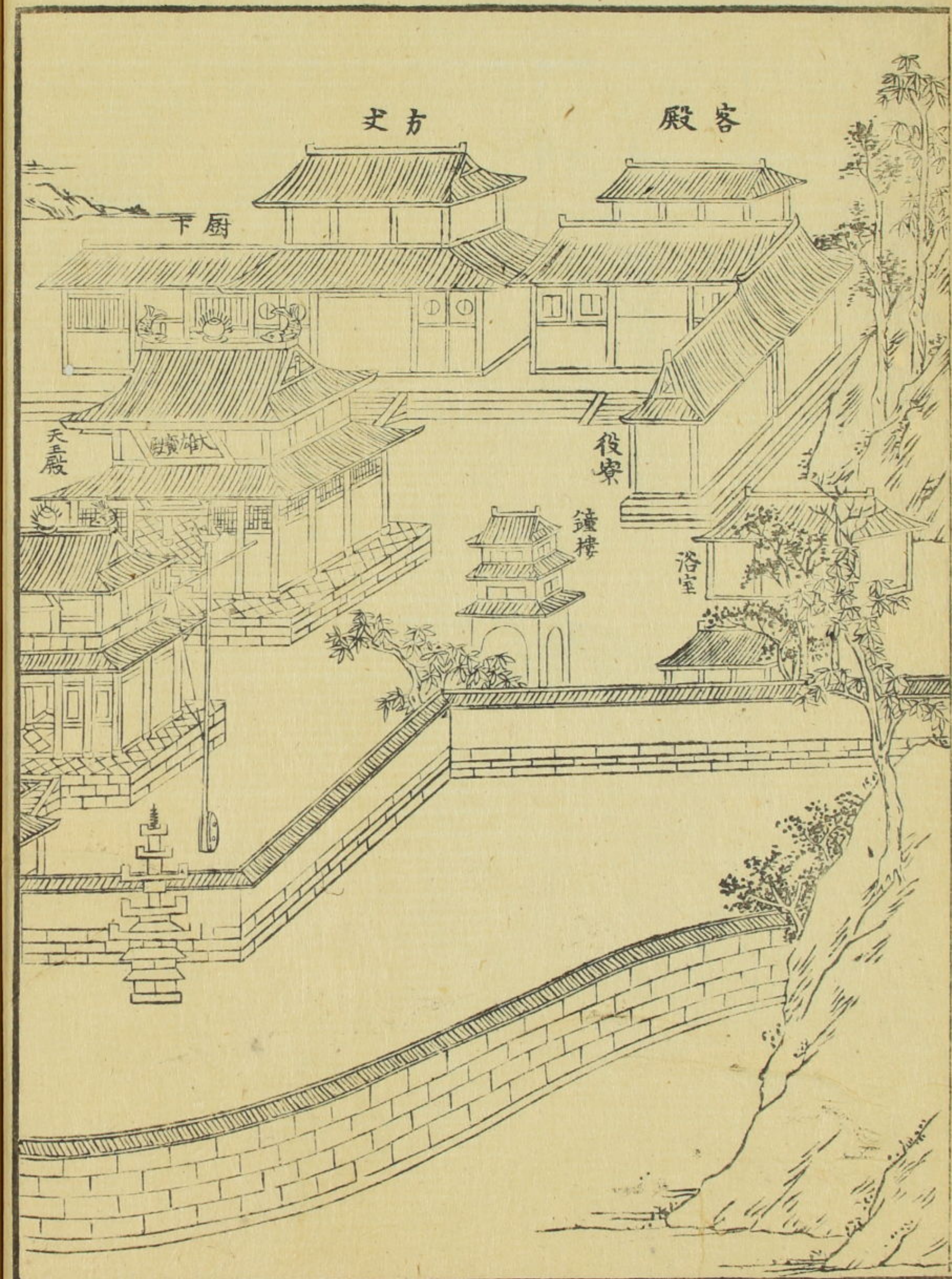
錫杖



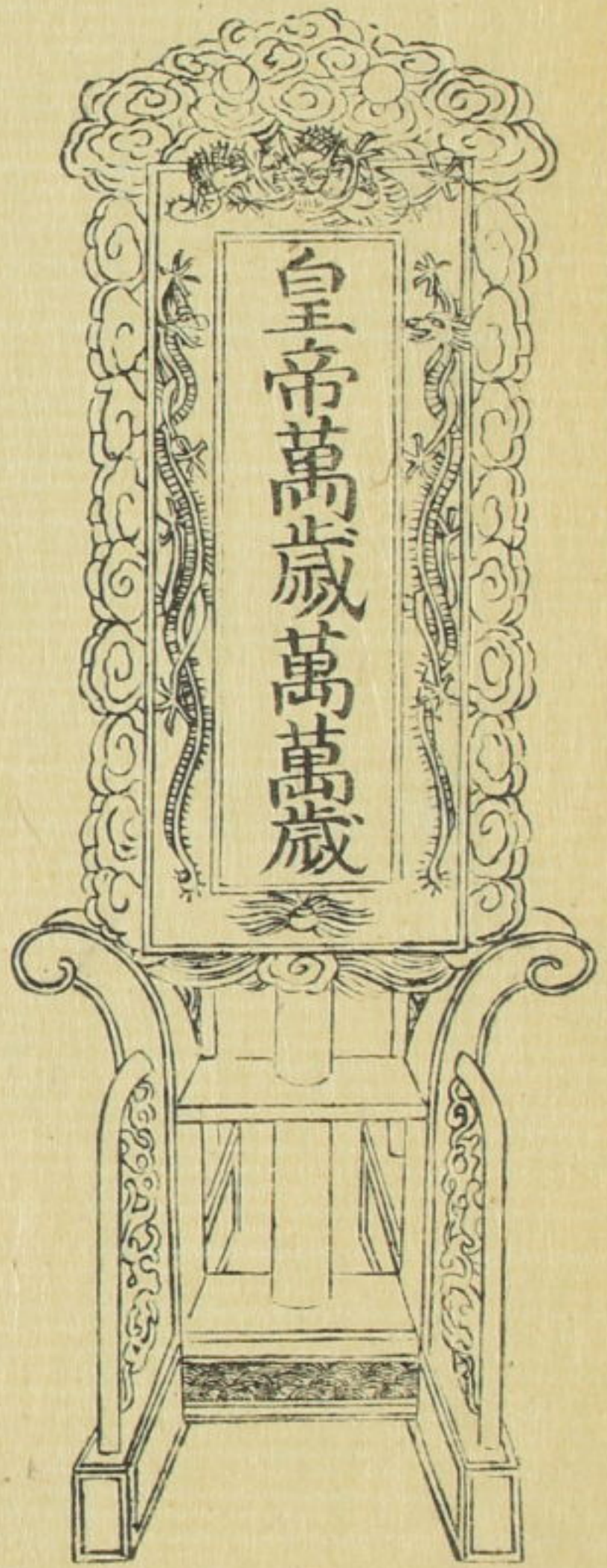


僧徒

四



龍牌



山門外石牌

不許葷酒入山門

高廿六尺廣一尺二寸

僧あふは師の僧たるも任持は願出を請ふまゝに度牒年分の定數ありて
 剃度の人定數等あり且僧死をなれば度牒を其存寺へ返納を存寺より
 官へ返す事なく存寺に留まるとも剃度の僧あふは名成切之渡す
 たり度牒は式を官府ありて僧家のと取扱ふ事なく兼て見及ふ事
 あり不なる事ありて ○僧家の田地を都て僧に支配ありても民は餘
 の支配は寺院の田園を民間に貸耕作せしめ年貢を収むる年貢未進
 不納等ありて不納懸へ願出裁判ありて某園を人吏を雇ひ耕作せしむ
 ○新法邪教ありて其寺中其器及物を其寺に割採れたりて寺院を標
 識建てる事なくありて寺院の敷地を官に書目ありてありたり建てる
 とは其地の知縣めらりて其國師の人造宮に
 禪宗は法衣加衣沙衣を著し

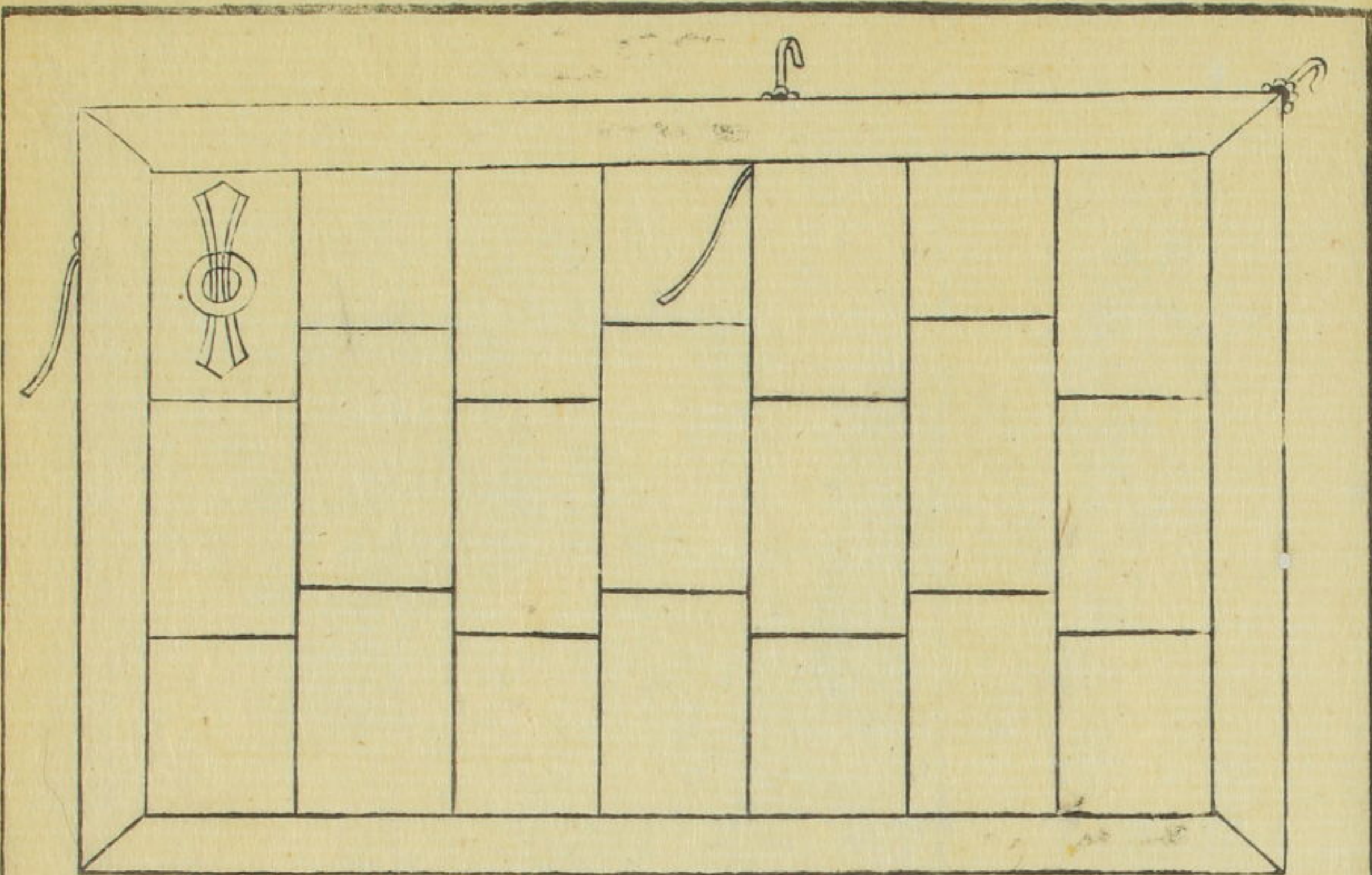
僧徒

假子綿綿等いんすちんけんとうは仕ふしちりちり法衣ほふいの制せい持ぢハ黄色わうじきを用もちハ長老ちやうじやうのみのみ色いろ
衣い成なり用もち各かく等とうかかハ平へい僧そうと素そ衣いあり右みぎ色いろ衣いも定さだりたらふ制せい亦またハ服ふくと棉めん扱じやくを
袖そで短みじハ明めい胡この衣い服ふくののおおく絹きぬ地ぢの衣い服ふくと制せい扱じやくももく大だい寺じハ任にん持ぢともとも着ちやくすすふ事こと
を得えぬ帽ぼう子こハ法ほふ或あるみみああららふふふ衣い表ひょうももふふ用もちハハ用もちハハ寒さむ中ちゆうももハハ着ちやくすす
ああともともああとと鞋せと僧そう鞋せともとも別べつみみありあり

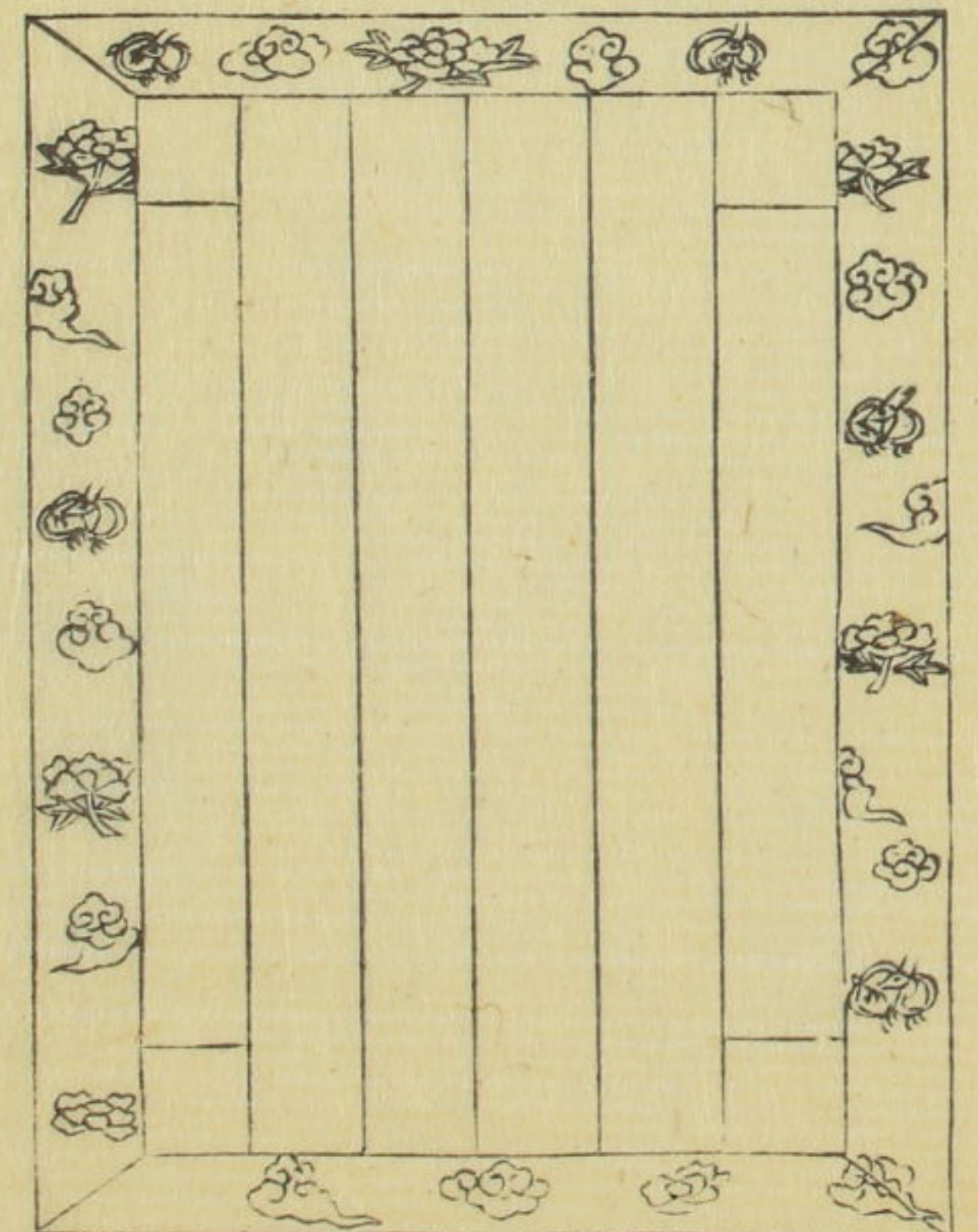
○在家けの子こを僧そうとああすす夏なつハハ唐たう人にんみみ限かぎハハ士し太た史し以もつともとも又また母ぼの大だい病びやうももハハれ
よよもも子こ供く成なり僧そうとああんんと祈いのち執しやく之し或ある其その子この好このハハ早はやく親おやみみ故ゆゑ止とどめめ或ある
家いへ負おくくて子こ供く多おほく若わからら短みじ命いのちみみてて月つきささららああららむむ僧そうと如ごとくく子こ又またあありり
とも惣そう領りやうと僧そうととハハ事こと成なり得えぬ二ふた男おとこ以下いひ下くだららずずハハ年とし寄よをを以もつてて采さい寺じみみ類るい
入いりり不ふ任にん持ぢともとも見みゆゆハハ子この僧そうへ引ひ受うけてて師しの子こ許ゆるみみ傳でんふふ利り發はつせせふふ
ぬぬらら髪かみの法ほふ衣いも惣そう領りやう或あるハハ後ご角かく等とうももく智ちふふ幸さいふふ一ひと先せん選せん僧そう堂だうとと云いふふ

不ふみみ出で一ひと成なり習しやくせせ回かい書しよ五ご行ぎやう成なり教きやう念ねん經ぎやう執しやく讀どくせせ十五じふご六む歳さいみみ至いたるる能よくく習しやくハハれ
ふふ分ぶんふふ時とき利り度どをを若わからら其その内うち試してて學がく問もんみみ許ゆるきき又またとと出でるる成なり成なり好このきき者ものハハ親おやをを返かへ
すす事ことももあり能よくく習しやくハハ得えるる者ものハハ利り發はつの言ごん見けん成なり定さだりり任にん持ぢをを始はじめ寺じ中ちゆうの僧そう殘ざんららば
卒そつ堂だうの佛ぶつ定さだりり出で排はい班はん一ひと式しきの如ごとく誦じゆ經ぎやう者もの若わからら右みぎのの新しん僧そうハハ成なりささ者もの成なり連れん來らいるる佛ぶつ
弟ていみみありりく頭かう髮はつをを判はん髪かみをを判はん以もつてて若わからら相さう持ぢ分ぶん格かくホホ式しき師しの僧そう法ほふ名な成なり書しよ佛ぶつ若わからら供く拜はいとと
其その法ほふ名な成なり度ど牒だつみみ書しよ入い新しん僧そう一ひと法ほふ衣い加か沙さ衣いホホをを着ちやくせせりりてて世せ尊そん佛ぶつをを拜はい
せせりり次つぎハハ師しの僧そう成なり拜はいをを師しの僧そう時ときみみ唱なう言ごん成なり授じゆけけ五ご戒かい三さん帰き寺じの清せい規ぎをを教きやくせせるる
大だい衆しゆをを拜はい謁てつししてて佛ぶつ成なり退たいきき選せん佛ぶつ場じやう入い師しの僧そう任にん持ぢとああらられれハハ其その日にち師しの僧そうをを今いま
日にち何なに某む儀ぎ利り分ぶん定さだりりきき任にん持ぢ入い規ぎ式しきの通つう執しやく行ぎやうとと返かへ言ごんありり一ひと山さんの僧そう通つう遠えんわわりり
てて式しきの如ごとく執しやく行ぎやうハハ右みぎ規ぎ式しきとと同どう一ひと山さんの僧そう徒た寺じ内うちみみああららむむ祝しゆ悦えつの饗きやう食じやく應おう等とうありり親おやかかと
よよらら加か衣い沙さ衣い或あるハハ端たん物ぶつ索さく麩ふ松しょうの物もの身みももみみ意いハハ師しの僧そうみみたたくくふ選せん佛ぶつ場じやうみみく

僧徒



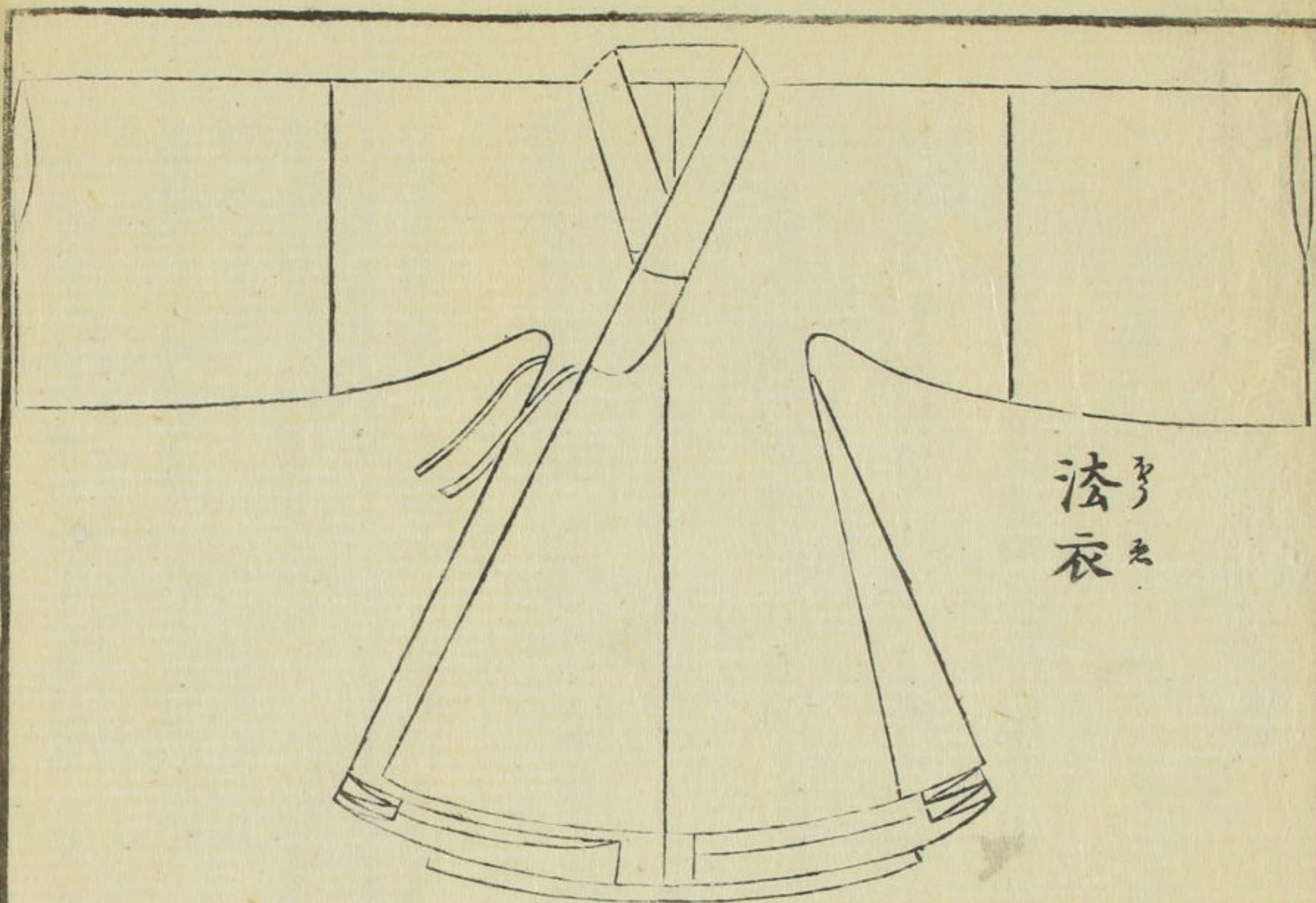
僧徒



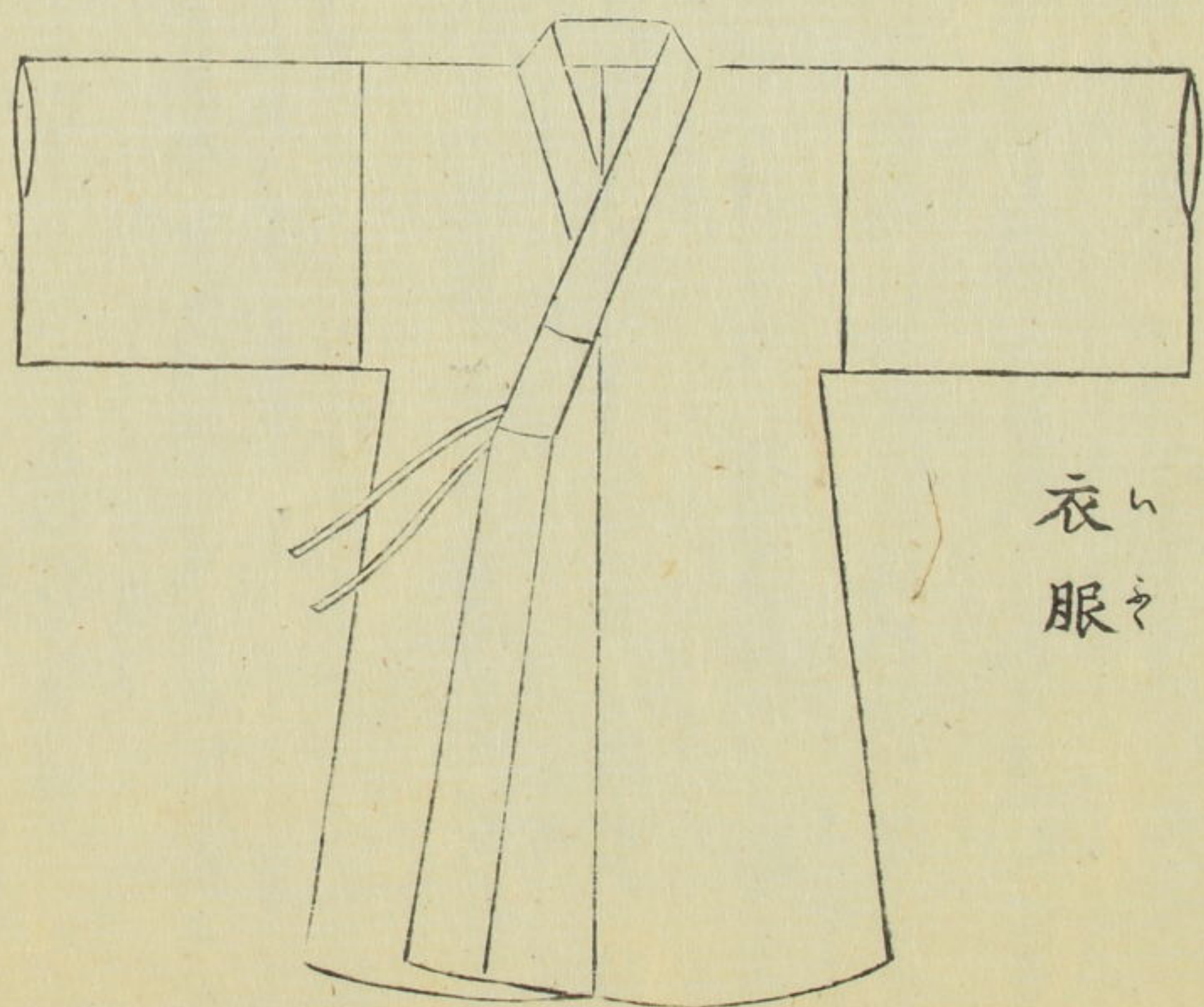
袈裟

座具

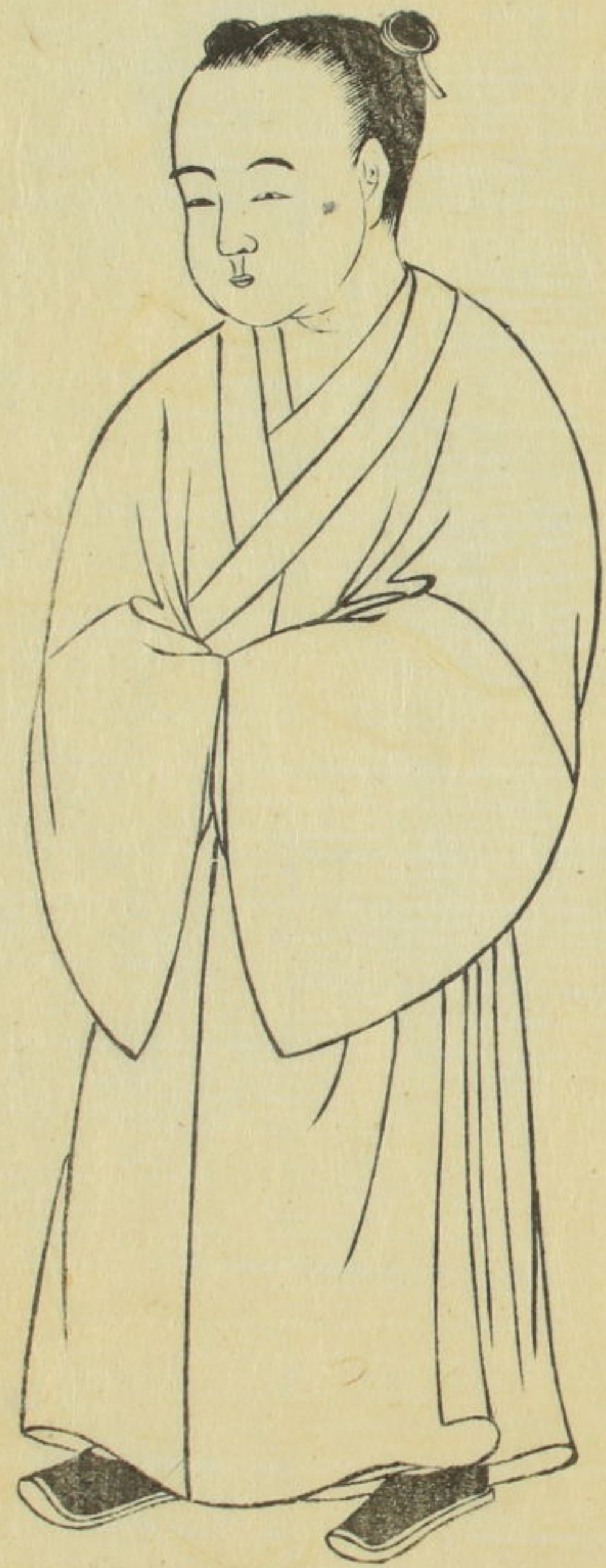
七



法衣



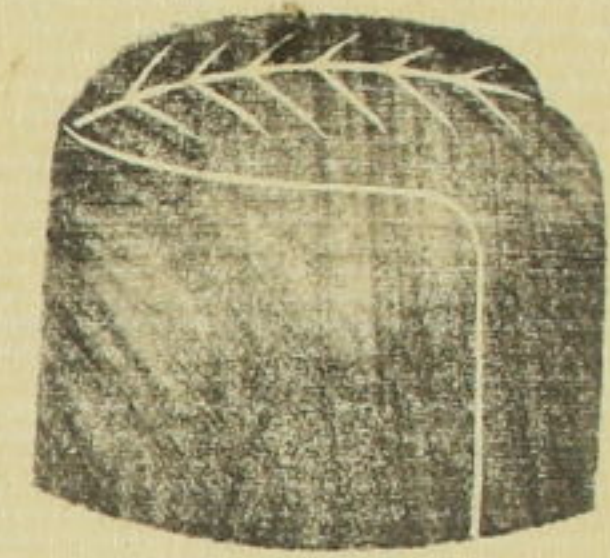
衣服



總角くわかく

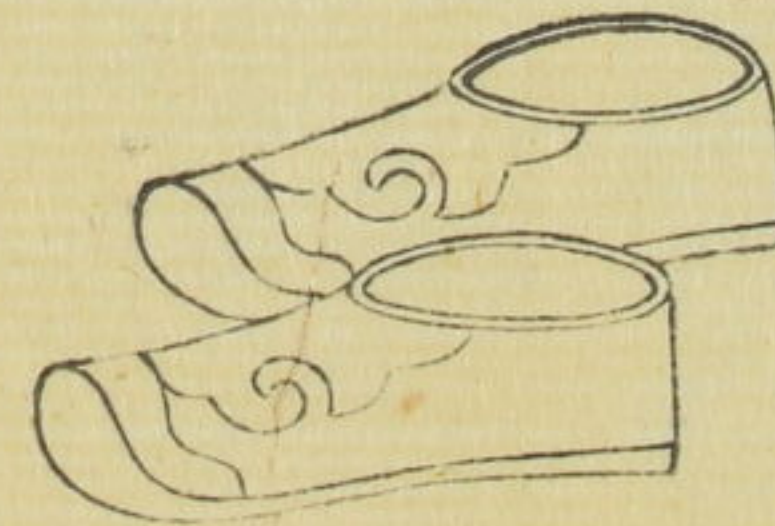


前面ぜんめん



横よこ

帽子ぼうし



白絲しろいと

紅緞子べにじゆん

僧鞋そうげ



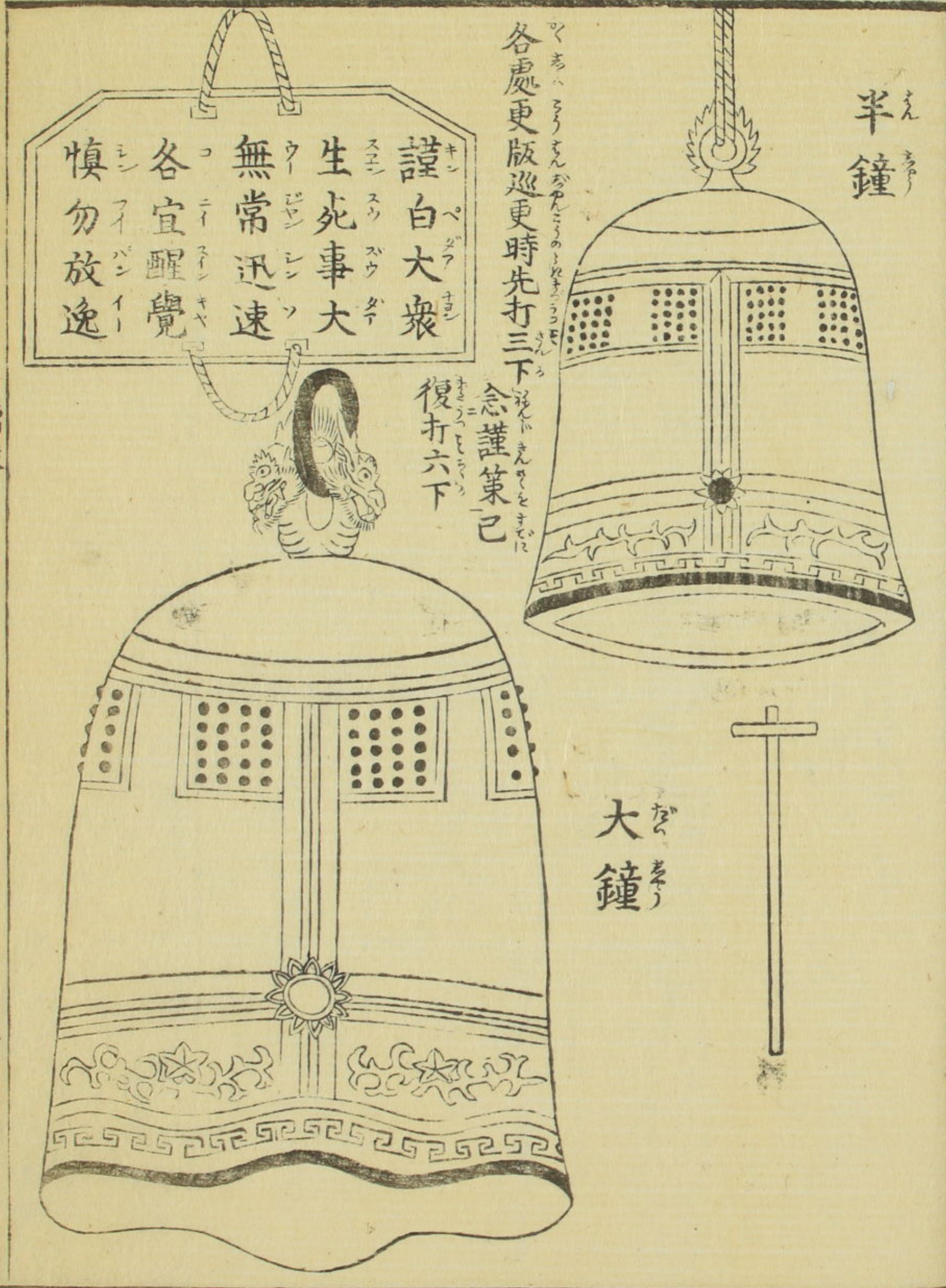
誌公巾しこうきん

小沙彌



座禪回音佛經等の勤字を多しむ年長の内々小沙彌小僧と云ふと号し諸事諸事を
 了す了す○月々勤めを巡照と云ふ役僧と云ふ夜不夜を勤め夜中木魚を敲き
 無常迅速一心念佛南無阿彌陀佛と唱へ寺中夜巡は一更と母み存堂ありて
 禪堂掛たる更版と云板を叩き此板を叩きて又を寫考み讀諸寮に觸る
 五更の更版を叩けば鐘司鼓と云役僧鐘樓鼓樓み登り鐘を撞大鼓を叩
 其内殿司後僧の各佛之燈明を照し香花を供へ打掃潔淨を身止此は鐘を
 亦半鐘を聞く首座以下寺中の僧徒らに奉堂み敬集し誦經始ふ大衆の内より
 一人大木魚一人銅磬を鳴く年若僧と云小磬小鏡鼓を敲成鳴し誦經の内
 住持提爐を持併殿並み皇帝の龍牌及靈廟其外諸佛拈香一方丈一塔ら
 明方み誦經終るとてまくの寮に入典座後僧の各齋堂の茶み飯柳と云魚の形に推
 する掛るあり叩き又雲版と云物成叩けば住持成始り首座以下僧との内々

寮の僧引磬を打齋堂も集る位は此補經一齋成吃一平す之の
 寮め入座禅修學も修らるあり又托鉢も亦あり昼七時めら寮堂も掛
 らる半鐘を叩けば朝のおと諸僧集りて補經の夜一更めら鐘樓の大鐘
 太鼓を打 二更の更版を聞く座禅を止め休息は
 佛の供物ら毎朝菜成點の飯の初徳成供の朔日十五日の菓子野菜類四種
 宛供ふ事定式あり 法會執行の時い多少をせりか
 〇 昼夜寺院の鐘を七時五時夜五時此三度より外時刻を告ふ事あり
 出世成志の僧の遊方僧とて諸國を巡り知識を尋ね其寺に掛錫し重り
 座禅回答成修と此向成行者とて修行進んて悟りて道を問はれ其頼る
 知識を亦も師と行と先師の事を受業師と唱ふ行者の向ら中切の有發そ
 修行専ら此行者の内より多く名僧出たりとす



半鐘

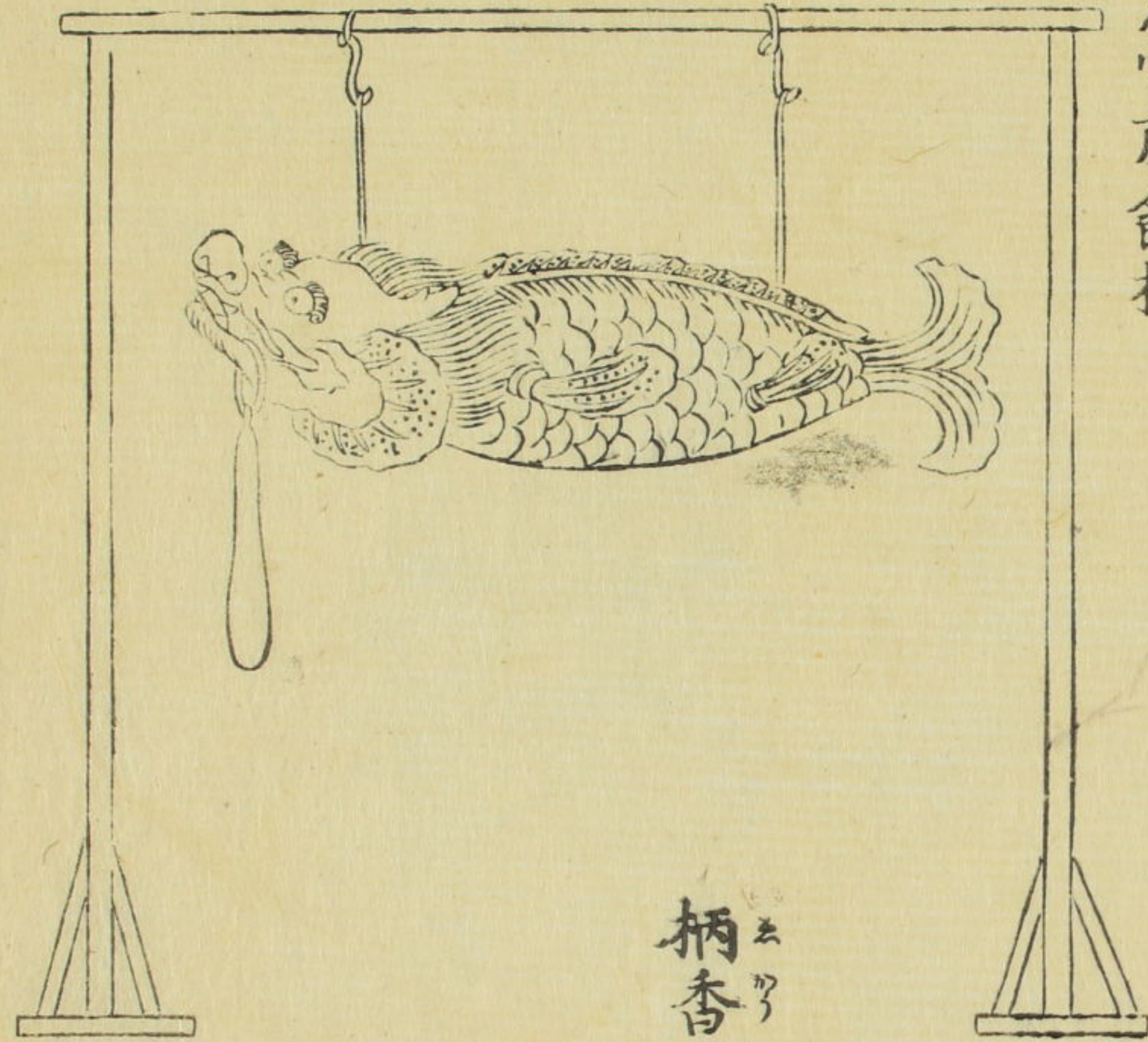
大鐘

謹白大衆
 生死事大
 無常迅速
 各宜醒覺
 慎勿放逸

各處更版巡更時先打三下
 念謹策已
 復打六下

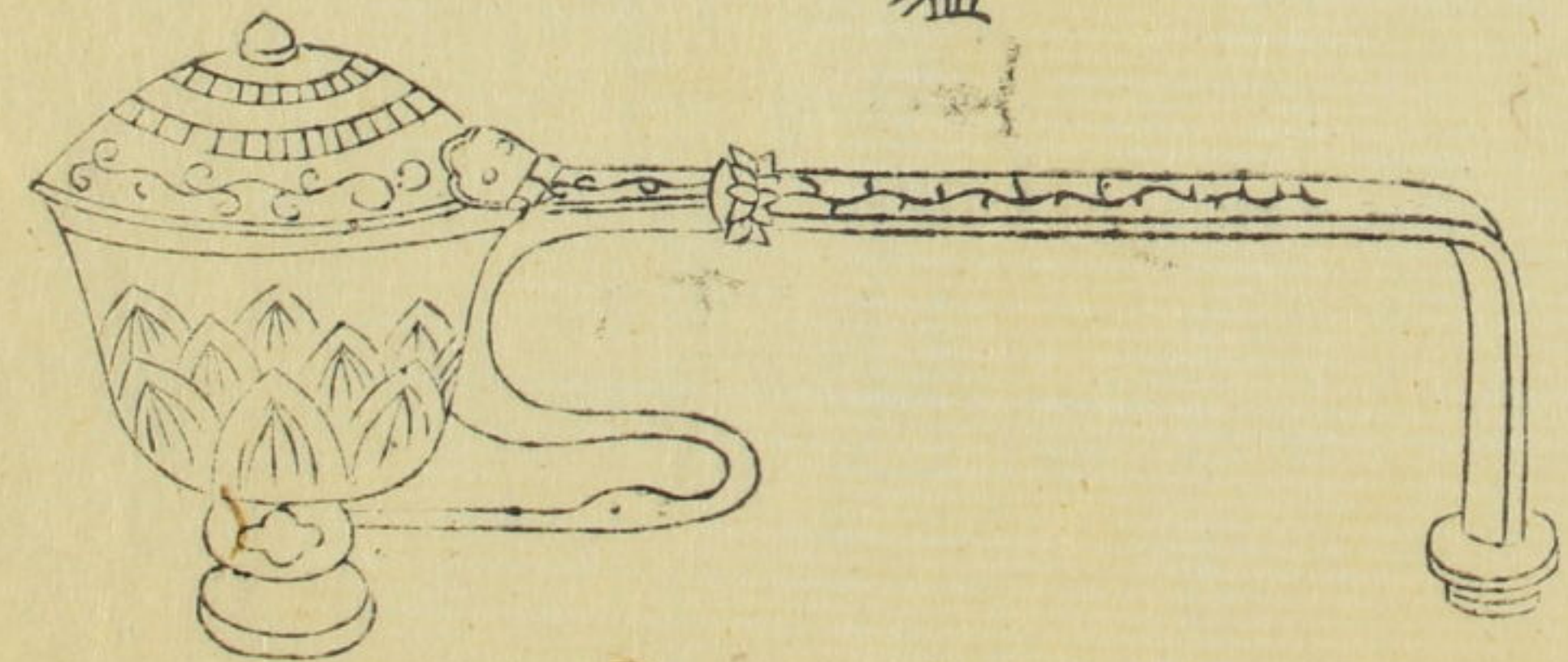
僧徒

十

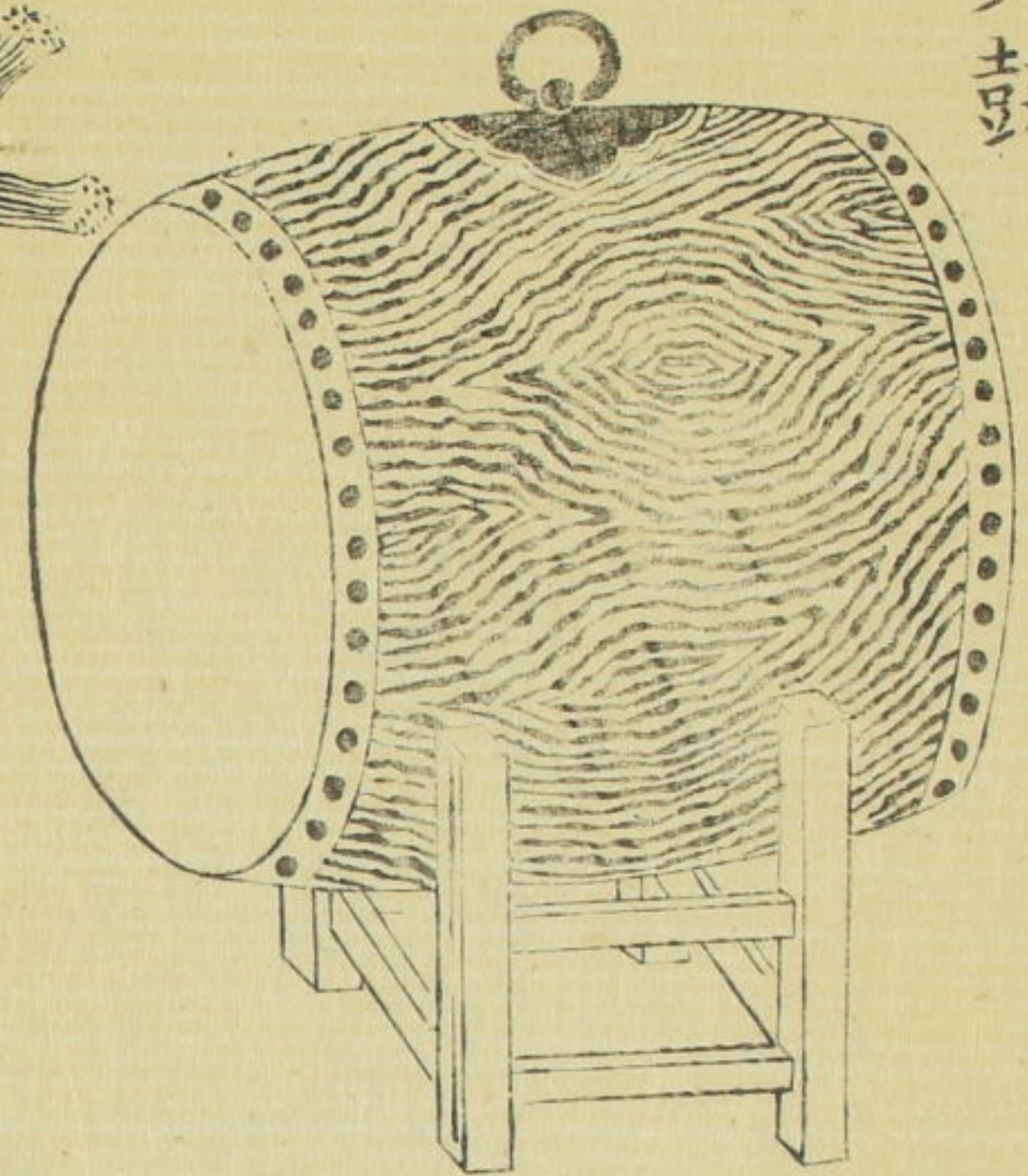


齋堂前飯柳

柄香爐



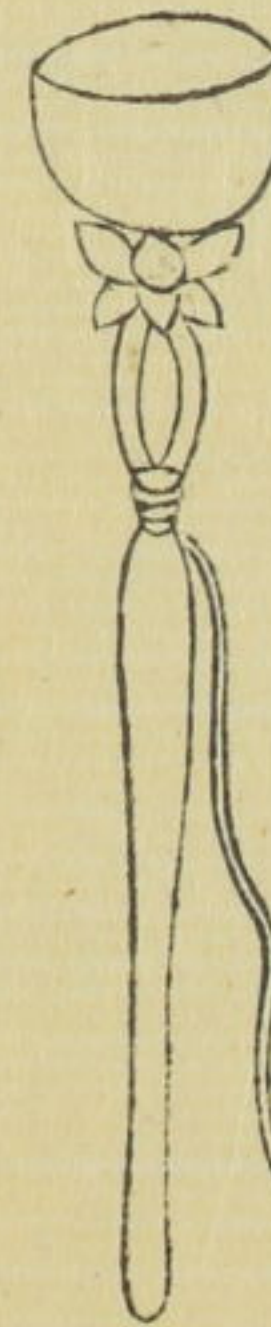
大鼓



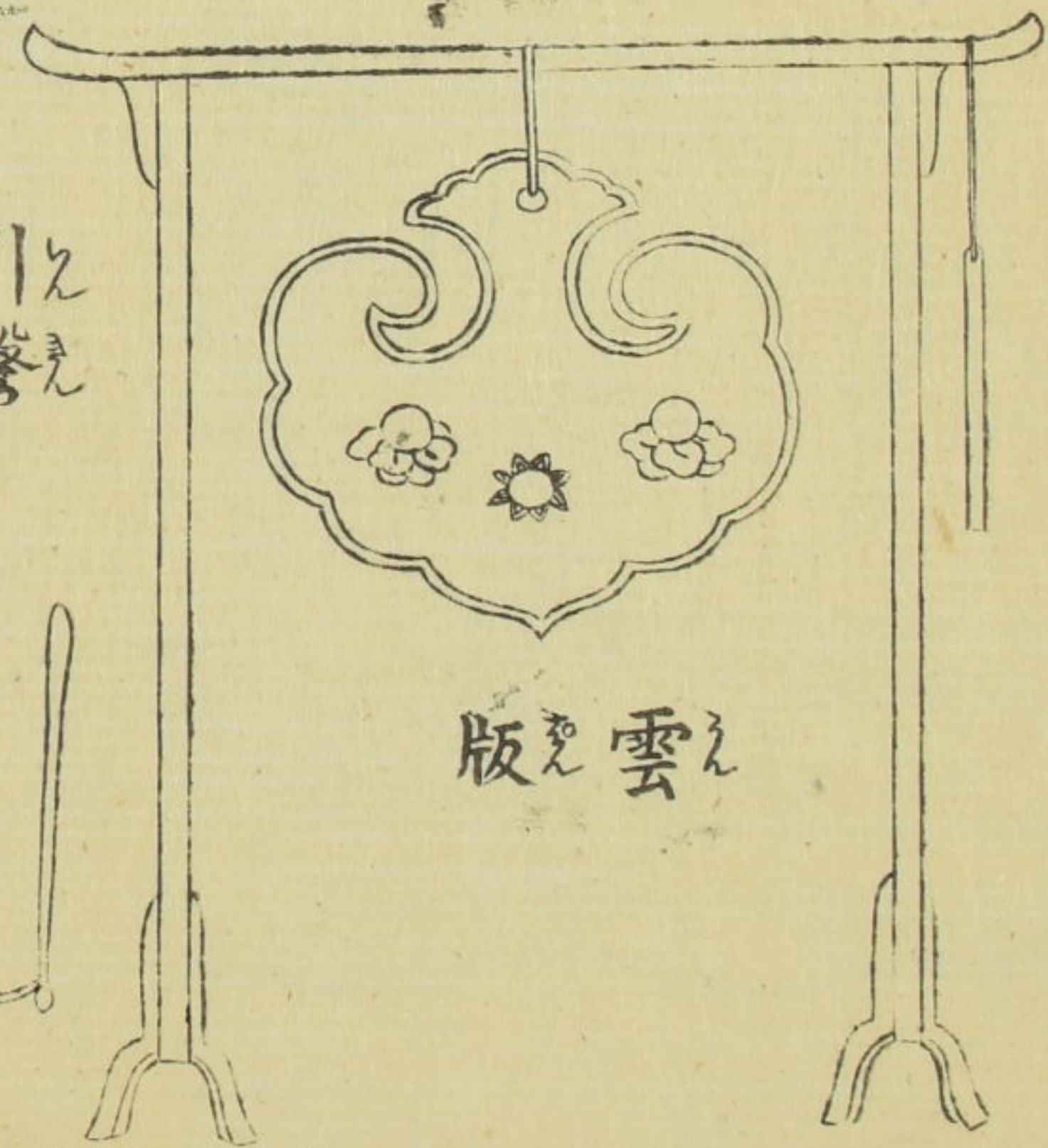
鏡鉞



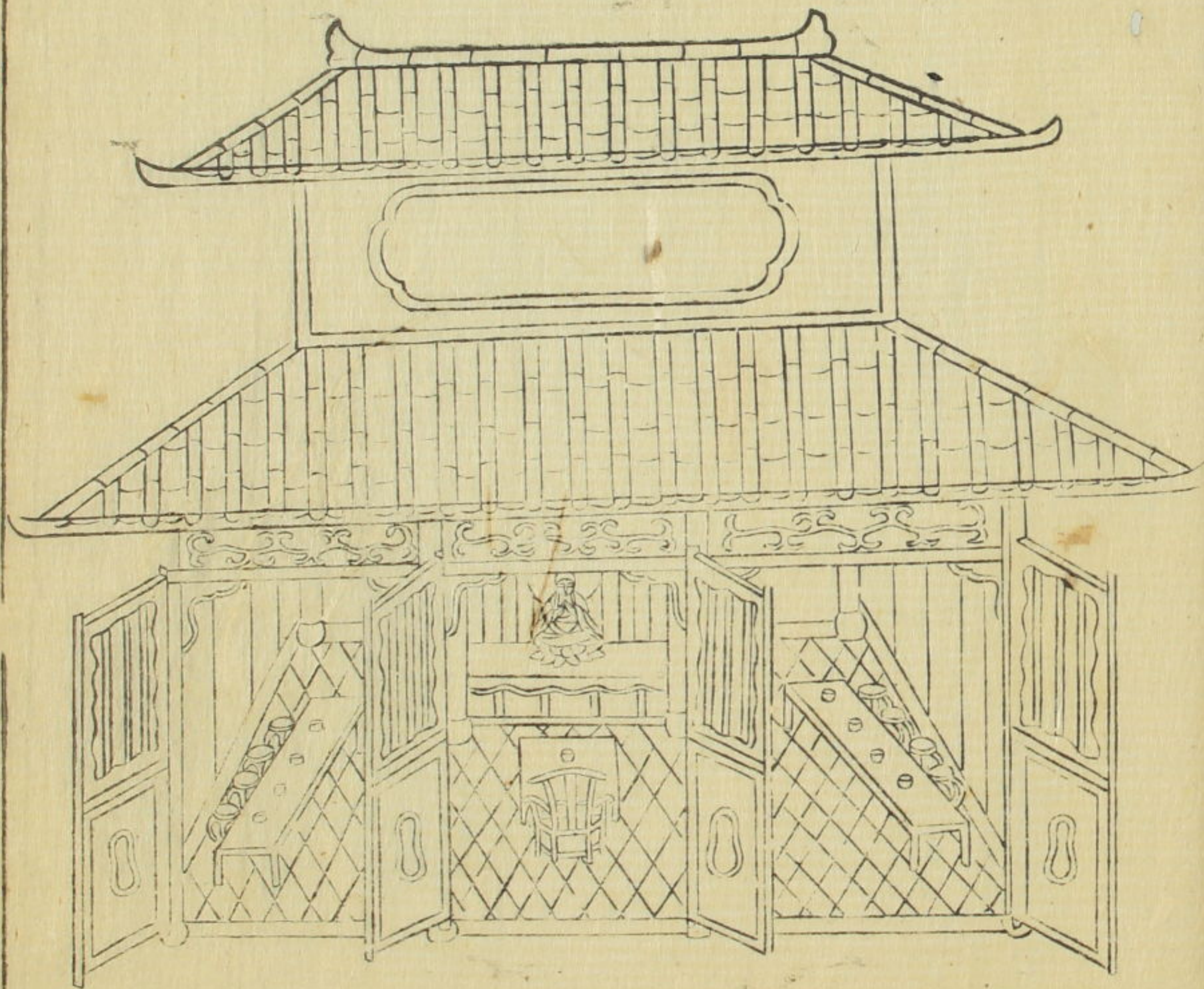
引磬



版雲



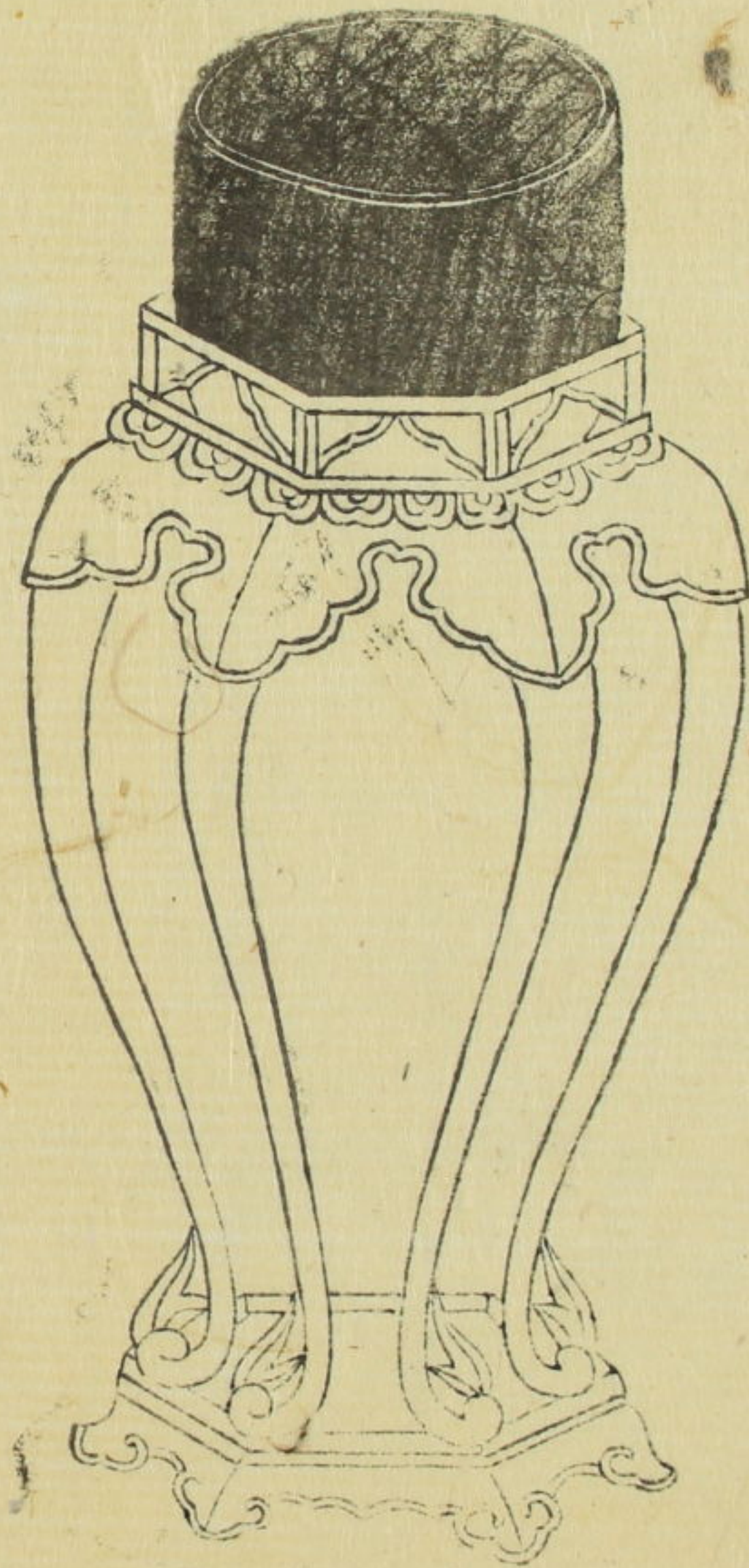
齋_ま吃_ま堂_い齋_ま



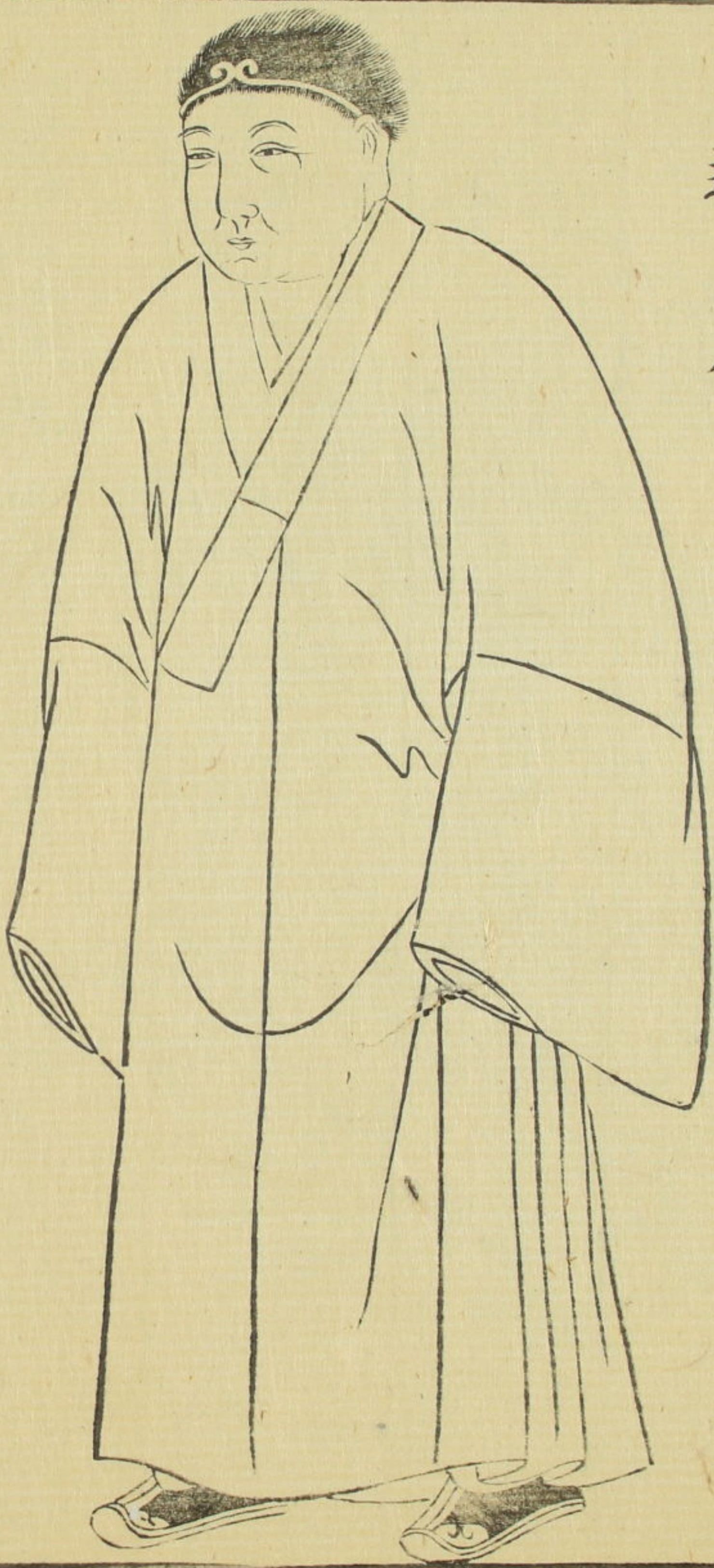
僧徒

十二

銅_ろ
磬_{きん}



遊方僧



○托鉢みせの僧の内喝食とる者あり是と米錢其外施行の物は何品も限らば

取收り席寺の上まゝみ取認り差配とる後僧あり托鉢み出さる僧も寺小急

用事あり又の寺小非常の事ある時ハ大鐘を撞け外出の僧談ら守り席と

○檀越より先祖の年回其外法會あり僧侶を招き其施主より米を頼もあり

又の供養あり頼もあり供養日数三日の間誦経成ありむあり五日七日の間施主

の求めも同じく焰口施餓鬼水懺等の佛事成執行を重んじた僧來旅の時

と主人の門前まで出迎ひ互み往儀を述廳堂へ請へ茶湯進め早くて家廟へ

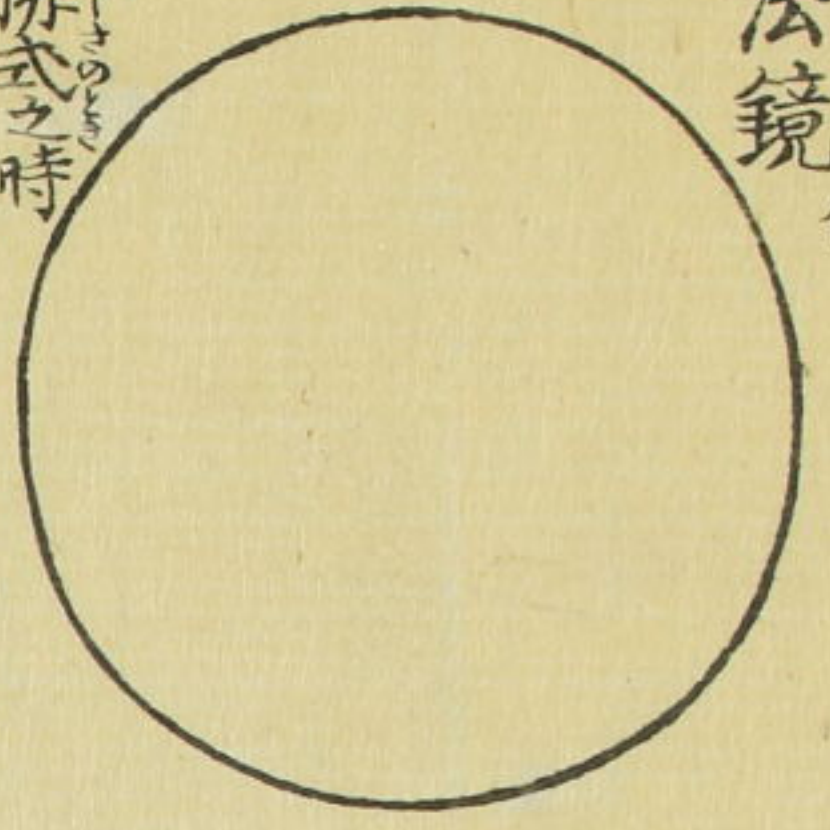
案内し靈茶あり拓香誦経は法事より六布施やして一日み僧一人前平僧ハ

錢百文百五十文住持長老は銀十文程送る足成懺資とるを施主の貧富に

因り等かたけ○焰口施餓鬼執行の時ハ壇度足り新み佛座成設け

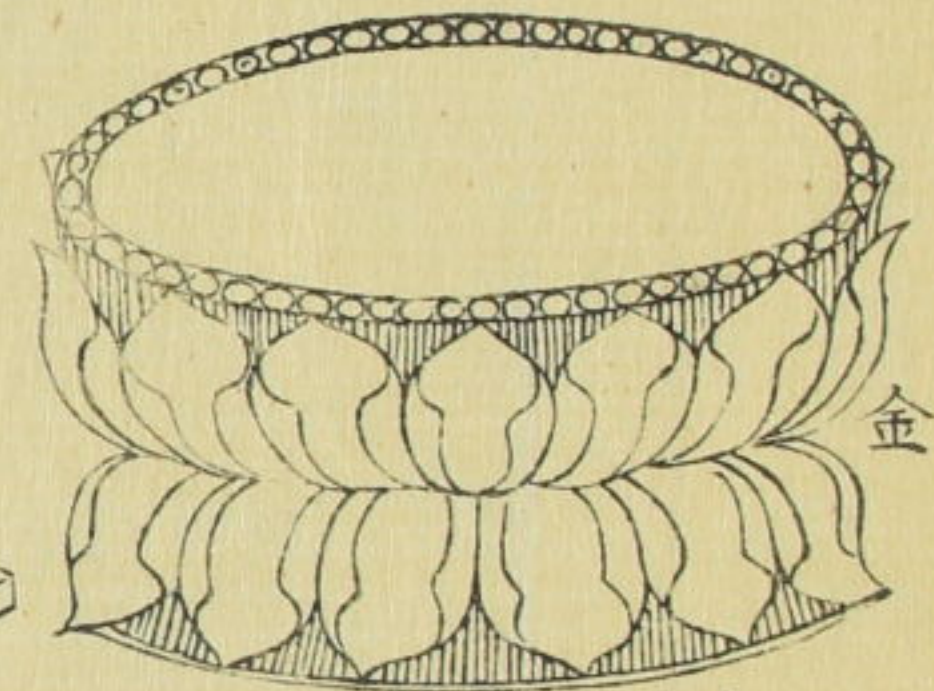
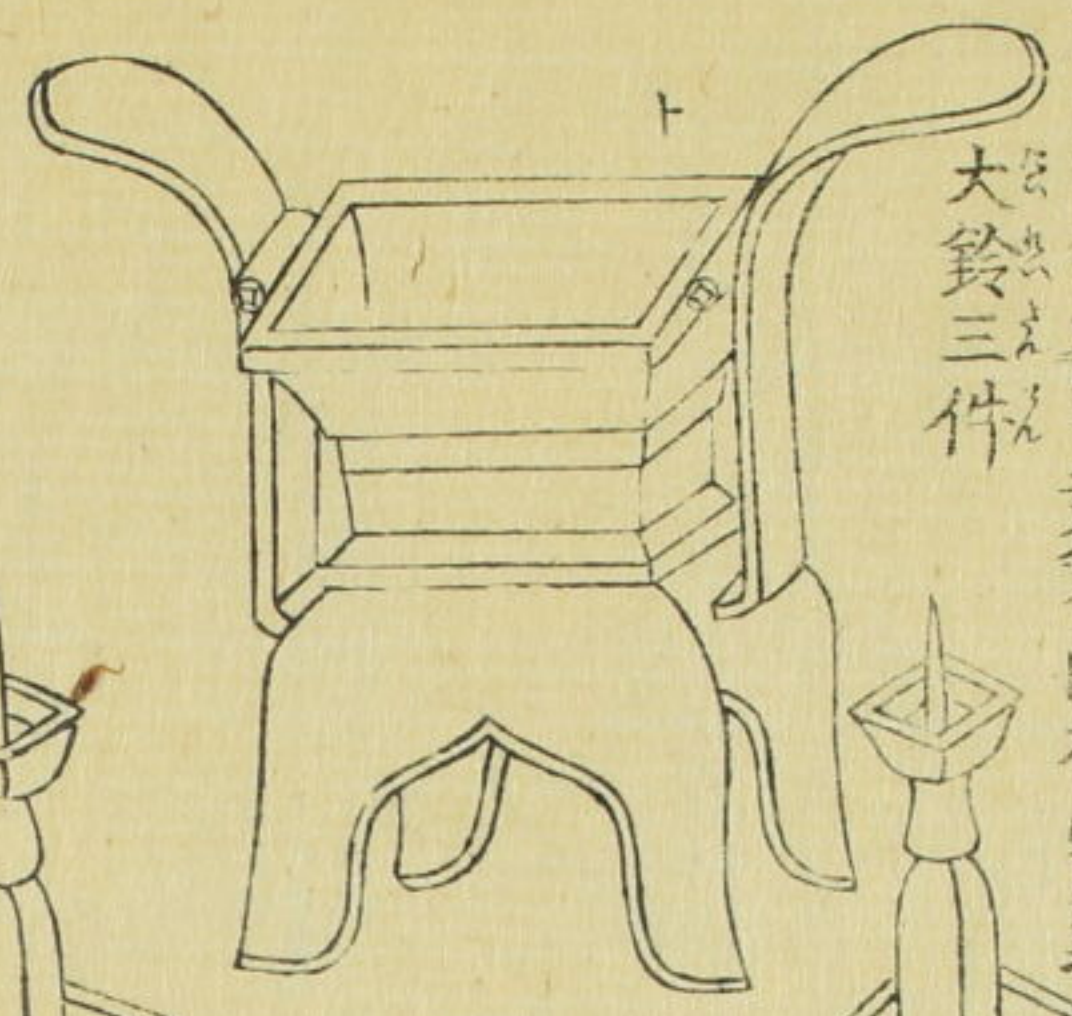
志は之靈の神主牌を五燈成懸し錫五事を傍に

法鏡



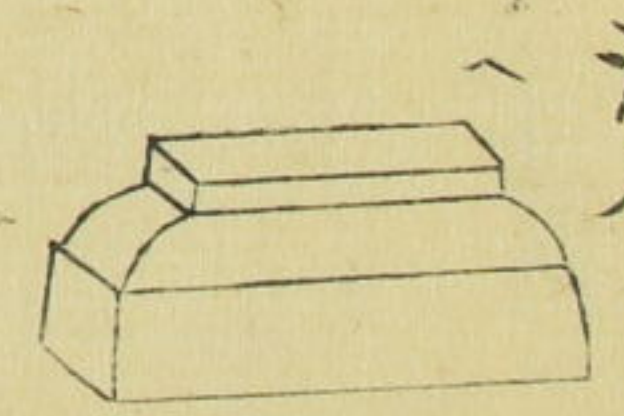
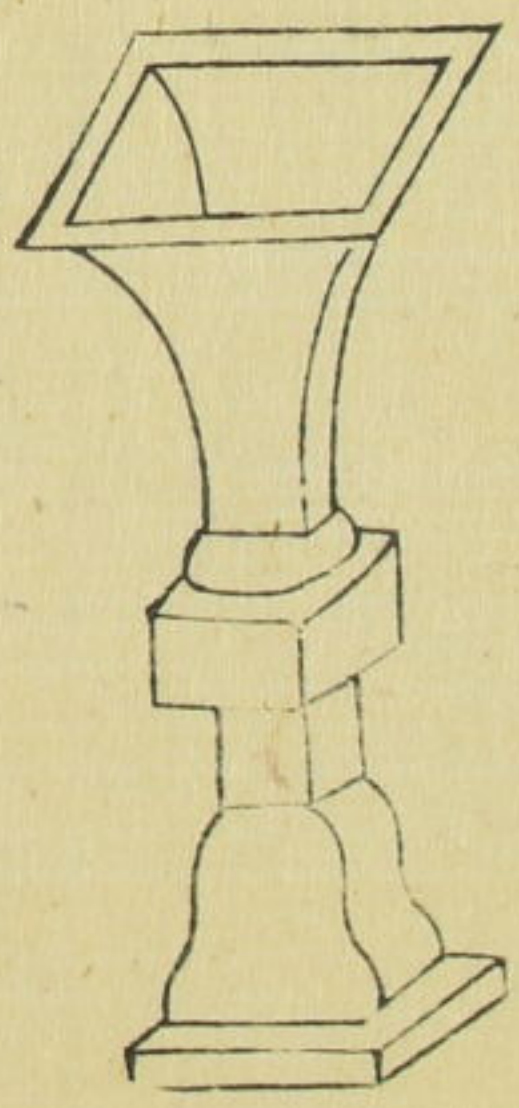
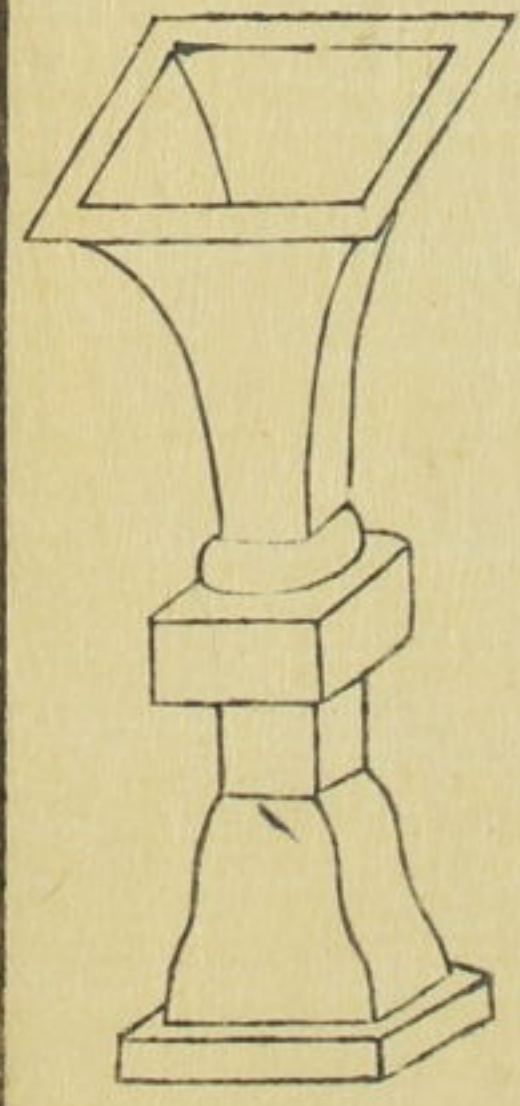
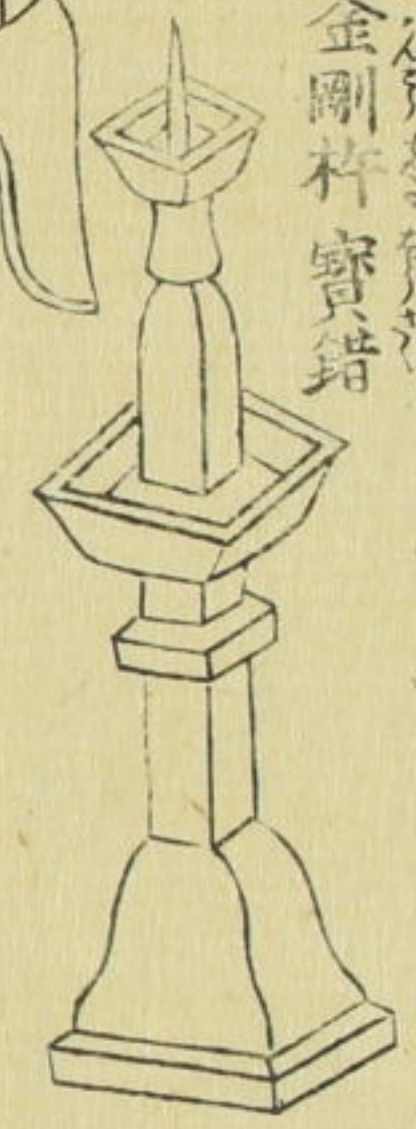
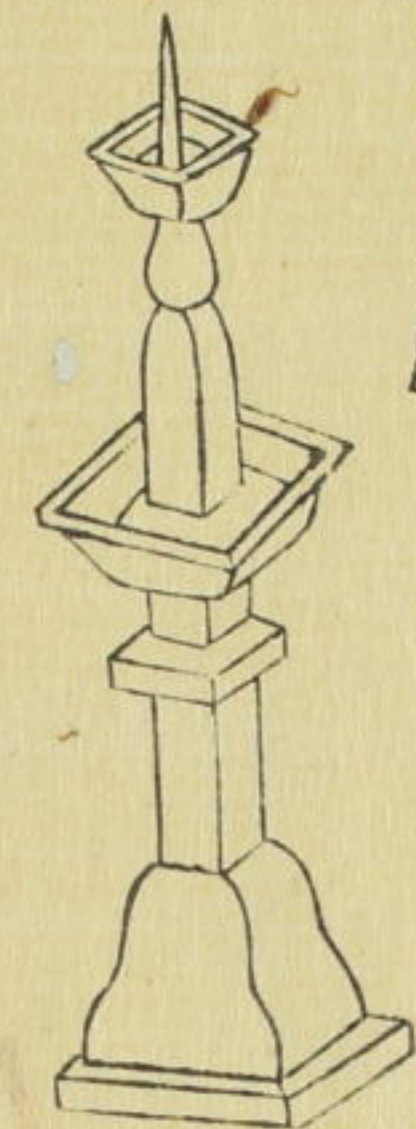
排式之時
鏡面朝天置臺上列金剛杵寶錯

大鈴三件



曼拏羅
法臺

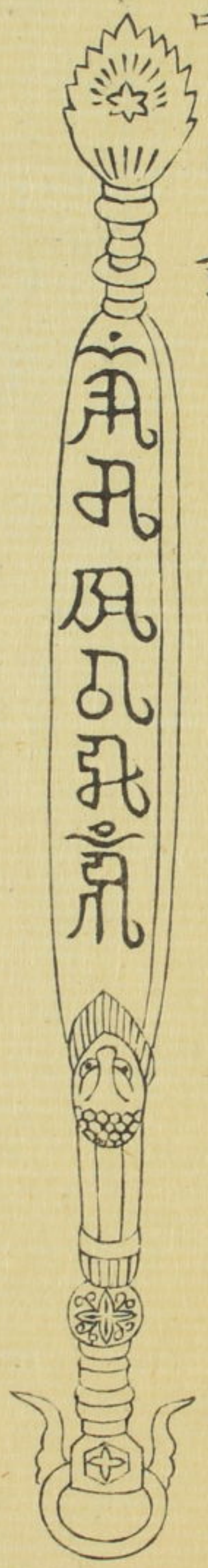
錫五事
和名五具足



法尺

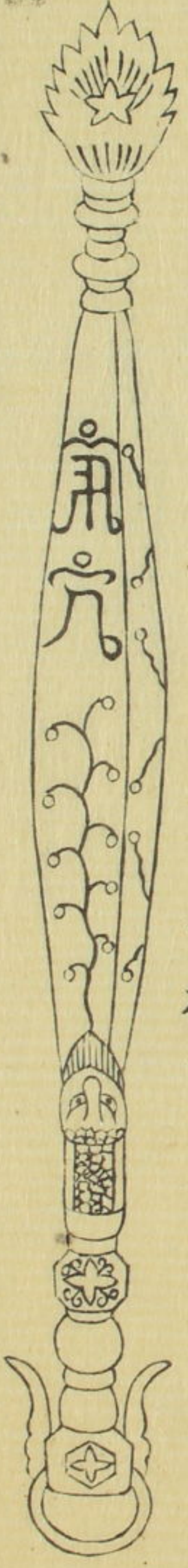
排式之時置
中座經典之右

寶錯



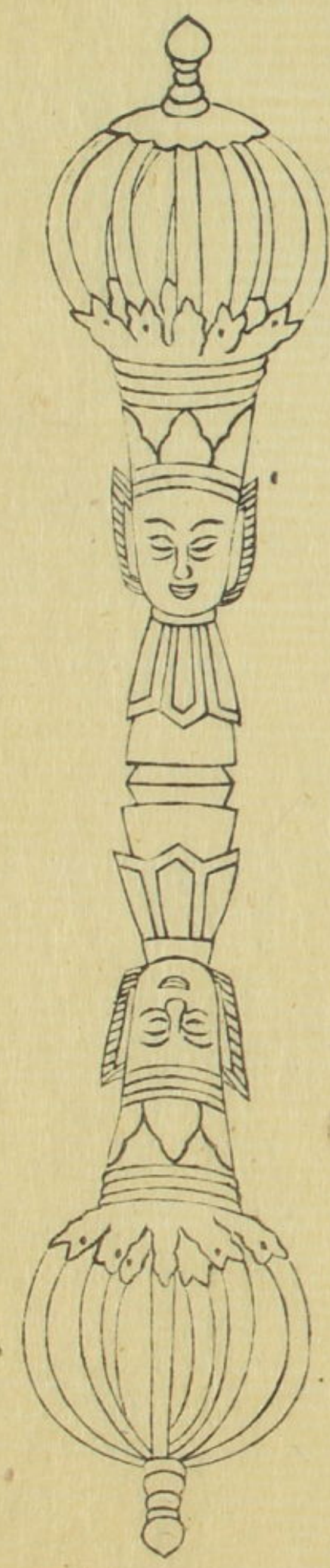
片樣式

同

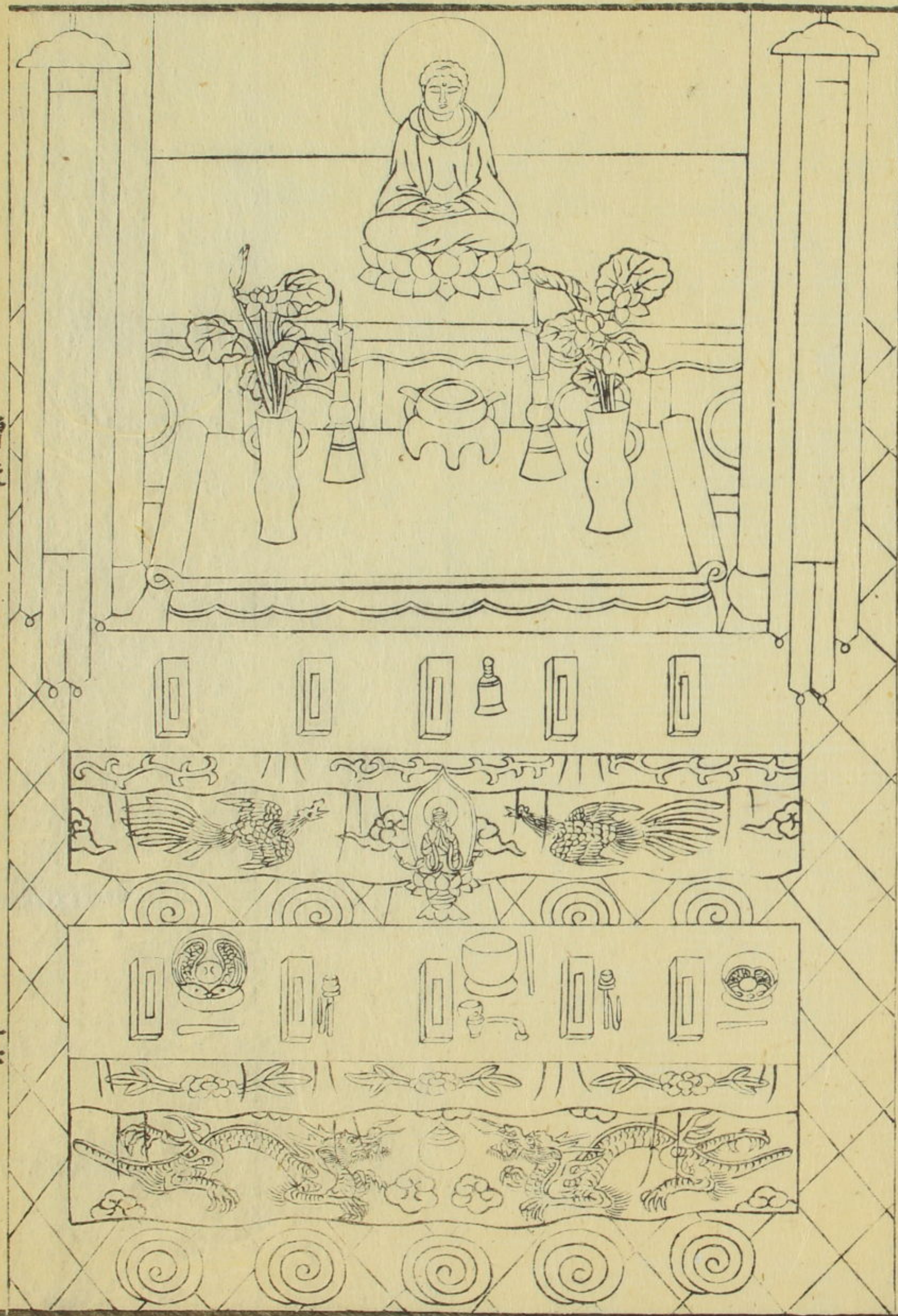


方樣式

金剛降魔杵



僧徒



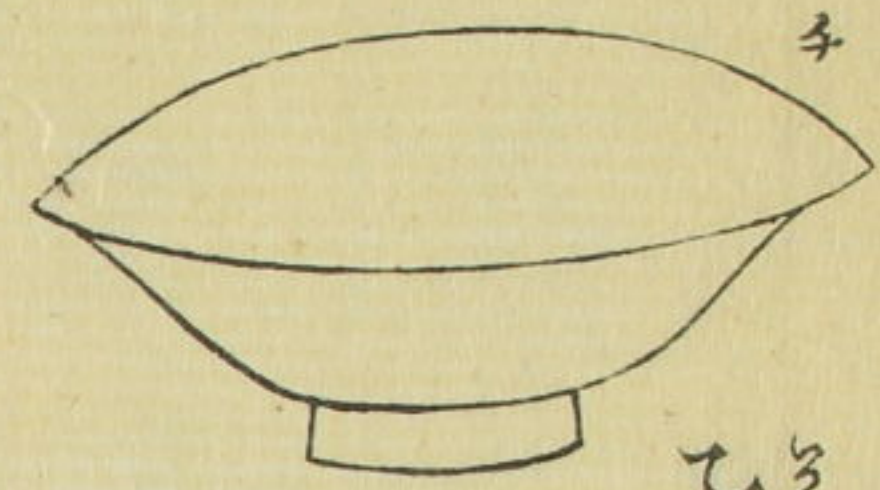
水儀排式之圖

中尊佛觀世音

僧徒

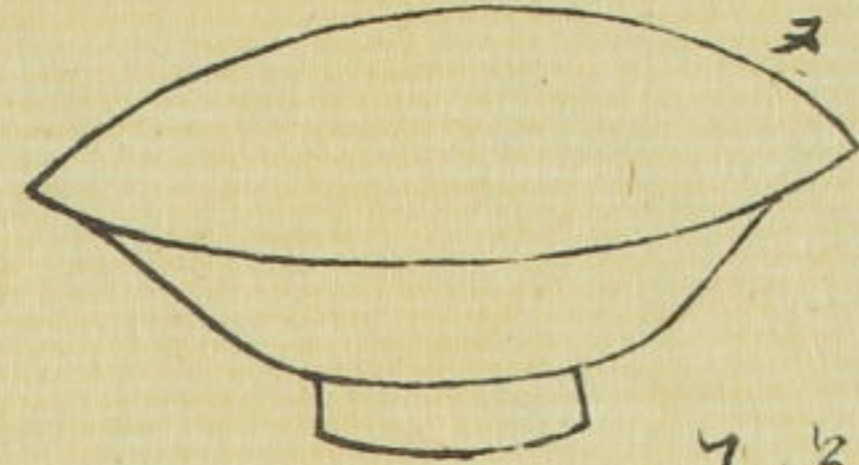
十六

花米鉢



乙 盛饅頭

全



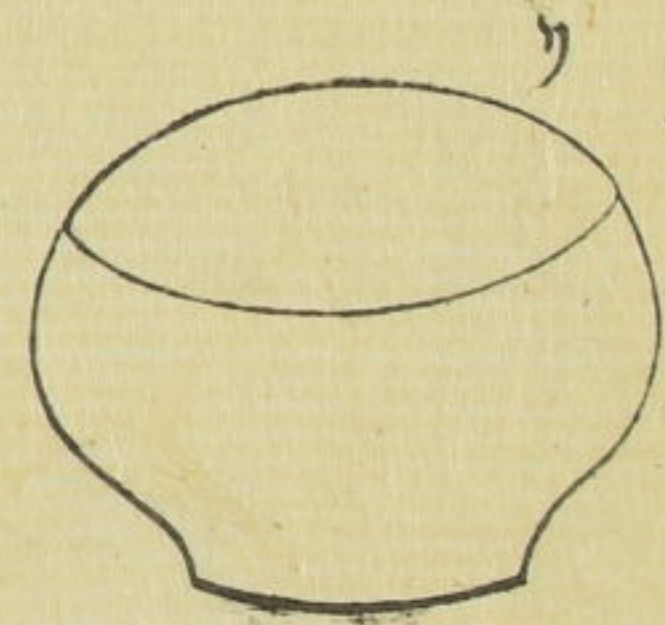
乙 盛花美米

甘露瓶



排式之時
挿柳枝

洒水器

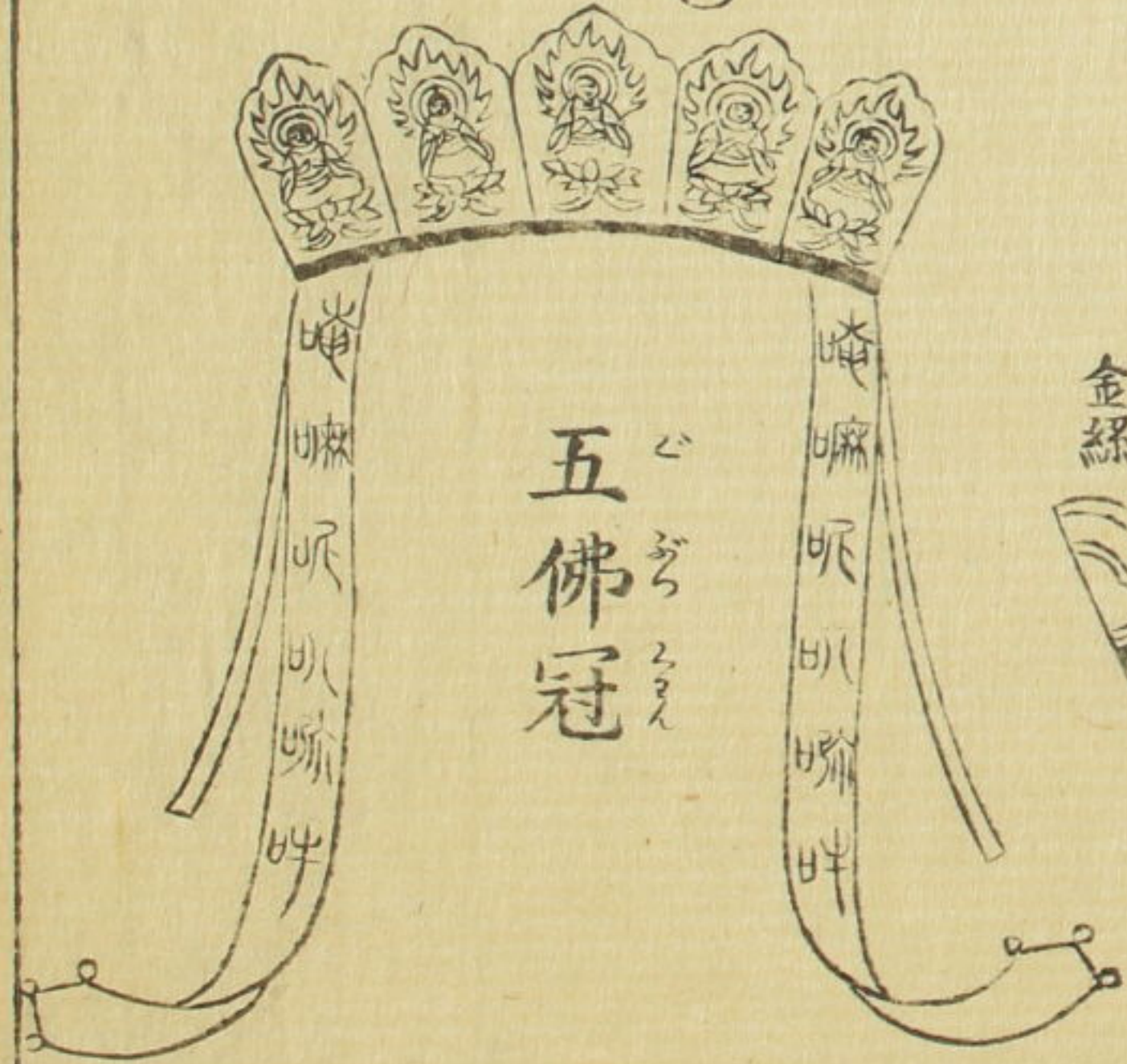




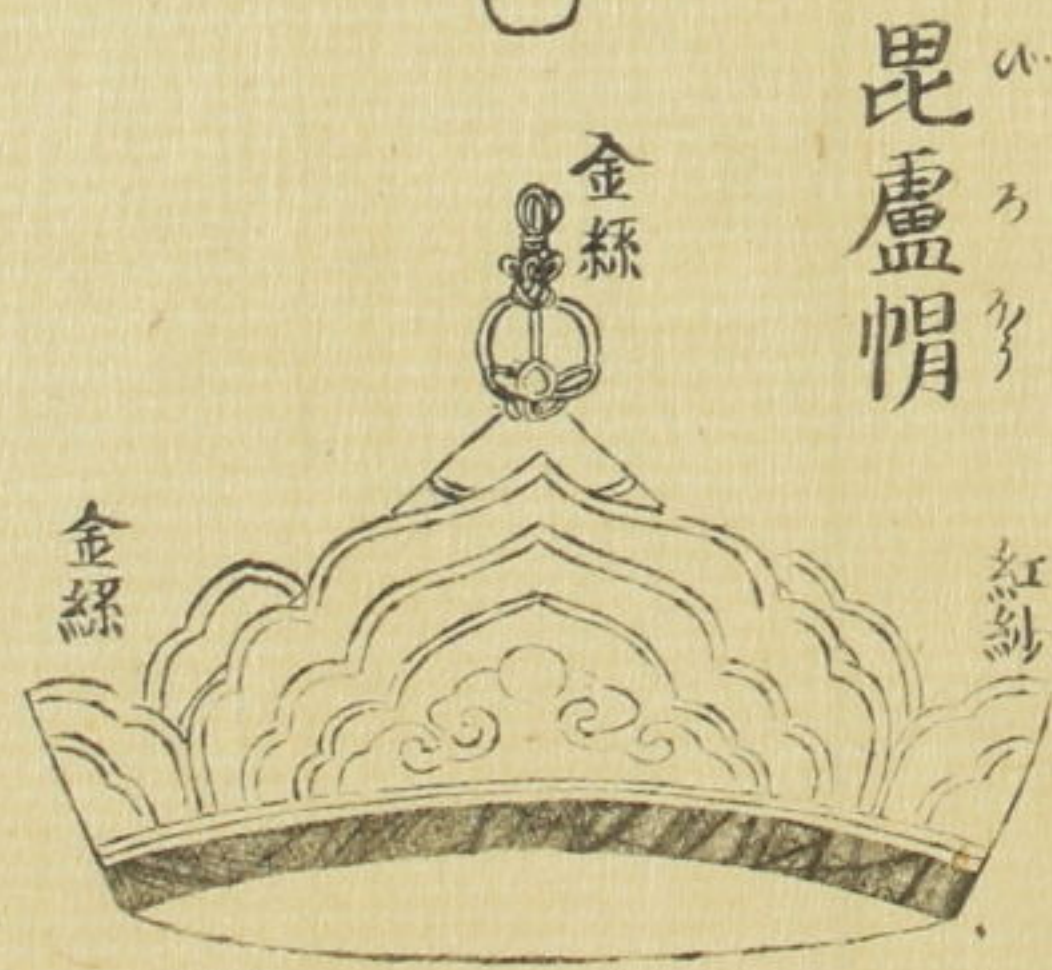
扶座鈴



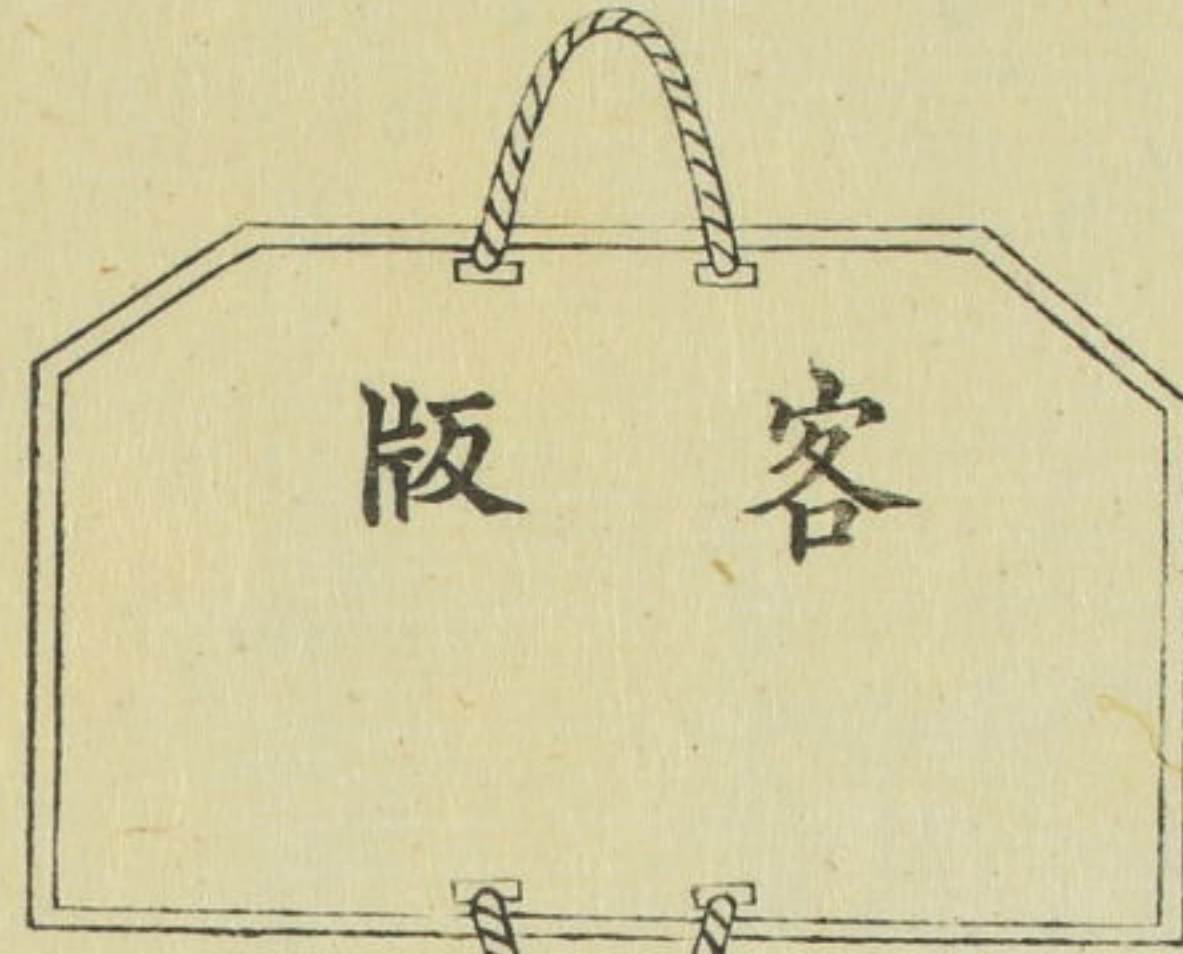
中座鈴



五佛冠



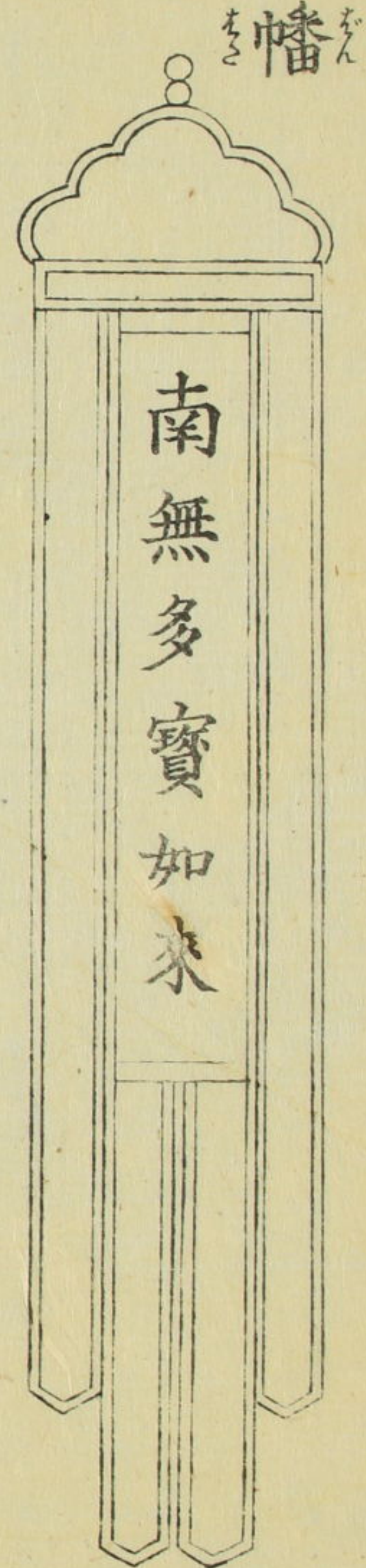
毘盧帽



客版

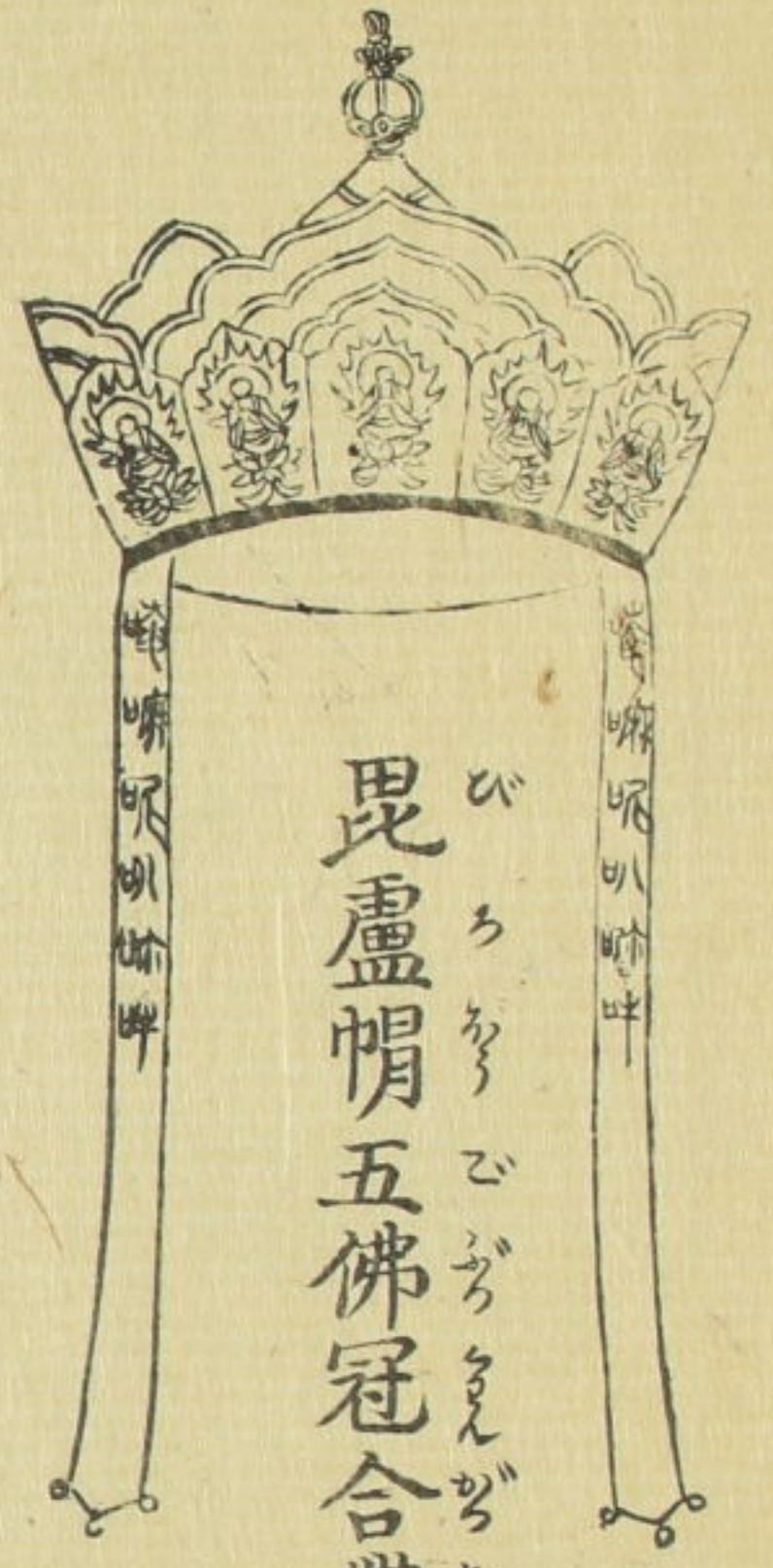
尊客欲入堂知賓鳴
版三下堂內開門

禪堂前客版



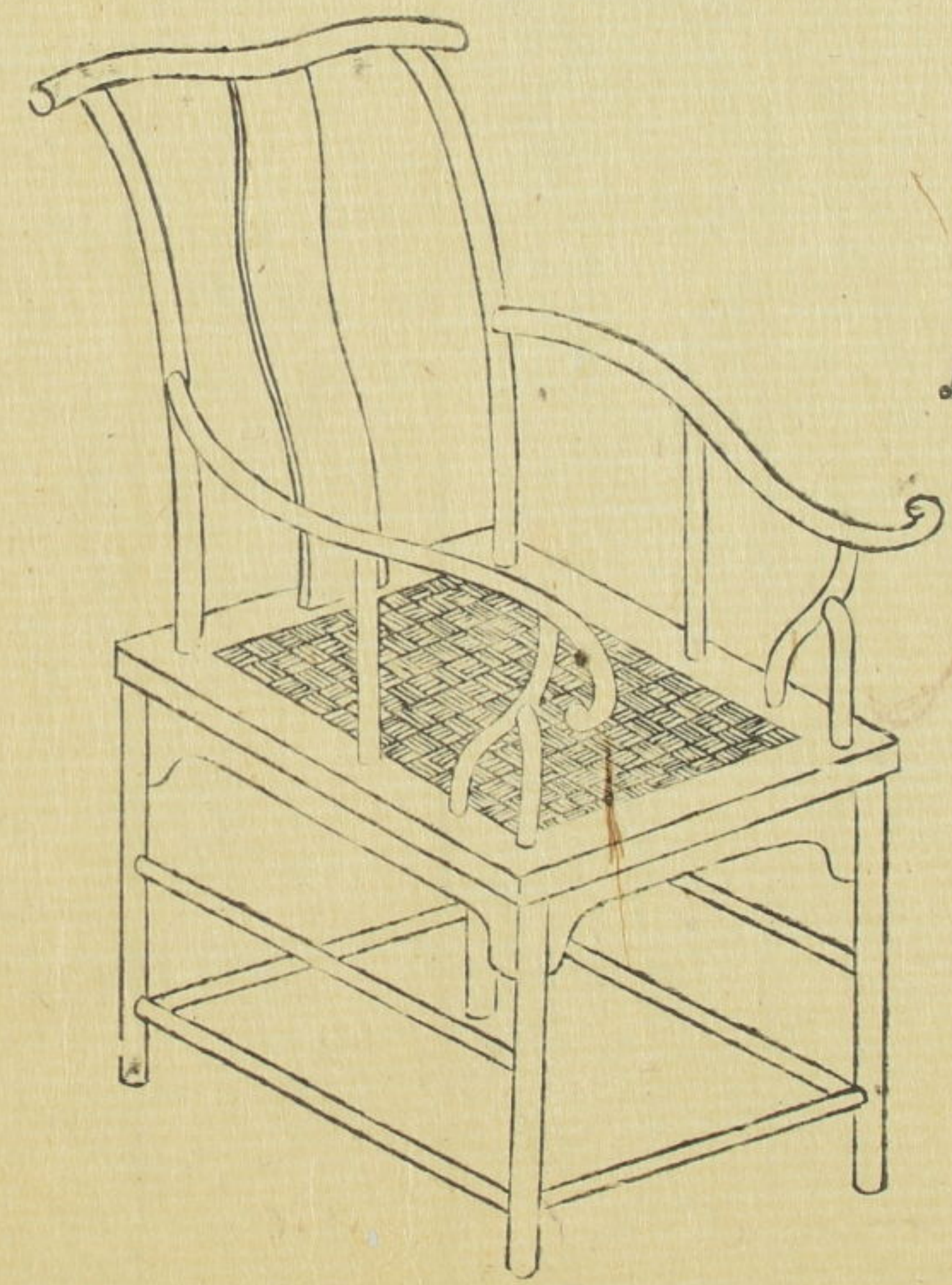
幡

南無多寶如來



毘盧帽五佛冠合帶之圖

椅子



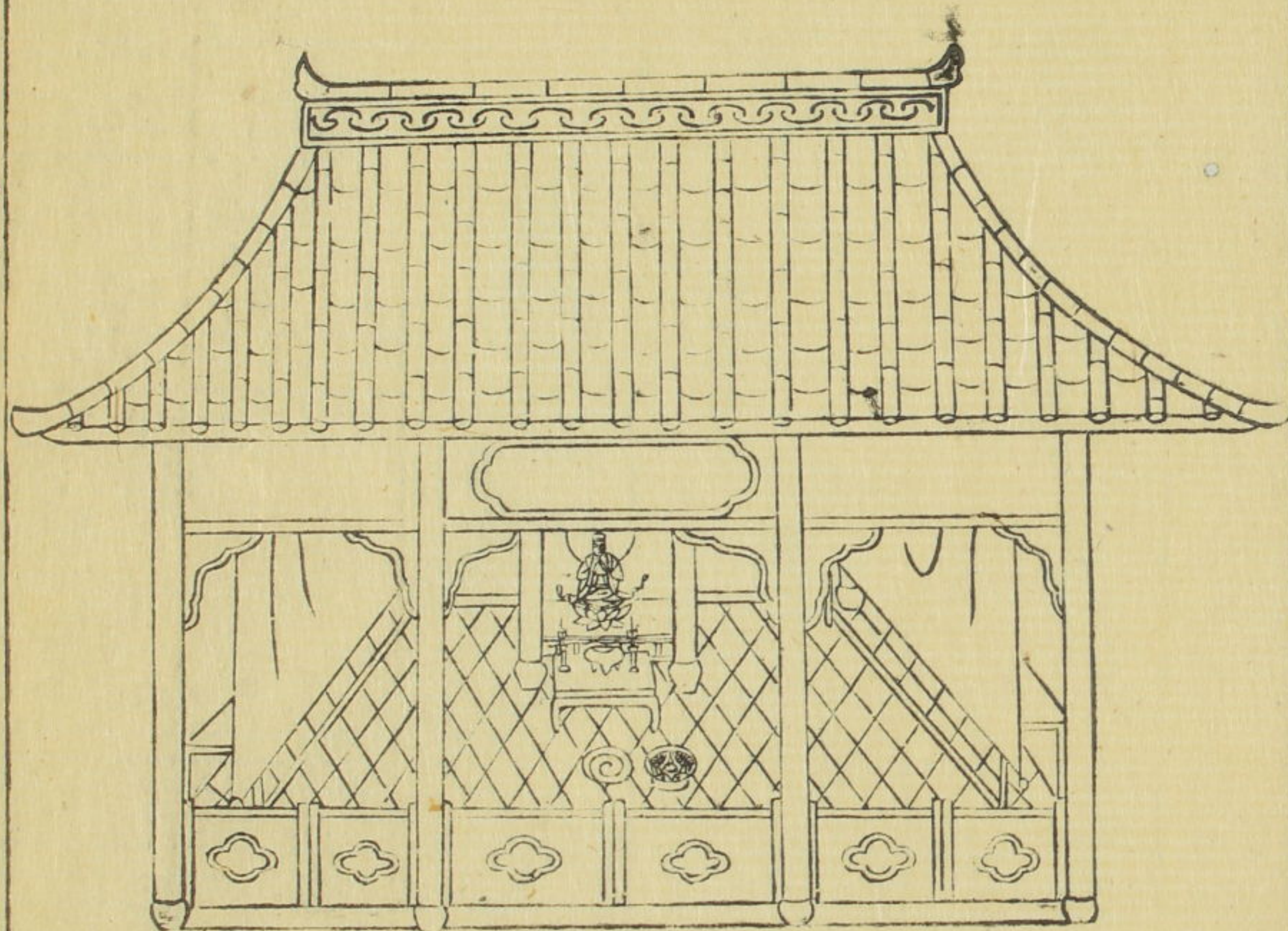
橘餅 杜綱 荔枝 其外砂糖菓子時候の菓物移く供具茶方二間高き二間を
 胡桃 荔枝 焔口壇を設け正南に觀音の像安置し寶鏡等の佛具を傍に
 香花點燈供物見合供具を定式の供物み茶一分盃饅頭七の酒水一盃此三品を
 借檀の向より同く焔口壇後の毘盧壇を設け上壇に七佛の名號を
 牌を傍に 阿難 引意 十方諸佛 下壇に面然大士護法龍天の牌を
 香花を借點燈供物等茶のおとくを定式の供物み茶一分盃饅頭七の酒水一盃此三品を
 さ三尺の食座を設け水陸一切男女孤兒等位と書記し香花點燈供物
 茶のおとく定式の供物み茶一分盃饅頭七の酒水一盃此三品を
 茶の高き二間廻り九尺の竹籠を山の形に捲く金銀の箔紙其外錢帛
 眞衣紙等みく張たる成二を一と金銀山一と錢衣山と記したる符籠代立細
 徑の僧七人 略すは五人 焔口壇み昇り奉位を金剛上師とす

僧徒

杖座有或副杖座と不淨元々其法へ並び何止も椅子み坐し下はら大轂小轂
小鏡鏡等傍付あり或誦經み連く大衆の内一人めく鳴以中經の僧ハ毘盧帽
との不佛冠を戴き鈴或振或は印代法信ハ其餘杖座の僧ハ本魚引鼓或打冥府の亡
魂悲度のため借へる不承代誦經中次第くく取捨酒水或はく饅頭水札字を
書食臺亦向く投捨尚又冥途ゆく金銀錢衣服を捨ふ意ゆく右金銀山錢
衣山或燒捨ふ此法は在家ありも至くそそ夜陰みおるふ九二回時程もか
水懺とく同く佛性或殺け香花點燈供物等縮りみおれくを定式の供物
ふく第一幅半同み長さ二回及の其法二行み其ふ僧五人宛都合拾人の僧
夫これ佛具或持何止も踏ん誦經あり此法は省畧す其一日み亦又三日程と
總ふあり縮り水懺とく本年忌法會み限りて家内安全病氣手愈等の祈
禱みも執りて何止も施主の与ら何せく自定みくも執行ハ其時と法具諸道

具寺より持越其供養み應て僧の多少ありを其時親類朋友をも招き
僧侶打逆齋非時等振舞奉あり法事畢しハ其日數みあふハ勞金やして
僧一人前二三十目と以下僧の高下施主の身分み應て送ふ奉等くハ若居
宅狭きや或は故障等ゆく寺に佛事を頼む時と前度某料を納止ハ施主
の求めみ應て供養ハ其時と寺ゆく齋非時の用意をれ施主あふハ施
主の親類朋友み施齋以此と施主の方と男女ともみ奉ふハ婦女の間と
別間み門ハハ附奉ふハ奴婢等終仕して僧侶と到來ハ挨拶禮儀ねを
此間み入るハ○在家の位牌或寺院み安をす奉奉ふれば奉ふハ位牌
堂とてみれりや格別寺みおれり功あふ檀越ハ別み位牌或安をす奉ふハ
香花を供養す奉奉あり○在家喪中の時ハ日誦經頼むもあり又七日毎
み頼むもあり何止も施主の求めみ應て喪葬の時と僧七八人もあり

禪堂之式

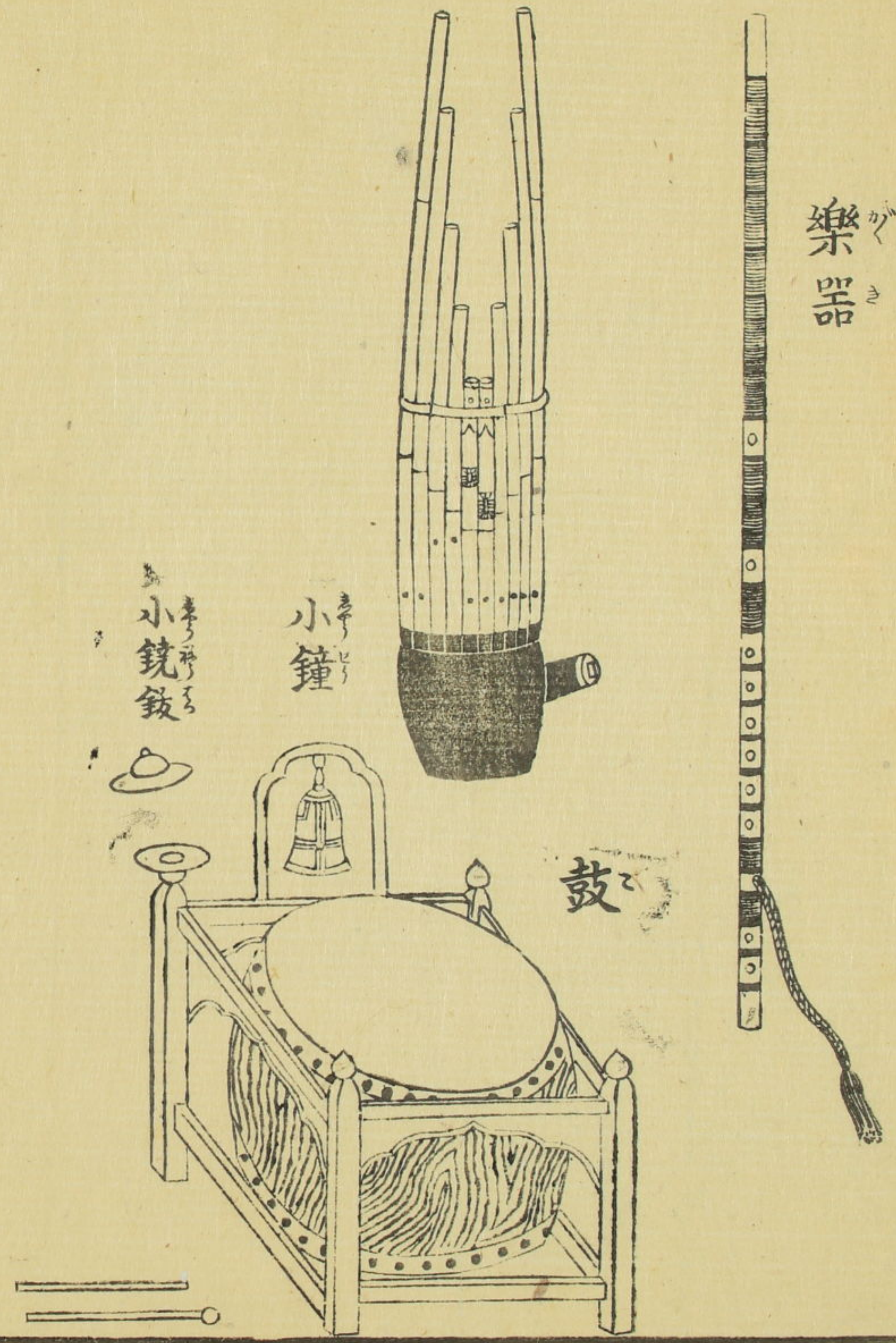


僧徒

二十

極の先母を平舟詣めくまゝの幅を持二行かゝり墓所近は
 添誦經を定式かゝり檀越より頼されば行事かゝり
 七月盆ゆり寺院おろく施餓鬼執行すか所もあり其寺の古格あり執
 行せざる所あり ○十二月八日を臘八といふ朔日とて八日の曉まで昼夜一山の僧
 禪堂おろくを座禪あふり八日ゆり菓茶の粥を炊り
 何れも吃し懇意の檀越も送ふ事あり
 御祈願所かゝり差極もか寺院かゝり御祈禱の旨の勅諭あり何れに
 何寺か付しおろく其寺の頼遣は又か官所の見事かゝり修
 けをふ事もあり其寺の頼遣は又か官所の見事かゝり修
 等を天子諸官所等へ獻すか事かゝり高樹と道家ゆり専ら行へども
 僧家ゆり専ら行へども

樂器



○官人責奉詣の節は常以達しおふ也其時刻の官位の高下によるは持指並に

役僧山門まで出迎もあつた及奉詣おはし禪堂おはさる客版とて不随成叩け法堂

の門代軍法僧徒らにせふ小宿おはしは役中出迎不た及れ時と鐘樓の鐘成

撞を鼓を打あひしと樂成養して佛殿諸佛拜奉を接客の各業同一と

更に方丈一俣の椅子を設け座成請く任持對座し知各側母侍も值座の名

茶菓子其外時候の菓物等差出はたしは母寒暖の挨拶おはして御食應おはむ

酒烟等々林おはして出さば歸かえのぶと山門を打おはしは客の家ま

香金とて多少おはしは金銀成るはし

○庶人奉詣の時の先佛殿お禮拜しおはし母もあつた又々客殿おはしは

体息を止む客お應し值座とて茶おはしは出はしはあり或は菓子菓物等おは

あつた其品等おはしは若は持お用向あつた又訪ひのたは見えはしは

座一有次成類^{（一）}方丈^{（二）}亦夫^{（三）}の面^{（四）}後^{（五）}以^{（六）}廢^{（七）}人^{（八）}より^{（九）}大^{（十）}戸^{（十一）}の^{（十二）}人^{（十三）}を^{（十四）}監^{（十五）}寺^{（十六）}を^{（十七）}客^{（十八）}者^{（十九）}
 の^{（二十）}送^{（二十一）}近^{（二十二）}此^{（二十三）}禮^{（二十四）}あり^{（二十五）}貴^{（二十六）}賤^{（二十七）}高^{（二十八）}下^{（二十九）}を^{（三十）}拘^{（三十一）}り^{（三十二）}ば^{（三十三）}客^{（三十四）}殿^{（三十五）}も^{（三十六）}至^{（三十七）}人^{（三十八）}を^{（三十九）}銀^{（四十）}錢^{（四十一）}の^{（四十二）}形^{（四十三）}列^{（四十四）}を^{（四十五）}見^{（四十六）}合^{（四十七）}を^{（四十八）}
 香^{（四十九）}金^{（五十）}を^{（五十一）}了^{（五十二）}る^{（五十三）}處^{（五十四）}あり^{（五十五）}又^{（五十六）}ら^{（五十七）}線^{（五十八）}香^{（五十九）}蠟^{（六十）}燭^{（六十一）}等^{（六十二）}送^{（六十三）}る^{（六十四）}婦^{（六十五）}女^{（六十六）}を^{（六十七）}詣^{（六十八）}の^{（六十九）}時^{（七十）}も^{（七十一）}佛^{（七十二）}拜^{（七十三）}の^{（七十四）}も^{（七十五）}申^{（七十六）}す^{（七十七）}
 亦^{（七十八）}歸^{（七十九）}ふ^{（八十）}も^{（八十一）}あり^{（八十二）}又^{（八十三）}暫^{（八十四）}く^{（八十五）}客^{（八十六）}殿^{（八十七）}も^{（八十八）}休^{（八十九）}息^{（九十）}す^{（九十一）}ふ^{（九十二）}も^{（九十三）}あり^{（九十四）}其^{（九十五）}の^{（九十六）}僧^{（九十七）}侶^{（九十八）}一^{（九十九）}人^{（一百）}も^{（一百一）}な^{（一百二）}ら^{（一百三）}ず^{（一百四）}ば^{（一百五）}
 婦^{（一百六）}女^{（一百七）}の^{（一百八）}付^{（一百九）}息^{（二百）}の^{（二百一）}所^{（二百二）}を^{（二百三）}別^{（二百四）}に^{（二百五）}設^{（二百六）}け^{（二百七）}り^{（二百八）}て^{（二百九）}其^{（三百）}の^{（三百一）}儀^{（三百二）}を^{（三百三）}示^{（三百四）}す^{（三百五）}も^{（三百六）}も^{（三百七）}な^{（三百八）}ら^{（三百九）}ず^{（四百）}ば^{（四百一）}
 持^{（四百二）}出^{（四百三）}ふ^{（四百四）}都^{（四百五）}く^{（四百六）}寺^{（四百七）}院^{（四百八）}も^{（四百九）}婦^{（五百）}女^{（五百一）}徂^{（五百二）}徊^{（五百三）}す^{（五百四）}ふ^{（五百五）}事^{（五百六）}望^{（五百七）}く^{（五百八）}官^{（五百九）}制^{（六百）}あり^{（六百一）}系^{（六百二）}詣^{（六百三）}進^{（六百四）}の^{（六百五）}事^{（六百六）}も^{（六百七）}苦^{（六百八）}し^{（六百九）}か^{（七百）}ら^{（七百一）}
 后^{（七百二）}宮^{（七百三）}の^{（七百四）}官^{（七百五）}女^{（七百六）}等^{（七百七）}寺^{（七百八）}系^{（七百九）}詣^{（八百）}の^{（八百一）}儀^{（八百二）}を^{（八百三）}天^{（八百四）}子^{（八百五）}御^{（八百六）}系^{（八百七）}詣^{（八百八）}と^{（八百九）}し^{（九百）}ば^{（九百一）}附^{（九百二）}随^{（九百三）}ひ^{（九百四）}系^{（九百五）}詣^{（九百六）}す^{（九百七）}止^{（九百八）}や^{（九百九）}も^{（一千）}
 官^{（一千一）}女^{（一千二）}を^{（一千三）}り^{（一千四）}系^{（一千五）}詣^{（一千六）}す^{（一千七）}事^{（一千八）}も^{（一千九）}一^{（二千）}
 年^{（二千一）}始^{（二千二）}と^{（二千三）}も^{（二千四）}官^{（二千五）}制^{（二千六）}の^{（二千七）}如^{（二千八）}し^{（二千九）}事^{（三千）}も^{（三千一）}檀^{（三千二）}家^{（三千三）}に^{（三千四）}任^{（三千五）}持^{（三千六）}自^{（三千七）}身^{（三千八）}年^{（三千九）}續^{（四千）}も^{（四千一）}事^{（四千二）}も^{（四千三）}あり^{（四千四）}又^{（四千五）}ら^{（四千六）}
 役^{（四千七）}僧^{（四千八）}の^{（四千九）}内^{（五千）}と^{（五千一）}も^{（五千二）}某^{（五千三）}山^{（五千四）}某^{（五千五）}禪^{（五千六）}寺^{（五千七）}納^{（五千八）}某^{（五千九）}叩^{（六千）}と^{（六千一）}書^{（六千二）}ふ^{（六千三）}帖^{（六千四）}成^{（六千五）}持^{（六千六）}く^{（六千七）}事^{（六千八）}も^{（六千九）}事^{（七千）}も^{（七千一）}あり^{（七千二）}外^{（七千三）}に^{（七千四）}
 札^{（七千五）}守^{（七千六）}等^{（七千七）}は^{（七千八）}事^{（七千九）}も^{（八千）}元^{（八千一）}旦^{（八千二）}と^{（八千三）}も^{（八千四）}二^{（八千五）}日^{（八千六）}と^{（八千七）}も^{（八千八）}在^{（八千九）}家^{（九千）}も^{（九千一）}事^{（九千二）}も^{（九千三）}あり^{（九千四）}在^{（九千五）}家^{（九千六）}懸^{（九千七）}去^{（九千八）}の^{（九千九）}方^{（一万）}に^{（一万一）}

常^{（一）}も^{（二）}往^{（三）}來^{（四）}談^{（五）}話^{（六）}す^{（七）}事^{（八）}在^{（九）}家^{（十）}の^{（十一）}者^{（十二）}凡^{（十三）}異^{（十四）}事^{（十五）}も^{（十六）}一^{（十七）}行^{（十八）}又^{（十九）}歲^{（二十）}暮^{（二十一）}も^{（二十二）}檀^{（二十三）}家^{（二十四）}
 野^{（二十五）}菜^{（二十六）}菓^{（二十七）}物^{（二十八）}拍^{（二十九）}漬^{（三十）}砂^{（三十一）}糖^{（三十二）}漬^{（三十三）}等^{（三十四）}は^{（三十五）}事^{（三十六）}も^{（三十七）}あり^{（三十八）}
 幸^{（三十九）}山^{（四十）}組^{（四十一）}合^{（四十二）}等^{（四十三）}の^{（四十四）}事^{（四十五）}も^{（四十六）}一^{（四十七）}御^{（四十八）}朱^{（四十九）}印^{（五十）}地^{（五十一）}と^{（五十二）}も^{（五十三）}事^{（五十四）}も^{（五十五）}な^{（五十六）}ら^{（五十七）}ず^{（五十八）}且^{（五十九）}後^{（六十）}任^{（六十一）}成^{（六十二）}定^{（六十三）}む^{（六十四）}事^{（六十五）}も^{（六十六）}一^{（六十七）}山^{（六十八）}
 の^{（六十九）}役^{（七十）}僧^{（七十一）}評^{（七十二）}議^{（七十三）}し^{（七十四）}任^{（七十五）}め^{（七十六）}堪^{（七十七）}ふ^{（七十八）}事^{（七十九）}も^{（八十）}傍^{（八十一）}を^{（八十二）}選^{（八十三）}む^{（八十四）}其^{（八十五）}地^{（八十六）}の^{（八十七）}如^{（八十八）}懸^{（八十九）}之^{（九十）}何^{（九十一）}に^{（九十二）}知^{（九十三）}録^{（九十四）}一^{（九十五）}存^{（九十六）}め^{（九十七）}く^{（九十八）}
 後^{（九十九）}任^{（一百）}中^{（一百一）}派^{（一百二）}さ^{（一百三）}し^{（一百四）}任^{（一百五）}め^{（一百六）}堪^{（一百七）}ふ^{（一百八）}事^{（一百九）}も^{（二百）}傍^{（二百一）}を^{（二百二）}選^{（二百三）}む^{（二百四）}其^{（二百五）}地^{（二百六）}の^{（二百七）}如^{（二百八）}懸^{（二百九）}之^{（三百）}何^{（三百一）}に^{（三百二）}知^{（三百三）}録^{（三百四）}一^{（三百五）}存^{（三百六）}め^{（三百七）}く^{（三百八）}
 名^{（三百九）}成^{（四百）}二^{（四百一）}人^{（四百二）}程^{（四百三）}も^{（四百四）}書^{（四百五）}出^{（四百六）}し^{（四百七）}官^{（四百八）}一^{（四百九）}更^{（五百）}中^{（五百一）}出^{（五百二）}官^{（五百三）}不^{（五百四）}の^{（五百五）}指^{（五百六）}揮^{（五百七）}も^{（五百八）}あり^{（五百九）}た^{（六百）}り^{（六百一）}た^{（六百二）}り^{（六百三）}官^{（六百四）}中^{（六百五）}
 一^{（六百六）}列^{（六百七）}の^{（六百八）}存^{（六百九）}あり^{（七百）}其^{（七百一）}有^{（七百二）}役^{（七百三）}傍^{（七百四）}中^{（七百五）}達^{（七百六）}一^{（七百七）}雙^{（七百八）}方^{（七百九）}一^{（八百）}更^{（八百一）}の^{（八百二）}上^{（八百三）}後^{（八百四）}任^{（八百五）}成^{（八百六）}定^{（八百七）}む^{（八百八）}小^{（八百九）}寺^{（九百）}の^{（九百一）}官^{（九百二）}不^{（九百三）}此^{（九百四）}評^{（九百五）}
 議^{（九百六）}も^{（九百七）}及^{（九百八）}ぶ^{（九百九）}○^{（一千）}後^{（一千一）}任^{（一千二）}進^{（一千三）}山^{（一千四）}の^{（一千五）}時^{（一千六）}に^{（一千七）}吉^{（一千八）}日^{（一千九）}成^{（二千）}擢^{（二千一）}入^{（二千二）}寺^{（二千三）}以^{（二千四）}其^{（二千五）}時^{（二千六）}を^{（二千七）}首^{（二千八）}座^{（二千九）}以下^{（三千）}の^{（三千一）}役^{（三千二）}傍^{（三千三）}
 山^{（三千四）}門^{（三千五）}外^{（三千六）}を^{（三千七）}出^{（三千八）}近^{（三千九）}ふ^{（四千）}此^{（四千一）}將^{（四千二）}格^{（四千三）}式^{（四千四）}の^{（四千五）}法^{（四千六）}治^{（四千七）}あり^{（四千八）}互^{（四千九）}も^{（五千）}礼^{（五千一）}拜^{（五千二）}身^{（五千三）}を^{（五千四）}寺^{（五千五）}内^{（五千六）}に^{（五千七）}且^{（五千八）}鐘^{（五千九）}を^{（六千）}撞^{（六千一）}太^{（六千二）}
 鼓^{（六千三）}を^{（六千四）}敲^{（六千五）}き^{（六千六）}知^{（六千七）}客^{（六千八）}も^{（六千九）}り^{（七千）}諸^{（七千一）}堂^{（七千二）}案^{（七千三）}内^{（七千四）}に^{（七千五）}拈^{（七千六）}香^{（七千七）}一^{（七千八）}式^{（七千九）}法^{（八千）}誦^{（八千一）}く^{（八千二）}方^{（八千三）}丈^{（八千四）}入^{（八千五）}暫^{（八千六）}く^{（八千七）}休^{（八千八）}息^{（八千九）}す^{（九千）}

僧徒

廿二

道士

道冠



○護符等の事ハ僧家ニ執リ世ハ道家ニ執ル道家ノ本尊ハ極々三清上

帝を祀ス三清上帝ハ中央玉清元始天尊右々上清靈寶天尊九々太清道德天尊道家も郊々寺と同様に一山あるも

市中に居位をなすあり社檀越等此事ハ俗家も知事あり道士も

廻々深山に入り法修行をなすあり俗家も知事あり道士も

且那と字事性古々わがよりあるも當時めり檀越との呼ぶ

○江湖より入る後夏此事ハ畧節とも在家の知事ありあり

清俗紀聞卷之十三畢

僧徒

每部有圖章須
認印信為真

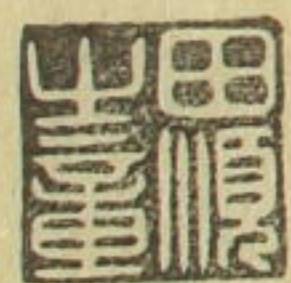
清俗紀聞跋

向者余之在崎陽也聽政之暇使官
屬近藤守重林貞裕問清高其國之
俗習輒隨筆焉又隨圖焉終成一書其
起稿之始余偶罹疾而百事皆廢及
愈瓜期已迫故未脫稿齋還江戸爾後

劇職不暇翻閱因命臣津田永郁校
訂分為十三卷示諸林祭酒請序其端
且請名書祭酒名以清倍紀聞且序而
還之或勸上本公諸同好遂命剞劂
不日而刻成矣澤正甫中伯毅亦序其
端嗚呼雖編輯之名在余彼官屬

等力實為多矣豈可虛其功哉因
備記与此役者姓名于卷末云寬政
己未冬十月中川忠英跋

赤峰脇田順書



大通事

高尾維貞

彭城 斐

清河 璧

平野祐英

彭城明矩

神代文鳳

穎川良友

彭城昌尊

吉島 潜

小通事

神代干貴

陽 忠廉

平井惟德

穎川惟賢

中山保高

彭城以貞

游龜 賢

石崎融思

安田素教

畫工

清國蘇州

孟

世燾

蔣

恆

顧

鎮

湖州

費

肇陽

杭州

王

恩溥

嘉興

任

瑞

周

恆祥

寛政十一年己未八月新鐫

官許

日光山志

植田孟縉編
諸名家之画

全五冊

當 寺山宏太 疆清淨の仙巖
五續先生 官に奉じて登
嶺 岨の層百尺乃樓閣
勸願 巖の奇蹟の奇品
自らの 巖の奇蹟の奇品
高貴の 巖の奇蹟の奇品
深まる 巖の奇蹟の奇品

東都書林

芝神明前

岡田屋嘉七

